

ものすごくエロい人間だからこそわかることもあるのかもしれない

佐渡カラ君

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クラスでも飛びぬけるほどエロい男子、筑波岳（つくば がつく）の、身の回りに起きる物語。

1話では本題には入らずに、ある1日の出来事を短くお伝えします。

（1話はくっそ面白くないです）

だんだん、ラブコメっぽくなっています。（と言うか、ラブコメです）

過去投稿作品のリメイクを開始しました。 随時過去投稿作品を削除していきます。

注意事項

- ・ 実話ではありません。
- ・ この話を読んで勃起しなくてもこちらは一切責任を負いません。
- ・ この話はオナニー用の作品ではありません。
- ・ どちらかと言うとエロい男性向きの作品ですので、そういうたぐいのものが苦手な人や、抵抗がある女性は閲覧を控えたほうがよろしいかと思います。とかいっついで、結果的にラブコメなんで大丈夫です。
- ・ R15作品ですので、15歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

目次

中学時代

学校での話	1
天然七海	5
ある日の出来事 第2弾	10
誰が好き?	14
明日の約束	16
同居?なのかな、1日目	20
思わぬお客様	25
お祭り (1)	29
お祭り (2)	33
お風呂	36
同居?なのかな、2、3日目	40
え?こんな時に?	44
告白(つて、恋ではない)	47
1度めは、東京。	53
Soba, Ramen, やっぱりYakisoba!	57
思い出は、省かれる。	62
修羅場	67
七海の好きな人。。。	71
・・・楽しいひと時	74
いろんな話 1	77
テーマパークに4人でお出かけ	82
いろいろ 2	89
新たな敵?	93

新たな敵? 2	97
ストーリーカーを捕まえる! 1	102
中学時代 リメイク完了	
学校での話 リメイク	106
天然七海リメイク	109
ある日の出来事 第二段 リメイク	114
誰が好き? & 明日の約束 リメイク	118
同居、なのかな? 1日目 リメイク	124
思わぬお客様 リメイク	130
お祭り (1) リメイク	135
お祭り (2) リメイク	142
お祭り (3) リメイク	148
同居、なのかな? 二、三日目 リメイク	155
美奈ちゃん!	160
告白 (つて、恋ではない) リメイク	166

中学時代 学校での話

さて、テーマパークの話を前回したわけだけど、いよいよ今回から本題に入ります。

夏休みも明けて、2学期に入って、まただるい3か月が始まった。でも、学校生活というものも楽しい。もう中学生生活最後の運動会も終わったから、もう大きな行事は10月中旬の合唱祭だけ。みんな、もちろん俺も含めて、一生懸命に歌の練習をしている。と、まじめな話になっちゃうと、読んでくれている方々もつまらないので、早速、始めよう。

今日、始業式の2日後に、学校に着いて机の中に教科書なんか入れようとしたら、机の中に紙が入っているのに気付いた。(またかー！ 筆者側の話だけど、「机の中に紙が」の部分の「紙」が「神」になったあ。前もどっかのサイトでこういう事あったな。) 丁寧に2つ折りにされてたその紙には「今日の昼休み、中央階段の踊り場に来てください」と書いてあった。たぶん、女子の字だ。でも、その紙には相手の名前は書いてなかった。何の話かは分からなかったけど、この感じは告白だろ！と思っただが、残念ながら俺には心当たりがない。

そんなことを思いながら過ごしていたら、あつという間に昼休みになった。俺は急いで踊り場に向かった。そこには、もう女子が待っていた。大川七海、この前テーマパークに行ったときに一緒に公衆便所に入った子だ。結構かわいい。ショートカットで、小顔で、背は148と小柄だけど、胸は結構でかい。たぶんCカップぐらいある。痩せてるから、それよりも胸が大きく見えるのは気のせいではないはずだ。俺と七海は、小学校6年間一緒のクラスで、中学になって1年生同じクラス、2年生は別のクラスになったけど、また3年生になって同じクラスになった。だから、下の名前で呼び合うまでの仲だ。そして、こいつもエロい。

「七海、どうしたの？」

「あのね、岳に相談したいことがあるの」「相談?」

「私が、田島君のこと好きなのは知ってるでしょ?」田島、この前テーマパークに行ったときにいたメンバーだ。

「ああ、6年時にお前が告白して随分と噂になったもんな。」

「うっさい!」彼女はそういって、おれのけつを付けてきた。

「いって!」おい、そういうことすんなら相談聞いてあげないぞオー」

「聞いてよー!」

「冗談だよ。冗談。」

「でね、この前みんなで遊んだ後に、田島君に告白したの。」

「そうだったの。で?」

「返事はオーケーだったんだけど…」

「おお、よかったじゃん。」

「田島君、勉強できるじゃない?国立高校(都立国立(くにたち)高校)行くとか言ってるけど私勉強できないから、がんばっても国分寺くらいしか行けないと思うの。」

「まあ、国分寺でも十分すごいと思うけどな。」

「ありがとう。でさ、高校別々になったら、会えなくなるじゃない?だからね、その前に思いでできるだけ作って、ついでに私から心が離れないようにしたいの。」

「は?」

「だから…」Hしたいの。」

「はあ? お前自分が言ってることわかってんのか?まだ中3だぞ。せめて大学生になってからにしろよ。」

「常識あるよね。岳。でもね、したいの。せつかく手に入れたのに、学校別々だからってほかの女の子たちに田島君を奪われたくないの。」

「うん、まあ、わかんなくも…いや、やっぱわかんねえな。」

とりあえずさ、ここで話すのはやめようぜ。今日、放課後空いている?」

「うん。」

「じゃ、家来いよ。それからもつと話聞いてやるから。」

「岳って、優しいよね。女子には。」

「まあね」

「けど、いつもエロ目線だよ。女の子のおっぱいばっか見てるでしょ？今も。」

「ツなんてこと言うんだよ。んなこと言ったらおまえだってなんかあれば男子の下半身の大事な棒ばっか見てんじゃねえかよ。前だって俺のが起ってるのに何で気づいたんだよ。それに胸見せやがってよ。」

「それは、そんな気分だったからだよ。それに、岳の：：おちんちん、：：いつも勃起してて大きいじゃない？だから、いつも、気になっちゃうの。」

前から聞きたかったんだけど、

何センチあんの？」

「俺か？　俺は、勃起してない時が7で、勃起したときが、
・・・15。」

長い付き合いなので、本当の長さを言ってみた。

「あ、意外にちっちゃいんだねえ。」

「なんだよそれ。内山なんて勃起しても9センチだぞ。」

それは、内山君ががり勉強郎で岳と違って全然エロくなくなかったからでしょ？エロくて15って何よ？」

「みんなそんなもんだよ。」

お前は男子の見

たことないからわかんねえんだらうな。」

「んなんしょうがないでしょう？岳だって乳首まで女の子のおっぱい見たことあんの？」

「ああ、あるよ。」

お姉ちゃんの。「と、中1の時の遠

足的なやつで七海がかかんだ時にポロリで乳首まで…」

「あ、そっかあ。お姉ちゃん美人でスタイルもよくてDカップだもんねえ。いつもでれでれだらうね。で、お姉ちゃんといるときいつでも起ってるんでしょ？」

その質問に、岳は階段をのぼりながら小声でこう答えた。

「おまえと一緒にの時はな」と。

「えつちよつ、どういう意味？」

「ほら、急がないと授業に間に合わないぞ。5時間目、第2理科室で理科だぞ」

「あ、そーだ。急がなきゃ。」

今日、家帰ったら急いで岳んち行くから、待っててね。さっきの意味も教えてよ。」

その時の彼女の笑顔は、とても忘れることができないものであった。

天然七海

家に帰った岳は、リュックサックを玄関に置く間もなく、1階のトイレに向かった。

いつもこうだ。学校で行かなくても我慢できるんだが、家に入ると途端に、尿道が開いてしまう。

20秒ほど出して手を洗い、ドアを開けたところにはなぜか七海がいた。

「ちよっお前なんでいんだよ」

「だって、急いでいくって言ったでしょ？」

「いや、そういう意味じゃなくて、なぜに俺んちのトイレの前にいるだっけ話だよ」

「だって、鍵空いてたんだもん。」

「でも、トイレの前にいるのはちよっとなんか……」

もしトイレのドア閉めてなかったらどうしてたんだよ。」

「うーん、顔だけトイレの中に入れて、挨拶するかな。」

「おい！七海さすがに常識なさすぎだろ。俺男子だぞ。男子がようたすときってちんこ出さないとイケないんだよ。」

「それはしってるけど、別にみても怒らないでしょ？ 私だって

おっぱい見せても恥ずかしくないし。」

「怒るわ！」

「あ、そう……ごめんなさい」

「話聞いてやるから、俺の部屋、2階。」

「うん、ありがとう。この家さ、いい匂い

するよね。」

「え？」

「ほら、ラベンダーの香りっていうのかなあ。」

「ああ、あれじゃない？ 大林製薬の玄関芳香なんチャラってやつ。」

「CMでやってるやつ？」

「多分、そうだと思う。」

ん、ここ、俺の部屋」

「なんだ、岳のにおいかと思った。」

「知らねえよ」

「お邪魔しまーす、あ、結構整ってるね。岳小学校のころから掃除とか大好きだもんね。」

そういつて、見透かしたように七海は入ってすぐのところにあるタンスの2段目を開けた。

「あ、そこはダメ！」

「なんで？」

あ、何これえ。」

「・・・オナホール」

「そんな恥ずかしいことじゃないじゃあーん。あ、ちよつと待って。」
そういつて、七海は家の玄関を出てった。

「おい、ちよつ・・・」

60秒くらいして、七海は戻ってきた。

「何してたの？」

「家行つてね、これ取ってきたの。」

彼女が持っていたバックから取り出したのは、バイブだった。

「なんでお前そんなもん持つてんだよ」

「じゃあなんで岳はそんな物もつてるの？」

「それは・・・」

「ほら、みんなおんなじだよ。」

バイブのおちんち

んと、岳の、どつちが大きいかな？」

「みせねえよ」

「別にいいよ。だってこのバイブのやつたぶん勃起した状態で18センチあるもん。これでも小さめのやつだよ？岳のは15センチだもんねえ。比べ物にならないよ。」

会話を聞いててもわかるかもしれないけど、七海はエロいけど常識がまるでない。どこかが少し抜けているところも、少しかわいいところだが。そして、岳は、別に恋愛対象として七海を見ているわけではない。しかし・・・

「あ、さつき昼休みの時に言ってた、私と一緒にいると勃起しちゃうつて、どういう意味なの？」

「ほら、七海、

胸でかいだろ。」

「はぁ！なあにそれ！

変態！

やっぱり岳工

口男だね。」

「うるせーよ。ね、6時くらいになったらお姉ちゃん帰ってきちやうから、早く話しよう。」

「うん。でもなんか、楽しいね。」

何話すか忘れちゃったあ。」

「だから、お前が田島のこと好きだから、Hしたっていう、話でしょ？」

「あ、そうだったね。」

・・・ねえ、どうやつ

たらさ、田島君とHするとき気持ちよくさせてあげられるのかなあ。」

「おまえが考えてるHって、なに？具体的に。」

「まず、フェラしてあげて、おっぱいさわらしてあげて、もんでもらって、sex・・・かな」

「七海、sexって、コンドームつけるよな？」

「もちろん！ そのくらい常識あるよ。」

「でも、田島、そこまでエロくないだろ？ 七海のためにコンドーム

なんて買ってくれるか？」

「そっか・・・ じゃあ、私が買おつかなあ。」

「恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしいけど、しょうがないじゃん。 sexしたいもん。」

「じゃあ、買えば？ 俺は買ってあげないからね。」

「わかってるよ。」

・・・ねえ、コンドーム買ってくれないって、岳が誰かとsexするとしても？」

「は？」

「例えば、私とか・・・」

「おまえ、、、 本当だったら、買ってあげても

いいかなあ。」

「じゃあ、2つ、買ってくれる？」

「は？ いや、例えばの話だよ。例えば。」

あのね、こんな年齢でsexなんてしたら、人生おかしくなるよ。」

「知ってるよ！岳にも前も言われたよ。でも、理由、知ってるでしょ？」

「じゃあ、がんばれよ。 応援だけしてやるから。 いやで、

sexの話はいいから、何が気持ちいかって話？」

「そう。ほら、女の子だったら、おまんこのところで気持ち良くなるでしょ？」

「・・・男子は、ここの亀頭つてところに刺激を受けると、快感を覚えて、精子がでてくるの。」

岳は渋々、七海が持ってきたバイブを使って説明をした。

「刺激って？」

「だから、オナニーするときはこの風・・・」

と、またバイブを使って陰茎をつかんで上下にピストン運動をする様子を見せる。

「岳も毎日これやってるの？」

「七海はどうなんだよ。」

「あ、そういうのずるーい。レディーセカンドだよ、レディーセカンド。」

「なんだよそれ。」

俺は、ほとんど毎日これやって、時々、オナホ（オナホル）つかってsexのまねしてる。」

「私も同じ。」

「どうせいつも田島のだと思ってやってんだろ？」

「いや、・・・岳のだと思ってやってる。」

「なんで！」

「私ね、実は1回岳のおちんちん見たことあるんだ。」

「いつ?!」

「去年、岳んちの水道が止まっちゃったときに家のお風呂岳が借りに来たでしょ？」

さっき言うのを忘れたけど、七海と岳は幼馴染だ。家も3軒となりだ。

「そんな時に、気を付けたんだけど、廊下と洗面所のドアが開いてて見えちゃったんだよね。気づいてなかったの？」

「気づいてなかった。」

「私、そろそろ帰るね。」

「ああ、ごめんね、ろくな話聞けなくて。」

「ううん、全然大丈夫。」

「じゃあね。」

「ん、明日ね。」

やばい、この数十分で、七海のことが好きになっちゃった気がする……

ある日の出来事 第2弾

「おっはよー」

教室に入った岳は、元気に挨拶をする。

「あ、岳、おはよう。」

「おう、優輝」

優輝と言うのは、田島のことだ。

岳は、自分の席に迷わず向かう。

「あ、七海、昨日の話の続き、いつか話そうと思ってるから、空いてる日教えてくれる？」

と、前の席の七海に話しかけながらさりげなく胸をもむ。(もちろん、ほかの人にばれない程度に)

「ちよっ変態！」

そうはいったものの、なぜか岳と七海の間には笑みがこぼれる。

「オツケー、 うーん、明後日なら空いてるけど。」

「わかった。じゃあ、またうちに来てね。」

「うん。昨日はありがとね。」

「いや、こちらこそ。」

「え？」

「楽しい時間を過ごさせてくれて、ありがとさん！」

「うんー！」

3時間目 体育の時間になった。

水泳ということで、水着にみんな着替えている。プールサイドに行くど、七海を含めた何人かの女子がもうたっていた。

・・・やばい、サポーターつけんの忘れたー

でも今から更衣室に行ったらなんか恥ずかしいし・・・

と、思いながら女子に目を向けると、なぜか勃起してきちゃった・・・

何とかプールの時間は過ぎたものの、その次の10分休みに七海に声をかけられた。

「ねえ、今日すごい岳のおちんちん大きくなってたでしょ?」

「おまえさ、人の前でそういうこと言うなよ。っていうか前から思ってたんだけど、七海おちんちんっていうのやめろよ。もう中3だぜ?」

「陰莖」とか、せめて「肉棒」ぐらいにしろよ。」

「でも、わたしが「おちんちん」って言ったほうが、「陰莖」って言った時より岳のおちんちんって陰莖、勃起するでしょ?」

「どういうところでサービス精神ばらまいてんだよ。そういうのは別にいいんだよ。」

「ふーん、じゃ、おちんちんっていうのは岳の前だけにするね。それならいいでしょ?」

「うん、まあ、いいけどさあ。男子は、七海が「おちんちん」って言った時より、七海の胸見えた時のほうが勃起すると思うよ。」

「何それ?」
はつきり言ってね、そんなこと思ってる男子で岳だけだよ?」

「んなことねーよ。ほかの男子だってお前のでっけー胸見て喜んでんだよ。ああ、でも、七海は男子が引くほどエロいから、みんな玲奈のことしか見てないかー」

玲奈と言うのは、クラスの女子で、多分男子の人気はナンバー1だ。文句なしの美人だし、優しいし、スタイルもいいし、なんとDカップ。ここまでいくと、なんか女子の魅力はすべて胸じゃないかっていう気がしてくる。しかし、もちろんそんなことはない。おんなの魅力と言うのは、もっと奥深くにあるものだ。そしてこいつも、岳と同じ小学校。

「はー!？」

そんなこといったら、岳だつてエロ

過ぎて女子からも全然相手にされてないじゃない。私が岳と仲良くしてあげてんの少し位感謝しなさいよ。」

「それはこっちのセリフだよ。」

「ふーんだ。こっちには田島君がいるもーん」

「じゃあ俺だつて2回や3回玲奈の家行つたし。2回や3回玲奈のDカップ揉んだし。」

「玲奈ちゃんばっかり。岳、玲奈ちゃんのこと好きなんでしょ?」

岳なんかただのエロ野郎って、この前玲奈ちゃん言ってたよ。あーらかわいそう。本当にかわいそう岳ちゃん。」

「岳ちゃんってなんだよ。幼稚園児の七海ちゃん」

「幼稚園児はこんなにエロくないもーん」

「楽しそうだね、エロ男ちゃん。」

岳が振り返ると、そこには噂の玲奈がいた。勢いよく後ろに振られた岳の腕は、玲奈のDカップの、拍手をしたくなるほど真ん中にあたった。

「うわ、気持ちい・・・あわわわ、嘘。今のウソ。ごめん。」

「やっぱりエロ男はエロいね。」

「いや、ほんとごめんってば！偶然だよ偶然。」

「わかってるよ。べつに触られてもそんなに恥ずかしくないし。」

「あ、七海と同じようなこと言ってる。」

玲奈もエロい

よな。あんまりみんなには知られてないけど。ま、こんなに巨乳な時点でエロくないわけがないよな。」

「は？それはエロ男のせいでしょ？」

「なぜに!？」

「だってエロ男が小学校のころからおっぱい揉んできたりエロ用語いっぱい言うてるからわたしだってそういうの覚えちゃってエロくなっちゃったんだからね。それに、エロ男がいっぱいおっぱい揉んでくるから、こんなに大きくなっちゃって・・・」

「それは俺のせいじゃねえよ。どっち道そういう道をお前は歩むことになるんだよ。」

楽しそうに話している岳と玲奈を見て、七海は口すらはさめずに、なぜか嫉妬心を覚えた。

しかし、そのたびに、「私は岳のことは好きじゃない、私は田島君のことが好きなんだ」と、自分に言い聞かせた。七海の岳に対する思いは、恋ではないのかもしれないが、これは友情と一言で片づけられるほど簡単なものではない、と、七海自身も分りかけていた。

実は、去年の修学旅行の時、七海は玲奈からこんな話を聞いたことがある。

「私ね、岳のこと好きかもしれないんだ。」

その時、七海はこう答えた。

「なんで？玲奈ちゃん、男子にモテるのに。」

その質問に、玲奈は否定せずに、こう答えた。

「なんか、空気が好き。」と。

その当時は、七海は全くそんなことは思っていなかった。

今頃になって、この時、玲奈にこう言ってしまったことを悔やんだ。

この時の自分が間違っていることに気づいた。

「がんばってね。たぶん、岳なら喜んでHしてくれると思うよ。」

「岳とHするのは、私だ。」

七海は、謎の決心を心の中でした。

しかし、そんな七海の乙女心にも気づかず、岳と玲奈は会話を弾ませているのであった。

誰が好き？

水泳の授業の時にサポーターを着け忘れた日から2日が経った。
(作者さん、恥ずかしいからそんな前のことを今から蒸し返さないでー)

今日は、七海とまた話す約束をした日だ。

ここで、岳や七海が通っている学校について簡単に説明しよう。

ここは、埼玉県某所の「所沢市立南中学校」。(いつけねー場所言っちゃった。でも適当に知らない場所について書いたから、そんな中学校があんのかどうかもわかんないが・・・)

そして、岳たちのクラスが、3年3組。んなもんでいいだろうか？
ちよつと楽しみだったので、岳は急いで家に帰った。

前みたいなのがなないように、ちゃんと玄関の鍵も閉めて、トイレに向かった。

数秒間用を足していると、聞き覚えのある声で「岳ー」と呼ばれた。
なぜだ!!!なんでまた七海が家にいるんだ!

用を足し終えて、急いでトイレのドアを開けると、七海の胸と腹のあたりがぶつかった。

「おう、、つて七海、なんでまたいんだよー!」

「だってー、岳、玄関のドア、鍵さしたまま家は行っちゃったでしょ？外に丸見えだったよ。カギ。私がとってなかったら、この家に泥棒はいつてたかもよ。」

「それはありがとうだけど、ごめんくださいくらい言えよ。」

「言ったよ。でも、岳がトイレでおしっこしてるときの音しか聞こえてなかったんだもん。」

「そ・・・ごめん。」

俺の部屋、行っ

ていいよ。」

「ん、ありがとう。」

・・・弾力あった?」

「何が?」

「私のおっぱい。さつき当たったでしょ?」

「え?ん、うん」

「その時の弾力、私のと、玲奈ちゃんの、どつちがあつた？」

おそらく、玲奈のと言うのは、2日前のことだろう。俺の肘が当たった、あれだ。

「七海の・・・かな。」

「やったー！」

「なんでやったーなんだよ。」

「ねえ、知ってる？玲奈ちゃんってね、岳のこと好きなんだよ。」

「へー、そうなんだ」

「あとね、もう1人ね、クラスでね、岳のこと好きな子がいるんだよ。」

「誰だよ、それ。」

「誰だと思う？」

「うーん、美雪？」

「違う。」

「じゃあ、咲江？」

「ちがうよお。もつとね、おっぱいが大きいよ。」

「胸がでかい？たしかに2人ともAカップだけど・・・」

つてことはBカップ以上だろ？Bカップ以上はー、朱里と恵美

と紗枝と・・・しかないなくね？」

「もつと近くにいるよお。ほら、今も・・・」

「七海？」

「そう、私、多分岳のこと好きなんだ。」

「多分ってなんだよ」

「わかんないの。告白しちゃったときは、絶対田島君のこと好きだったはずなのに、なんかもう、じぶんがなんだかわかんないの。」

だからね、玲奈に勝ちたいの。今日ね、実はね、ブ

ラ着けないできたんだ。」

「じゃ、揉み放題だな。」

「うん。どんどん揉んでいいよ。」

「オツケー」

とは言ったものの、岳は七海の変態ぶりが心配になってきた。

明日の約束

「あー、岳の部屋涼しい」

冷房あつたつけ？」

「ああ、昨日工事したの。」

「あ、だからか。昨日、なんか大きいトラック来てたもんね。」

そう話しながら、2人は岳のベットの並んで座る。

「どうすんだよ。お前が優輝（田島）のこと好きだって言ったから、相談のつてやってんのに。当の本人が、その、俺のさ、事を、好きかもしれないって……」

「どうするって?」

「だから、何の目的で、何を相談をこれからするかって話もそうだし、なにより田島にこれからどうやって向き合うかっていう……」

「でも、田島君を嫌いになったわけじゃないの。多分、恋愛的に好きなのが、田島君で、一緒にいて楽しいっていう感じの好きっていうのが岳、かなあ?」

「かなあ? ってなんだよ。お前の心の中のことかわかるのは、お前だけなんだから、もうちよつと責任もって自分の心を整理しろよ。」

「そうだよね。」

時々さ、岳っていいこと言うよね。」

「だろ?」

「女の子に格好つけようとしてんでしょ?」

「なんで七海はいつもそういう考え方しかできないんだよ。」

そう、言いながら岳はなぜか七海の胸に目を向けてしまった。

「あ、またおちんちん大きくなって。見たでしょ?」

「七海がノーブラで来るからいけねえんだろ。それにTシャツ1枚だしよ。」

「そうだけど。」

あ、そうだ! 明日と明後日、うち、誰も

いなくなるんだけど、寂しいから、ここ泊まっていい?」

「明日と明後日…… 家もちょうどお母さんとお父さん海外出張でお姉ちゃん修学旅行なんだけど。」

「ほんと!」

じゃあ、泊まっていい?」

「え、土曜日に来て、土曜日に寝て、日曜日寝て、月曜日に出ていくの？」

「そうじゃない？」

「まあ、いいと思うけど、月曜学校だぜ？」

「じゃあ、荷物持ってくる。枕と、勉強道具と、あとリュックと、お箸と、コップと、歯磨きセットでしょ。あとは・・・あ、服もいるね。」

「今考えなくていいだろ。っていうか、枕っているか？」

「だっていつもの枕じゃないと寝れないんだもん。」

あ、膝枕してあげる、なんていわれても、だまされないからねー。」

「なんで俺がお前に膝貸さないといけないんだよ」

「だってどうせそれで私のおっぱい見ようとか考えてたんでしょ？」

「考えてねえよ。」

「あ、あとお風呂も入らなきゃ。」

「え？お風呂も家なの？」

「もちろん。　じゃあバスタオルがいるね。　お風呂一緒に入った

りはしないからね。」

「誰がするかお前なんかと！」

「そっか。さすがにそんなことは考えてないか」

「あつたりまえだろ。」

あくまでもおれと七海は友

達同士だからな。」

「わかってるよお。」

「寝るとき、どうすんの？」

「どうすんの、って？」

「どっちがベットで寝る？」

「2人で寝れないの？」

「寝れるよ。でも、七海、確か寝相めちやくちや悪かったろ？」

　去年の修学旅行の時、七海と同じ部屋だった女子が、何人か愚痴を言っているのを聞いた。

「じゃあ、やっぱりお客様の私がベットじゃない？」

「2回寝るときあんだから初日は七海で2日目俺だろ。」

「えー　いつも女の子には優しいのにー。もうみんなに言っちゃおっ

かなあ」

「おまえ俺と一緒に寝たって話して、恥ずかしくないのかよ。」

「だって、自慢になるでしょ？特に玲奈ちゃんには。」

「じゃあ、優輝に知られたらどうすんだよ。」

「あ、そっか・・・」

「2回とも、七海がベットで寝ていいから。」

「やったー！」

「無理やり感半端ないだろこれ。」

「はあー、今日も疲れたね。」

七海が、ベットに寝っ転がりながら言う。

「ああ、疲れたね。七海と一緒にいて。」

「なにそれー」

そういいながら他人の布団の上で暴れる七海。

「あ、朝ちゃんと綺麗に布団片づけたのに、こいつぐちやぐちやしやがってー。」

そんなことを言いながら、2人でじゃれていたら、なにか、床ドンみたいな形になってしまい、

「あ、床ドン！・・・ってというか、布団ドン！あくあ、玲奈ちゃんに言っちゃおう。」

「なんでいつも玲奈なんだよ。」

「だって、岳、玲奈ちゃんのこと好きだから、玲奈ちゃんに知られたらはずかしいでしょ。」

「恥ずかしいは恥ずかしいけど、俺が好きなのは、七海だよ。」

「えっ」

「ほら、じゃ、明日、ちゃんと荷物持って、来いよ。」

岳は、七海のCカップを揉みながら言った。

「あ、またあ。」

玄関まで見送った岳は、続けてこう言った。

「楽しみにしてるよ。」と。

その言葉に、七海はなぜか敬礼ポーズをしながらこう答えた。

「私も！」

その七海を、岳は、七海が数十メートル先で何も無いところで転ぶところまで見て家に入った。

同居?・なのかな、 1日目

土曜日の朝、6時にお姉ちゃんは出て行った。でもそのせいで早く起きすぎて、2度寝してしまいそうになったが、七海がいつ来てもおかしくないの、起きていた。たぶん朝の10時くらいに来るかなーと思っていたが、まさかの朝の7時30に来た。

「お邪魔しまーす」

「早くね?」

「だって朝ごはん1人作れないから、岳に作ってもらおうと思って」
「なんだよそれ。そんなんじや彼氏できねえぞ。」

「余計なお世話だよ。」

「昨日、俺んち出て行ったあと転んだけど大丈夫だった?」

岳は、笑いながら聞いた。

「ああ、昨日ね、カエルがいたから、びっくりしてころんじやって。」
「まじで?」

「うん。ほら、家の隣の小さい男の子が、カエル飼ってるの。」
「へー」

「あれー?岳そういう動物苦手じゃなかったのかなあ?」

「苦手じゃねえよ。」

「だってー、小1の時遠足で動物園行ってカエルを見るっていう特別企画のやつで逃げ回ってたじゃん。岳。」

「なんで七海はそんな昔のこと覚えてんだよ。」

「しらなーい」

「七海だって虫苦手だろ?」

「それは乙女だからだよ。」

ね、ご飯食べよう。」

「俺もろくなもん作れないけど、いい?」

「ろくなものって?」

「目玉焼きとか、チャーハンぐらいかな…?」

「えー!3日間全部それ?」

「ほかのも作れるよ。」

と言って、岳は家にあるもので何か作ってあげることにした。

「朝ごはん、ご飯とパンどっちがいい？」

「うーん、いつもはご飯。」

「じゃあ、ご飯にするよ。」

岳もいつもご飯なので、昨日の夜にご飯を炊いておいた。

ということ、ご飯と、インスタントの味噌汁と、焼きシシヤモと、ミニトマトと、ベーコンと目玉焼きを一緒に炒めたやつと、アスパラガス炒めたのを作った。

「うわー、おいしそうだね。岳、こういうの作れるんだね。」

「なんだよ、何も作れないやつがよ。」

「何も作れないわけじゃないよ。カップラーメンくらい作れるよ。」

「カップラーメンは料理じゃねえよ。」

「あとは醤油ごはん！」

「それは米炊いて醤油かければいいだろ。」

「でもお米炊くのも大変だよお。」

「どこが大変だよ。ほら、早く味噌汁食べろよ。冷めるぞ。」

「あ、この味噌汁、おいしい〜」

「インスタントだよ。」

「・・・そうだったの？」

ごめん。

でもね、この目玉焼

きのやつもおいしい。」

「そう、ありがとう。」

十数分で、2人は朝ご飯を食べ終わった。

「これからどうする？」

「私、ねむーい。」

「は？」

「だって、昨日、楽しすぎて寝れなかったんだもおん。」

甘えるように話す七海に対して、岳は、

「俺も」

と答えた。

それから、岳と七海は岳の部屋に向かった。

「勉強したほうがいいんじゃない？結局国校（都立国立高校）目指すんだろ？」

「でも無理じゃん。」

「無理なんてことねえだろ。」

「岳はどこ行くの？」

女子高に交じっていけば？いろんな

おっぱい見放題だよ。」

「無理に決まってるだろ。俺は立校（都立立川高校）行く。」

「へえ、あそこもいとこだよね。」

あれ？確か玲奈ちゃん

も立校行くとか言ってた気がする。私も行こうかな？」

「うわ、お前いたらやだわ。」

「なんでよく」

「嘘だよ。またいっぱいお前の胸見れるから大満足だよ。」

「あ、また見てるでしょ？」

「みてねーよ。もしかして、きょうもノーブラ？」

「やっぱり見たんだ。」

「いやだからノーブラなの？」

「そうだけど、確かめてみる？」

「じゃあ確かめてみようかな、触って。」

「いいよ、触って。」

「え？」

「触りたいなら触りなよ。」

「いいよ今は。後で気まづくなるから。明日な。」

「ほんとに？じゃあ私も岳のおちんちんいっぱい触っていい？」

「もちろんズボンの上からだよ。」

「私が生でおっぱいさわらせてあげても？」

「生では触らないし、じゃあパンツの上からな。」

「やったく」

「ほらほら、勉強しようよ。」

「でも、机1個しかないじゃん。」

「机って数え方〇〇個だっけ？」

「そんなのどうでもいいからさ、どうすんの？」

「2人で同じの使うのは、、、無理だし、、、」

「無理じゃないよ。」

「でも椅子一脚しかないけど。」

「岳がまず椅子座って、その上に私が座るっていうのは、どう?。」

「それじゃあ七海しか勉強できねえじゃねえかよ。」

「できるよ、ちよつと、下に座ってみてよ。」

「え〜」

仕方なく、椅子に座る。

「うえ、座るよ。」

あ、痛い。

岳おちんちん

おつきくなってる。

もうう、エロいことばっか考えてるか

ら〜。」

「ちげーよ。」

だって、俺の上に七海乗った

ら、とんでもない光景に見えるだろ?。」

「とんでもない光景って、sex?」

いいじゃん、誰も見て

ないんだから。」

「気分的に嫌だよ。」

「じゃあ、岳と私上下逆にしたら?。」

「ああ、そうだね。」

「いいよ、上座って。」

「Thank you... (サンキュー)」

あ、これい

いじゃん。俺のほうが勉強しやすくなるし。」

「そう、だね」

「な。」

と、岳が後ろを向いた時だった。

「何七海、乳首起つちやってんの?。」

「だってー、なんか恥ずかしいんだもん。おっぱいも当たりそうだし。」

「誰だよさつきいっぱい触ってって言ってたやつ。」

「だっていざとなるとなんか恥ずかしいんだもん。 どうする? 椅

子。」

「あ、なんだ。椅子なんかさ、リビングから持ってくればいいじゃん。」

「そうだね。岳、持ってきてよ。」

「ん。」

「私、トイレ行ってくるね。」

「わかった。」

しばらくして、トイレから「きやつ」という声が聞こえたので、岳は急いでトイレに向かってトイレに入った。

しかし、中を見ると七海が下半身裸だったので、とっさにドアを閉めて七海と話した。(マン毛がなくてツルツルっぽかった・・・)

「だい・・・丈夫?」

「だいじょうぶだけど・・・」

「どうしたの?」

「パンツ脱いだら、まん汁がべとーってなってる・・・」

「っていうか、みたでしょ!?!」

「見たよ。ごめん。」

「感想は?」

「は?」

「わたしのおまんこ見た感想。ほら、前から岳クラスですつとおまんこ見せてよって言ってたじゃん。」

「え、ツルツルで、」

入れたら気持ちよさそうだったよ。」

「入れてみる?」

「だから入れないって。早く、出すもん出せよ。椅子、持ってきたから、勉強、早くしよう。」

「うん。一緒に、立校行こうね。」

「なんだよお前行く気になったのかよ・・・」

「だって、玲奈ちゃんと岳が仲良くなったらいやだもん」

「じゃ、がんばれよ。」

そのあと、何もなかったかのように2人は勉強に励んだ。

思わぬお客様

「ね、お昼食べようよ。」

約1時間の静寂（勉強してたから）を破ったのは、七海だった。

「そうだね。何がいい？」

「チャーハン！か、ラーメン！か、中華スープ！」

「ん、中華系ね。」

・・・ちよつと買い出し行つてく

るわ。たぶん材料全然そろわないと思うから。」

「ステンデーズ？」・・・というのは、この家から徒歩1分ほどのところにあるコンビニエンスストア。全国展開はしていないようだが、ここでは人気がある。（らしい・・・）

「そうだけど。」

「じゃ、私もいっしょに行く。お菓子も買う。」

「え？お前の金だよな？」

「え〜〜、カムカム巨峰ぐらいかつてよお〜」

「わかったよ。その代わり俺が買うはずだったウマシ棒30本お前のおごりな。」

「それはずるいよ〜。」

だって10×30つて・・・???

300でしょ？」

「けいさんおせえよ。」

「カムカム巨峰税込みで150円もいかないよ。じゃあさ、私が、カムカムスモモ買ってあげるから、ね？いいでしょ？」

「わかった。行くよ。」

ステンデーズに入った2人は、偶然、玲奈にあった。

「エロ男と七海ちゃん、デート？」

声みんなにまるぎこえだけ

ど。」

「デートじゃねえよ。つてか、なんで玲奈いんの？」

「家は、今日だれも家族いないから、お昼ご飯作る材料を買いに来よう

「と思って。」

「あ、おんなじだね。私たちもね、お昼ご飯岳が作ってくれるっていうから、、、」

「おいっ！七海、何言ってるんだよこいつー」

「といわんばかりに、岳は七海の口を手で押さえる。」

「何？七海ちゃん、エロ男んちにお泊りしてるの？」

「ああ、もう言い逃れできない・・・」

「だから・・・ 俺も七海も、ここ2日間誰も家族いないから、

七海が俺んちに泊まりに来たの。」

「いいなあ、七海ちゃん。私も今日だけ泊まっちゃダメ？」

「別に、わたしはいいけど・・・」

「岳が、玲奈ちゃんいると緊張しちゃうんじゃない？」

「なんでだよー！」

「だって、Cカップの私で緊張しちゃうんだから、Dカップが居たらおちんちんもうバリバリのカッチカチだよね〜」

「じゃあ、泊まってるの？」

「うん、別にいいよ。でも、ベッドどうしよつか。」

「私と玲奈ちゃんが、ベッドで寝て、岳は、下。」

「いや、一応俺のベットだからな。」

「レディーたちが岳のベットでねてあげるっていつてあげてんだから、感謝しなさいよ。2日目は岳がベットで寝ていいから。」

「なんで上から目線なんだよ」

「あ！ねえ、カムカム巨峰、買って。」

「ん。」

「え〜 いいなあ。ねえ、エロ男、私にも買ってよお。」

「え〜!!!なぜに？ お前絶対金めっちゃ持ってんだろ。」

「七海ちゃんにはかってあげるの？」

「玲奈は、ほかのお菓子探しに夢中の七海に聞かれないように、岳の耳元で小声で、

「夜、七海ちゃんに内緒でいっぱい私のおっぱい触っていいから。」と言った。

「・・・分かったよ。」

結局岳は、七海にカムカムスモモを買ってもらう約束も忘れ、カムカム巨峰とカムカムスモモを買ってあげるのだった。

「ありがとう、岳。」

「1こくれよ。」

「うー、あげてもいいよ。」

「上から目線・・・」

まあいいや。ありがとう。

ん、お

いしいね。これ。酸っぱいけど。」

「わたしのもあげる。」

玲奈は、七海と岳の会話に対抗するように、岳に話しかけた。」

「サンキュー」

お、これもおいしい。

でも、

やっぱり巨峰のほうがおいしいな。最初からあんの巨峰だもんな。」

「岳、結局お昼はチャーハン?」

「そうする。」

「やったー!私チャーハン大好きなの。」

「この前キムチチャーハンが給食で出た時3杯お代わりしてたもんな。七海、意外に大食いだよな。」

「玲奈、お昼は家で食べるの?」

「家って、岳の?」

「あ、うん。」

「食べていいの?」

「材料は足りるけど。」

「じゃあ、頂こうかな。」

「えつと、お箸と、コップと、あと寝間着とか、いろいろもってきてくんない?」

「わかった。」

「じゃあな、玲奈が来るまでお昼食の待ってるから。」

「ありがとう」

「玲奈、来るのよかったのか?」

「別にいいよ。1日で帰るみたいだし。2日目は岳といっぱいHでき

るもん。」

「だからしないって。 うわっ！カエル！」

「ほら、やっぱ岳苦手じゃん、こういう生き物。」

「どうでもいいだろ。」

「きやあ！トンボ！」

「おまえもじゃねえかよ。」

「いいの。」

「はいはい、分かったよ。」

「でも、俺は、苦手なわけじゃないからな。嫌いなだけだから。」

「それを、苦手っていうんだよ。」

「ちげえって。嫌いは、嫌いで、苦手は苦手だよ。」

「違う。嫌いは苦手で、苦手は嫌いなもの。」

そんなくっつだらない言い争いは、家に着くまで続いた。

お祭り (1)

七海と岳が岳の家に帰ってきてから20分ほどして、玲奈が大きな荷物を持ってきた。

「ごはん、できてるよ。」

「ありがとう。」

「岳、何チャーハン？」

「え？何チャーハンかはわかんないけど、普通にコンソメで味付けしたやつ。」

「好きだよ、そういうの。」

「そう？よかった。」

「あ、おいしい。こんなおいしいチャーハン久しぶりに食べた。」

「岳、確かにこれおいしい。給食のよりは確実においしい。」

「何それ、褒めてんのか？」

「うん。だって給食のチャーハンっておいしいじゃん。」

「おいしいけどね、・・・」

「あ、今日、佐志眞流（さしまる）神社の夏祭りじゃなかった？」

佐志眞流神社の夏祭りは、この近所では結構有名なお祭りで、レベルの高い屋台も結構出る。

「まじで？玲奈。」

「だってほら、本当は先週の予定だったけど、雨だったから延期になったじゃん。」

そう、この夏祭りは、雨でも中止にならずに延期になるところもいろいろある。

「だね、行く？」

「3人で？」

七海の質問に、岳は少し答えに迷った。3人で行けるのはうれしい。だけど、玲奈はクラスの男子の人気ナンバーワン。もし同じクラス男子にあっってしまったら、ただでは済まないだろう。あ、けど、我慢できねえ。

「別に俺はいいけど」

「私もいいよ。」

「じゃあ、3人で行こう。楽しみだね。」

「何時に出る？」

「確か、花火が始まるのは6時30からだよね。」

「だったよね。」

「じゃあ5時55分に出ようか。」

「何その微妙な時間。」

「だってー、場所取りとかしないといけねえだろ。」

「そっか。じゃ、それまでまた勉強しよう。」

「自由研究、終わった？」

「終わってない。」

それから、窮屈に1つの机を3人で使い続けて4時間ほどが過ぎた。

「お、そろそろ時間じゃね？」

「ほんとだ。」

「みんな、そのままの格好で行くのか？」

「あ・・・ どうしよう。」

「玲奈ちゃん、着物持ってるの？」

「持ってるよ。七海ちゃんは？」

「私も持ってるけど、岳は持ってる・・・訳ないか・・・」

「甚兵衛なら持ってるけど。」

「じゃあ、それでいいんじゃない？」

「2人とも、着物持って来いよ。」

「行ってくるねー。」

といつて、3分ほどで七海は帰ってきた。

「七海、1人で着れんのかよ。」

「どっちでもいいでしょ？ どっちにしろ、玲奈ちゃんに手伝ってもらうからねーだ。」

「ん、電話。」

岳の携帯にきた電話は、玲奈からだった。

「もしもし、玲奈?」

「うん。今、家で着物着てるから、時間になったら2人でうちきてく
んない?神社行くとき、家の前通るでしょ?」

「わかった。55分くらいになったら行くから。」

「ありがと。じゃあね。」

「ん、切るよ」

岳は、電話を切った。

「玲奈、1人で着物着れるってよ。」

「電話、なんて?」

「無視かよ。」

玲奈は玲奈の家で1人で着替えてるか
ら、後で2人で来いってよ。」

「え、じゃあ、岳、着物着るの手伝って。」

「何すればいいの?」

「とりあえずここ持っていればいいから、お願い。 . . . 一瞬。パン

ツとブラだけになるから、あんまり見ないでね。」

「触っちゃダメなの?」

「いい、けど. . . いいよ。」

ってなことで、ちよつとだけ七海はブラとパンツだけになった。

岳は、そんな気分だったのか、いつもより激しく、ブラの中に手を
入れた。

「ちよつとお

なんか岳いつもと違うよ。」

「でかくなつたな。」

「え?」

「胸、前よりでかくなった。」

「そりゃ、おつきくなるよ。岳だつてそうでしょ?」

「今もな。」

そういいながら、今度は下着の中に手を入れた。

「ちよつと、ね、本当におかしいよ。岳、どうしちゃったの?」

岳は、おまんこに中指を入れていった。

「あ、ね、いきなりそんなことやられたら、すぐいっちゃうよ. . .」

その言葉の通り、2分ほどで卵子が出てしまった。

「あ、気持ちいい。自分でやる時より、全然気持ちいい・・・」
「ありがとう。・・・で？何手伝えればいいって？」

「そこ、持っていて。」

「今のこと、もちろん玲奈には秘密にしてね。」

「うん。2人だけの、秘密にしようね。」

「帯もてつっただったほうがいい？」

「よし！着れた！」

「お、いつもよりかわいいいじゃん。」

「本当？」

「お世辞に決まってんだろ。ま、普段から可愛いけどな。」

「ほんとにほんと？」

「いや、これは本当に思ってるよ。」

「ふうん、ありがとう。」

もう行こう！ 玲奈ちゃん待た

せちゃうよ。」

「そうだな。そろそろ55分だし。行こうか。」

「よし、いっぱい焼きそば食べるぞ〜」

「金、今度こそ持ってけよ。」

「800円くらいで足りるかなあ。」

「足りるんじゃない？あそこけっこう全部安いし。」

「そだね。」

そのあと、玲奈の家に行っても、玲奈に今のことを気づかれた様子もなく、楽しい夏祭りは始まったのであった。

ところで、岳たちの詳しい説明をしていなかったと思うので、微妙なところですが、させていただきます。でも、確認したいこともあるので、今日は岳だけで。

筑波岳 誕生日は10月6日血液型はAB型。料理が得意で、女子からの人気はみんなが思っているより高いかも。

引退する前はサッカー部で、ミッドフィールダーをつとめていて、それなりにうまかったらしい。これはみんなに共通するが、エロい。

お祭り（2）

佐志眞流神社に無事着いた3人は、人気の花火の会場に行つて場所取りをすることにした。

「シート敷くの、ここでいい?」

「え、もうちよつとお店に近いところにしてしようよお。」

「そう、かなあ。ま、いいや。じゃ、あそこでいい?」

「いいよん」

「私も大丈夫。」

「はあ。混んでんな。」

「ねえ。去年より混んでる気がする。誰か友達いないかな?」

「そうね。居てもおかしくないけど。」

「もし男子がいたら、俺ら別にいるふりしてくれとめっちゃうれし
いんだけど。」

「なんで?」

「だって、避けるべき状況だろ。なんで岳なんか七海と玲奈と一緒に
にいでよって話になっちゃうだろ。」

「ふーん、よくわかんないけど、まあ、してあげる。」

「どーも。」

その時、花火開始のアナウンスが会場に響いた。

「今日、家帰ったら、誰から風呂入る?」

「わたし眠いからさき入りたーい。」

「じゃあ、私も七海ちゃんと一緒に入ろっかな。 岳も一緒に入
る?」

「入るわけねえだろ。」

「ほんとは入りたいいくせにー」

「じゃあ、入ろっか?」

「いいよ。」

「別に、大丈夫。」

「・・・冗談だよ!もし一緒に入ったら変態すぎるだろ。」

「今頃変態なのばれたところで何も変わらないでしょ?」

「そうよ。エロ男がエロいのはもうみんな分かり切ってることだもん。」

「だいたい風呂に3人もいっぺんに入れるかよ。始まるよ。」

花火、

そのあと、「わ〜」「お〜」など、観客の歓声が響いた。

「やきそば、食べようよ。」

「たこ焼きも食う?」

「私、今川焼食べたい。」

「渋いなあ。焼きそばみんな1つずつでいい?」

「わたし2つ!」

「え! 七海2つ食べるの?」

「うん!」

「まじか・・・ んじゃ、玲奈今川焼買ってきてくれる?」

「わかったら。行ってくる。」

「焼きそば4つ、お願いします。」

焼きそば屋さんに着いた岳は、屋台のおじさん(ここはお兄さんといったらほうがいいのか?)に質問された。

「お隣の方、彼女さんかい?」

「へ? 　　なんで七海いんだよ!」

「だって焼きそばすぐ食べたいもん。」

「あ、彼女じゃないです。腐れ縁の幼馴染です。」

　岳は笑いながら答えた。

「そうはみえないけどな。はい、4つで、640円だけど、カップル割引で555円!」

「カップルじゃないけど、ありがとうございます。」

「今川焼、買ってきたよ。3つ。」

「おお、気が利くな。」

「私2つ食べるから、もう1個は七海ちゃんね。」

「岳、焼きそば、もう1個ちょうだい。」

「も、もう食べたの!」

その質問には答えずに、七海は岳の手から焼きそばを奪った。

その後、楽しい時間を過ごし、特にハプニングもなく家に帰れたのであった。

登場人物ファイル

大川七海 血液型：B型 5月3日生まれ

とても大雑把な性格で、いろいろ適当。焼きそばが好きというような描写があるが、まだ真実は分かっておらず、ただの大食いかもしれない。（というのは、後付けの口実で、ただ作者が何も考えてないだけ）あまり常識はなく、岳を驚かす行動をすることが多い。玲奈のことをライバル視しているようだが、何かとお互い仲良し。岳とは幼馴染で、小さいころから遊んでいた。ショートカットで、前髪は目にかぶる程度。岳以上にエロい。

お風呂

「お風呂、入るね。」

「あ、服脱いだら、洗濯機に入れといて。」

「うん。もしかして、洗濯って岳がやんの？」

「そう・・・なるねえ。」

「えー、やだあ。」

「んでも、しようがないでしょ。もし七海が洗ったら俺のパンツもあるからな。」

「んー、分かったあ。あんまり見たり触ったりしないでね。」

「ああ、私のもあんまり見ないでね。」

すでに湯船につかっていた玲奈が、お風呂のドアから顔を出して言った。

「わかったから、早く入って。」

「ん」

服を脱いだ七海は、お風呂に入った。

「あ、広いね。ここのお風呂。」

「ねー、でも2人はいつちやうと・・・」

「あああああ、そうだね。・・・おっぱい、ぶつかっちゃうね。」

「私、先シャワー浴びていい?」

「いいよ。」

立ってシャワーを浴びる玲奈を見ていた七海は、こういった。

「おまんこのまわり、ツルツルだね。」

「え? そりゃ、ねえ。」

七海ちゃんだってそうで

しよっ..」

「うん。」

「おんなじだよ。」

「そうだよね」

玲奈は、長い髪を左手で持ちながら独り言のようにつぶやいた。

「岳って、だれのことすきなのかなあ。」

七海は答えに迷った。この前、好きだと言われた。でもそれが本当だとはわからない。答えなくてもよかったのかもしれないが、七海は「どうだろうね」

と答えた。

「あー！」

「七海ちゃん、どうしたの？」

「この後着る服とバスタオル、洗面所に持ってくるの忘れた。」

「あ！私も！」

「どうしよつか。」

「何かで隠していく？1人でも行けるし。」

「何かって？」

「うーん、岳のバスタオルとか？」

「あ、ああん。それぐらいしか、ないもんね。」

「どっちが行く？」

「私行ってもいいけど。」

「私も！」

「じゃあ、さんましよう！」（さんまというのは、じゃんけんを何人かでして、先に3回勝ったほうが結果的に勝ちというルールのじゃんけんである。これ以外にも、5回の「ごま」や、10回の「ジュース」などがある。ちなみに、地域にもよるが、「さくんま」というコールで始める）

「いいよ。」

「さくんま！」七海がグーで勝ち。

「さくんま！」玲奈がグーで勝ち。

「さくんま！」玲奈がパーで勝ち。

「さくんま！」チヨキであいこ。

「さくんま！」チヨキであいこ。

「さくんま！」グーであいこ。

「さくんま！」玲奈がグーで勝ち。

「やったー！じゃあ、行ってくるね。」

「う、ん。」

七海には、玲奈のこれからの行動がおそらくわかる。岳バスタオルをとつたら、体をふき、おまんこの部分にタオルを入れて・・・

玲奈は、七海の予想通りに動いた。

バスタオルで体を隠しながら2階の岳の部屋に上がる。

「岳、入るよ。」

「うん、って、なんでそんな格好なの!?!ってかそれ俺のバスタオル。」

「七海ちゃんも私も、バスタオルと寝間着下に持っていくの忘れちゃって。しゃがむから、見ないでね。」

「なんで見ちゃいけないんだよ。」

「見たいの?」

「見、、、たいよ。」

「じゃあ、ちよつとだけ見せてあげる。」

そういつて、玲奈は、左の胸を乳首まで見せた。

「ねえ、見せてあげたから、触っていい?」

「いい、よ。」

「生で?」

「えっ、生?」

「じゃあ、私の触って。」

玲奈は、無理やり岳の右手を自分の胸にあてた。」

「うわっ」

「気持ちいい?」

「うん。 気持ちいい。」

「じゃあね、もっと気持ちよくしてあげる。」

「え?」

早々と岳のパンツを下した玲奈は、岳に抵抗する時間も渡さず、口の中に岳の陰茎を入れた。

「ちよつと、それはやりすぎじゃねえか?」

「そう?」

激しく、口を動かす。

「ちよつと、イクって。汚くなっちゃうよ。」

「いいよ。岳のだったら」

「あ、本当に、イク・・・」

「あああ。」

「気持ちよかった？」

玲奈は、精液で少し汚れた顔で、岳に笑顔を見せた。

「あ、うん。ほら、そろそろ行かないと、ばれるよ。」

「そうだね。」

「ねえ、夜中、続きしない？」

「いいよ。」

そろそろ遅い。少し胸を触らせてあげるのかなり、ぐらいは、七海も予想していた。それくらい、許した。でも、それにしては、遅い。七海は、裸ながらも、濡れた体で、なるべく音をたてないように階段を上った。

「玲奈ちゃん、..」

「な、なんで？なんで七海裸なの？」

「玲奈ちゃん、何してたの？」

「え？」

「正直に話して。いま、岳と、何してたの!？」

いつもより力強い声で、七海は聞いた。

「いや、七海。」

「岳に聞いてないの！玲奈ちゃんに聞いてんの！」

その七海の眼には、うっすら涙が浮かんでいるのが見えた。

登場人物ファイル 江川玲奈 血液型 AB型 誕生日 1

2月23日（昭和天皇と一緒）

岳のクラスメイトで、七海と仲良し。この作品を見る限り、岳のことが好きだとみられる。家はそこそこのお金持ちで、日本以外にニースにも別荘を持っているらしい。胸はDカップで、とても顔が整っていてスタイルもよく、クラスの男子の人気ナンバー1。ロングヘア。頭もまあまあよくて、立川高校を受験するという。もともとはそこまですぐエロくなかったのだが、小学校高学年の時に岳からいろんなエロいことを聞かされたため、このようになってしまった。

同居？·なのかな、2、3日目

半ば強制的に玲奈は岳に「フェラ」をし、七海に何をしていたのか問い詰められた。意を決した玲奈は、本当のことを話すことにした。「私が、無理に、岳の使つてフェラしたの。私が全部悪いの。岳は何もしてないの。」

七海は、目到大粒の涙を浮かばせながら、岳の部屋を出て行った。かといって、荷物は岳の部屋に置いてあるので、逃げれるわけにはいかないが。

「なんか、悪いこと、しちゃったな。」

「ごめんね。」

その玲奈も、目到大粒の涙を浮かべていた。

いくらライバルといつても、友達は友達。玲奈にとつても、七海にとつても、一番の友達のはずだ。と、思う。(なぜにここで作者の見解が入ってくるんだよ！)

「謝る相手、違うんじゃない？」

俺も一緒に謝るから、

ちゃんと、七海に、謝ろうよ。」

「うん。」

そういつて、2人はお風呂に向かった。

七海は、湯船で体育座りをしていた。

「七海、入るよ。」

「・・・」

七海からの返事はなかったが、岳と玲奈は浴室に入つた。

七海は、ゆつくりと顔を上げた。その顔には、まだ涙が残っていた。

「あのさ、さつきはごめんね。」

岳の言葉にも、七海は何も答えない。

「ほんとに、ごめん。悪いと思ってる。二度とこんなことはしないから。」

「・・・ わたし、出るね。」

そういつて、タオルだけを持って七海は2階に行った。

「俺、慰めてくるから、今はちよつとここで待っててくれる？」

「うん。」

「七海、」

「何？」

「さっきも言ったけど、ごめんな。謝って済む問題じゃないかもしれないけど。・・・お前もしていいから、許してくれない？玲奈は、七海のこと、一番の友達だと思ってるよ。七海も、そうだろう？」

「やだ。もう2人とも嫌い。」

「・・・そっか。裸だと風邪ひくぞ。」

「べつにいい。」

「じゃあ、寝てる間にパンツとか着けとくね。」

「着ければ。」

「わかった。おやすみ。」

「・・・」

岳は部屋を出て、玲奈のもとへ向かった。

「多分大丈夫そう。」

「なんで？」

「幼稚園のころからそうだったんだよね、なんか嫌なことがあって、七海が1人になって寝ようとしているときは、冷静になって、どうやって謝ろうか、って、考えてる時なんだよね。多分だけど。だから、大丈夫だと思う。」

「よく知ってるね、七海ちゃんのこと。」

「まあね。」

「ねえ、岳って、七海ちゃんのこと好きなの？」

「どうだろうね？」

「まあいいや。」

「あ、俺まだ風呂入ってねえや。入ってくるね。」

「うん。なんかすることある？」

「ああ、できれば、洗濯機回してほしいんだけど。」

「わかった。」

「俺の服も脱いだらね。」

岳は、浴室に入って服を脱いでからドアを開けて顔だけ出して玲奈

に洗濯物を渡した。

「これって、運転、ていうボタン押せばいいの？」

「そう。あと、洗剤はファニアニファア使ってくれる？」

「わかった。私、寝てくるね。」

「ん、ありがとう。おやすみ。」

「うん。おやすみ。」

お風呂に入りながら、岳は考え事をしていた。

玲奈の質問に対してだ。

おそらく、今、恋愛的に好きだという相手はいないだろう。七海が同じようなことを言っていたが、一緒にいて楽しいのは、玲奈と七海だ。2人のどっちを選ぶか？それは、岳にもわからなかった。はつきり言って、みんなと一緒に楽しく過ごしたい、というのが、岳の考えだ。と、そんな話は置いておいて・・・

2階が上がって、岳も寝る準備をした。2人とももうすでにねていた。

「あ、そっか、七海の服着させないと。」

そう独り言を発して、岳は七海のバッグの中をあさった。

「どれだ？ってというか、なんだよこの派手なパンツ。寝間着は、これかな？」

七海、パンツ、履かせるよ。」

なんて簡単に言っても、寝ている人間にパンツをはかせるなんてすごく大変な作業だ。

丁寧に、気づかれないように、脚を動かして、無事にパンツは履かせることができた。（ちよっとお股の部分を隠しているだけのようにも見えるけど）

ズボンと上（シャツ）はばれそうだったので、そのままにしたが、さすがに胸の部分は隠さないと七海が起きた時に大変なことになりそうなので岳の分の布団もかけてあげることにした。

次の日、玲奈と岳は朝早くに起きたが、七海は起きなかつたので、朝ごはんができたのを知らせに岳が七海を起こしに行った。

「七海、ご飯だよ。」

「ん!？」

「ごはん、もう朝だつて。」

「シヨパン？」

「飯だよ。飯!なんでご飯がシヨパンになんだよ。」

「リビング、行かないきゃあ。」

「おまえ、胸出したままだしパンツちゃんと履けてないよ。」

「え!？」

ようやく七海が目を覚ましたようだ。

「なんで?昨日岳着けてくれるって言ってたのに。」

「おまえが爆睡してたから履かせられなかったんだよ。」

「ふーんだ。どーせおまんこでも見てたくせに。」

「みてねーよ。」

七海は、仲直りしていないのに笑いながら楽しそうに話しているのに気付いたのか、いきなり真顔になって無口でリビングに向かった。

岳と玲奈が会話をして、七海に話を振っても、七海は無言のままだった。みんなが食べ終わるまで、リビングには悪い空気が漂っていた。

七海がリビングを出て行こうとした時だった。

「昨日、私も、なんかひどいこと言っちゃってごめんね。ほんとは、みんな、大好き。」

その言葉に、岳はこう答えた。

「俺も!」

その後は、何もなかったかのようになり3人で仲良く過ごした。

玲奈が帰った後も、七海と岳でテレビを見たり洗濯物を干すときに岳がブラジャーをわしづかみしていたとかかしていなかったとかでちよつとした口論になったり・・・

とにかく、楽しい3日間を過ごした。

え？こんな時に？

火曜日、少しみんなから遅れて学校に着いた岳は、いつもよりすごい賑わい（というか騒ぎ）に違和感を覚えた。

「どうかした？」

岳は、前の席の七海に聞いた。

「ああ、なんかね、このクラスに転校生来るんだって。」

「え？まじで？2学期始まったばつかなのに。」

「ね。みんな言ってる。」

「え、それって、女？」

「は？あんななんちゆう質問してんの？ 知らないけど、Dカップの美人の女の子だといいですねー。」

「だといいいね。」

その時、先生が教室に入ってきた。

「ええつと、聞いている人もいると思うんだけど、今日、このクラスに転校生がきたので紹介したいと思います。」

水布江。」

先生が呼ぶと、1人の女子が入ってきた。・・・胸はふつうだな。ア
ンダーとバストはともかく、BとCの間ぐらいだろうか。

「えーと、水布江です。よろしくおねがいします。」

おとなしい性格なのか、それしか最初はしゃべらなかつた。その女子は、なぜか俺の後ろの席だった。

一応、声をかけてみることにした。

「あの、筑波岳です、よろしく。」

「・・・よろしく。」

なんか、照れてるところがめっちゃ可愛いんですけど。

・・・っていうか、顔が神。

休み時間、彼女のもとにはたくさん女子がたかった。

「わたし、七海っていうの。下の名前は？」

「・・・美奈って言います。」

「へー、美奈ちゃん。」

「はい・・・」

「敬語使わなくて大丈夫だよ。仲良くしようね。」

独占して彼女と話していた七海だが、みんなも話したがっていたので空気を読んでやめた。

帰る時も、七海は話しかけた。

「ね、美奈ちゃん、今日、この後空いてる？　一緒にいろいろしてみたいんだけど。」

「別に・・・いい・・・よ・・・」

「やった！　　美奈ちゃんの家ってどこなの？」

「坂下の、ステンデーズ、、分かる？」

「うん。」

「そのとなりの、『メゾン・ラヴオーレ』っていうマンションの、305号室・・・」

「あ、そこしってる。あの、隣の班に、江川玲奈ちゃん、って居たのわかる？」

「あの、、可愛い子？」

「そう。その子がね、ステンデーズの向かいの家に住んでるんだよ。」

「へえ・・・」

「あ、今日、この後さ、美奈ちゃんの家行って、、あ、そっか、まだ片付けとか済んでないよね。あ、じゃあ、一緒の班だった岳って人分かる？その岳の家行こう。」

「筑波君？」

「そう。わたし、家帰ってちよつとしたら美奈ちゃんの家行くから、待ってて。」

「わかつ、た・・・。何か、持ってくるものある・・・？」

「たぶん大丈夫。」

「じゃあ、待って、るね。」

「じゃね、ばいばい」

美奈は、七海に手を振って別れた。

七海と、少し仲が近くなってきたようだ。

ピンポーンと、家のインターホンが鳴った。

「玲奈ちゃん、今から空いてる？」

「って、なぜに玲奈の家だ！」

告白（って、恋ではない）

「何？」

「今から、転校してきた美奈ちゃん、岳んち行くこうと思うんだけど、来る？」

「ああ、行く。ちよっと待っててね。あがつて。」

「お邪魔します。きれいだね、玲奈ちゃんち。」

「そう？ あ、でも、お母さんが潔癖症だからね。」

「へー」

「・・・そういうえば、最近田島とはどうなの？」

「あああああ、どうだろうね。最近学校でしか会ってないし、学校でも全然話してないし・・・、接しにくいんだよね。岳と違って。」

「わかる。」

「嘘だ。だって玲奈ちゃんモテるじゃん。」

「関係ないよ。乙女はみんなそういう時期があるの。」

「なにそれ。」

「準備できたよ。」

玲奈の家を出てからも、話は続いた。

「玲奈ちゃんはまだ岳のこと好きなの？」

「うん。多分。あ、蒸し返すようで悪いけど、この前は本当にごめんね。友達なのに。私、七海ちゃんが一番の友達だと思ってるから。」

「もう大丈夫だって。わたしも玲奈ちゃんが一番の友達だと思ってるから、これから仲良く過ごそうよ。」

前にあったことは何をしても変えられないけど、未来は自分次第でいくらでも変えられるんだよ。・・・って、いつか忘れたけど岳が言ってた。」

「ありがとう。」

「ここだよ、美奈ちゃんの家。」

七海は、自慢するように玲奈に言った。

「美奈ちゃん、来たよ。」

「あ、私も準備出来たよ。・・・」

「玲奈ちゃんもいるけど、大丈夫?」

「もちろん。」

「じゃあ、行こう!」

「ここだよ。」

そういつて、七海はインターホンのボタンを鳴らした。

「七海でくす」

「え?なぜに?」

「いいから入れてよ。」

「わーかった……。誰かと一緒?」

「えつとね、玲奈ちゃんと、美奈ちゃんと一緒。」

「美奈ちゃん?」

「今日転校してきた子。水布江さん。」

「ああ、水布江。あ、はいつていいよ。」

「はーい!」

3人は、岳の家に入った。

「お邪魔しまーす」

「あ、やっぱいい匂い。」

「……」

(なぜかわからないけど、美奈はキョドっている。)

「何しに来たの?」

「え?」

うーん、遊びたかったから?」

「小学生かよ。」

「は!?!」

「ああ、ごめんごめん。幼稚園生だったね。」

俺のタオ

ル、使つていいから、手洗つといてね。」

「……!?!」

何か言いたそうな様子の七海だったが、諦めた。

手を洗っている途中に、七海は美奈に質問をした。

「美奈ちゃんは、どこから来たの?」

「東京。」

「東京?」

「東京。」

「すごっ」

「・・・」

「兄弟は誰かいるの?」

「お兄ちゃんがいる。えつとね、高校三年生。」

「へ〜」

「岳、人生ゲームやりたい!」

岳の部屋に入った七海は、何を思ったのかいきなり叫ぶように言った。

「人生ゲーム?」

「あったでしょ?」

「あるけど、それマジで言ってるの?」

「マジだよ。」

「えつつつ、ん、じゃ、やろうか・・・」

「やったー!」

「やっぱりお前幼稚園児だな。」

岳はため息交じりに言った。

「車何色がいい?」

「赤!」

「水色」

「じゃあ、オレンジ・・・」

「んじゃ俺白・・・やっぱ黒にしよう。七海、お前がやりたいって言ったんだからぎんこうやれよ。」

「ん〜」

そのあと、岳がエロいだの、あの先生は話が長いだの、いろんな話をした。

何のために来たのか分からなくなってきた美奈だが、なんとなく楽しかった。

この4人は、すぐ仲良くなった。

4人でいろいろな場所に行った。

しかし、こんな楽しい日々は、すぐに奪われた。

「どういうこと!?!」

「だから、引越すの。」

「なんで?」

「お父さんが今住んでる札幌の家に行くことになっちゃったの。」

との事情で、玲奈が札幌に引越すことになってしまったのだ。

その話を、七海が玲奈の家に招かれたときに聞いた。

「いつ、引越すの?」

「年明け。冬休み中。」

「そんな・・・」

「でも、まだ時間あるから。」

「いつか帰ってくるの?」

「うん。最長でも大学入学までに帰ってくるって。」

「じゃあ、高校はいけないのか?。」

「ごめんね。」

「玲奈ちゃんのせいじゃないよ、運命だもん。そうだ!これからさ、みんなでいろんなところ行って、思い出作らない?」

「それ、私思ってた。」

「うん!考えとくね。」

みんなにはいつ言うの?」

「先生には言ったけど、クラスで発表するのは終業式の日にするつもり。あ、岳と美奈ちゃんには先に伝えるよ。」

「そっか・・・。じゃあね。わたし、そろそろ帰らなきゃ。」

「あ、そう?。ごめんね、おもてなしできなくて。」

「大丈夫。バイバイ。」

「バイバイ」

玲奈は、すぐに岳と美奈にも電話をした。

玲奈も、もちろん引越したくなかった。

七海たちと、もっと過ごしたかった。

でも、そんな気持ちは心の奥にしまって、楽しく日々を過ごしていた。

10月になったころ、七海は本格的に4人の思い出作りの計画を立てていた。

岳や美奈も招いて、みんなで話し合った。

「やっぱマウスースズランドじゃね？」

「だよね！マウスースズランド、と。」

七海は、メモに書きだした。

「あ、じゃあ、マウスースズランドのついでに渋谷とか回るのはどうかな？」

「あ、それもいい！」

「え、何日かに分けていいんでしょ？」

「もちろん！」

「じゃあ、北のほうで、群馬とかの寺巡りとか！」

「論外。悲しい。」

「論外はねえだろ。失礼だぞ。じゃあ・・・、玲奈の誕生日って12月23日で合ってるっけ？」

「うん。あ、もしかして誕生日会？」

「そうそう！」

「それもいいねえ。」

「ねえ、玲奈ちゃんって、魚好きじゃなかった？」

「あ、そうだった気がする。玄関に魚居るもんね。あとペンギンのぬいぐるみいっぱい持ってる。」

(かわいいな)

「だったら、水族館とかどうかな？」

「それいい！でもどこにする？」

「新江の島とか？」

「あと、大洗もいいと思う。」

「あ、じゃあ、なんだっけ？ あ・・・、なんとかシー、」

「鴨川シーワールド？」

「そうそう、それ！」

「あと、八景島シーパラダイスとかは？」

「ああ、聞いたことあるね。」

結局、12月の終わりまでに、千葉海浜マウスースズランド、鴨川シーワールドに行き、千葉海浜マウスースズランドと東京めぐりは別々にし

て、誕生日会を開いて、北海道に向かう日には3人で空港まで行くことにした。

(千葉海浜マウスーズランド⇨東京デ○ズニーランドはたぶんそのまんまの名前で使っちゃいけないと思うので、変えました。まあ、デ○ズニーランドだと思ってもらえれば。)

1度めは、東京。

「イえ〜い！ 渋谷！ ってか東京！」

「どんだけはしゃいでんだよ」

「だつて東京だよ。東京、東京だよ。」

「知ってるよ。」

「七海ちゃん、東京初めて？」

「家族で東京タワー行ったり、工場見学で何回か行ったことあると思うけど・・・、小さい頃だったと思うからあんまり覚えてない。」

「私も、幼稚園生のころに家族みんなで行ったつきりかな。ほら、そのあとお父さんが札幌に単身赴任しちゃったから・・・。」

「そつか・・・ 岳は？」

「俺、この前お姉ちゃん達と『東京サマーランド』ってところ行った。」

「お姉ちゃんたち？」

「お姉ちゃんとお姉ちゃんの友達・・・」

「なんでついていっちゃったの？」

「変態！」

「だつて、しょうがないでしょ。ついて来いって言われて無理やり行かされたんだから。でも、そういうこと考えてなかったし、お姉ちゃんもさすがに気利かせて男の人1人連れてきてくれたけど。」

「美奈ちゃんは？ あ、そつか。美奈ちゃん東京に住んでたんだもんね。」

「つていっても、西のほうだよ。小金井、つてところ。」

「へえ〜、でも、こっちのほうも来たことあるでしょ？」

「うん。何回か。」

「いいよね、東京。」

「そう？ 自慢みたいになっちゃうけど、確かに東京は便利だけど、何回か、自然だらけの田舎に住んでみたい、つて思ったこともあるよ。」

「そうだよね、自然もいいよね。」

「あ、ここじゃね？」

地図を見ながら、岳は遠くの建物を指さした。

「あ！本当だ！渋谷109！」

「さつきから思ってたんだけどさ、なんでお前がはしゃいでんの？」

「しようがないじゃん。田舎もんが東京なんてきたら誰でもそうなるんだよ。」

「玲奈はなつてないけど。」

「玲奈ちゃんはいつもクールなの。でも実は心の中ではすっごいはしゃいでるんだよ。ね？」

「まあね。東京って、すごいよね。」

・・・せつめいおくれてすみません。

皆さんもうわかっていているかもしれないですが、今日は玲奈、七海、美奈、岳の4人で東京めぐりをすることにした。

予定としては、渋谷109、なぜかわからないけど、目黒にあるおいしいと話題の『呷滋屋』（いじや）というかき氷屋さん、あと新宿伊勢丹、そして東京駅で買い物をして帰ることになっている。

（こんな多忙なスケジュール、ちゃんと予定通りに動けるのか？）

ということ、一番最初はすぐそこに見えている渋谷109に行つた。

その中でも人気の洋服屋、CELEOに行くことにした。

「わく、見てみて、これ、安いのにめっちゃ可愛いよお。」

「あ、これもいいい。」

「岳はどれにするの？」

「買うわけねえだろ。」

「もつたいないよお。」

「買わねえつて。買ってどうすんだよ。」

「じゃあ、七海ちゃんとおそろいの買えば？」

「は!?! つてか、美奈は？」

「あ、ほんとだ。美奈ちゃん、どこだろ。」

「・・・あ、居た！」

「え？あれ、何してんの？」

すたすたと、七海は美奈のところへ向かった。

「何選んでんの？」

「これとこれ、どっちがいいかな?」

そこへ、気になったのか、岳と玲奈も来る。

美奈の手には、リアルなライオンが描かれたTシャツと、ヒョウ柄のTシャツがあった。

「えくと、うん、独特だね。」

「そうだね、その、なんというか、個性的?」

「そーいう、のも、いいよねえ。」

「でしょでしょ。ね、どっちがいいと思う?」

本当の言葉ではないよ……

3人で、一斉にどちらかに指をさした。

結果は、3人全員ライオンのほうだった。

「やっぱり?こっちだよね。」

よかった……

3人が、おそらく思ったであろう。その前に、美奈の趣味は大丈夫だろうか。

美奈を除いた3人は、(美奈は試着室に行った)先ほどの場所に戻った。

「あ、七海ちゃん、このワンピースよくない?」

「いい。似合いそうだね。」

「そういえばさ、玲奈の制服のスカートとか、私服のやつとか、全部短いよね。学校のやつやばくない?膝隠れないといけないでしょ?」

「エロ男、そんなとこ見てたの?」

「見てねえよ。みえちやつたんだよ。」

「見てんじやん。」

「そりや、ねえ。」

「まいいや。私これにしようかな。」

「岳、何も買わないんだったらーつ玲奈ちゃんにおごってあげたら?」

「え!」

「ありがとく、エロ男、いいとこあんじやん。」

「まだ買うって言ってないけど。」

「じゃあねえ、これにしようかな。このTシャツ。可愛いでしょ。」

「え、なんでもう買う前提で話してんの？」

「いいじゃん、そんなくらい。ほら、これ買ってくれたら、玲奈ちゃんがキスしてくれるって。」

七海は少しからかうように言った。

「んんん、キスはしないけど買うよ。いくら？」

「1800円。」

「あ、そんなもん。」

「Tシャツだもん。でも、キス1回の権利が1800円っていうのはね……」

「は!? そりゃこつちのセリフだろ。」

さつきから話を聞いていたかもしれない若い女性の店員さんが、クスツと笑った。

……恥ずかしい。

「七海ちゃんは、決まった？」

「うん。わたしこれ。」

「あ、可愛い。いいね。」

「じゃ、私たち、試着してくるから。」

「じゃあね〜」

そこへ、試着が終わった美奈が来た。

登場人物ファイル

水布江美奈（1）

（後日、（2）を追加）

血液型：B

型 4月6日生まれ

まだいろいろわかっていないことも多いが、趣味は独特で、ちよつと恥ずかしがり屋ということぐらひは分かっている。エロさはまだ明らかにされていないが、まあ、この小説に出てくるといふことは……胸は小さめで、岳の見解だとAカップかBカップ。玲奈や七海に比べると貧乳なようだ。

S o b a, L a m e n, やつぱり Y a k i s o b a
!

美奈が試着室から出てきて、岳と2人きりになった。

「どう？似合ってた？」

「うん！すつごく！」

「そ、そう・・・（え？あの服が似合うのって大阪のおばさんだけじゃないの？）」

「ねえ、筑波君って、どのくらいエロいの？」

「何お前大きな声で話してんだよ。」

「ねえ、だから、どんくらいエロいの？」

「そうだな・・・、北海道から大阪くらい？」

「えー、よくわかんない。」

「ちなみに、七海が、月から地球くらい。」

「そんなに！すごい！月から地球まで！」

・・・え？こいつつてもしかして、かなりのバカ？

そこへ、試着が終わった後の2人も出てきた。

「じゃあ、買っちゃおう。」

「岳、あとでおかねちようだいね。」

「図々しいなあ。あげるつっーの。」

「あ、3人お会計別々でお願いします。」

お会計が終わった後、美奈に気づかれないように、七海に、美奈のことを聞いてみた。

「あいつって、バカ？」

「バカではないけど、なーんか、変。まだ私もよくわからない。」

「へえ・・・」

まあ、これからいろいろこいつとやっていかないといけないんだろうな・・・

「よおし、かき氷食べる前に、お昼食べに行こうよ。」

七海は、お腹がすいたのか、みんなに話しかけた。

「いいね。どこにするの?」

「岳、なんかいいところ知ってる?」

「みんな何食べたいの?」

「なんでもいい」

「食べれば。」

「うーん、ケーキ?」

「ケーキ? お前何言ってるの?」

「だって、食べたいものって。」

「お昼ご飯。今聞いているの、昼飯。」

ちよつと美奈が泣きそうな顔をしていたので、やさしめに言った。

「お昼ご飯か・・・ 麺類がいい。」

「ちよつとまつて、調べてみるから。」

岳は、スマホ（スマートフォン、わかりますよね?）で近くの麺類のお店を調べた。

「ここはどう? 麺の有屋。」

「ああ、いいんじゃない?」

「そこ行こう!」

「おなかすいた。」

「こつから徒歩4分だって。近いな。」

「ここだね。」

そこは、歴史のありそうな古い建物だった。

「あ、4人で。」

夫婦だろうか。店の厨房にはやや白い髪の毛が混ざった男性、そして入口のところにはその男性と同じくらいの年代の女性が立っていた。

「じゃあ、こちらのテーブル席で。」

「どうも。」

「席どうする?」

「わたし、どこでもいい。」

美奈は、さすがに気を使ったのか、ここは自分から後にまわった。

「玲奈ちゃん、岳の隣がいい?」

「なんでよお。七海ちゃんは?」

「わたしは、美奈ちゃんの隣でも岳の隣でもどっちでもいい。」

「じゃあ、七海ちゃん岳の隣行ってよ。私は美奈ちゃんの隣でいいから。」

「だめだよ。最後のチャンスだよ。わたしは美奈ちゃんの隣。玲奈ちゃんは、岳の隣。」

「えく、うん。でも、えく、分かった。」

そうして、岳の隣が玲奈、玲奈の向かい側が美奈、美奈の隣が七海となった。

「何があるのかな?」

七海は、メニューを見ながら言った。

「そば、ラーメン、あつ!焼きそばあるじゃん!月見豚バラ焼きそばだって。トッピングもあるよ。えつとね、揚げ玉と、柿の種トッピングしよう。」

やっぱり七海は焼きそばがすきなのか...

「柿の種?珍しいな。」

「そう?うちで食べるときはいつもつけるけど。」

「まじで?ってかもう決まったの?」

「うん。決まった。」

「じゃあ、私は、彩り天ぷらのせいろそばにしよう。」

「わたしも、江川さんと同じのにしようかな。 とろろトッピングしよう。」

「よし、俺も決まった。 頼んでいい?」

「いいよ。」

「岳全部言ってるね。」

「え!?!覚えてるかな?」

「大丈夫だよお。」

「すみません、注文お願いします。」

「はくい。どうぞ。」

「えつと、有屋特製塩ラーメンに、トッピングでゆで卵と、彩り天ぷらのせいろそばが2つで、そのうち1つがとろろトッピングで、えくつ

と、あと、月見豚バラ焼きそば？に、トッピングで、、なんだっけ？」
「えつと、トッピングで揚げ玉と、柿の種で。」

「はい、わかりました。いまお水持ってきますね。」

「なんで岳全部覚えてないのお？」

「覚えられねえよ。」

そこへ、おばさんがお水を持ってきた。

「ありがとうございます。」

「仲良しですね、みなでお出かけですか？」

「いえ、そういうのじゃないんで。誤解しないでください。」

「そういうのって何よ。」

「そーいなのはそういうのだよ。それより、ココのお店って、ご夫婦でやられてるんですか？」

さつきからなぜか気になっていたことを、岳は聞いた。

「いや、あれは私の兄なのよ。いつもは学生の娘もいるんだけど、今日試験でねえ。教員になるとか言って。」

「教員ですか。」

「ええ。だから、このお店もいつかつぶすことになっちゃうのかな、って、最近は兄と話したりもするんだけどね。」

「へえ、頑張ってくださいね。」

「ええ。ありがとうございます。」

その後、おいしい食事を終えた後、かき氷屋に向かった。

その途中、美奈は玲奈の目を盗んで七海に話しかけた。

「ねえ、七海ちゃん、江川さんって、筑波君のこと好きなの？」

「なんで？」

「いや、なんか、そんな気がしたから。」

「どうだろうね？わたしは玲奈ちゃんじゃないから、わかんないや。」

「ふうん、、」

「楽しみだね、かき氷！　美奈ちゃん、何にするか決めた？　っていうかホームページ見た？」

「見た。わたしはね、白玉小豆抹茶が一番気になった。」

「私も！」

「玲奈ちゃんは？」

「え？」

玲奈は、岳と話していたため、七海の話聞いていなかったようだ。

「だから、かき氷、何食べるか決めた？」

「え、と、私は白玉小豆苺。」

「あ、それも気になった！ああ、早く着かないかなあ？」

その時、なぜか岳は心配そうな顔をして美奈を見ていた。

その時、玲奈も、浮かない顔をしているのであった。

思い出は、省かれる。

岳たちは、かき氷も食べ終わり、東京駅で買い物もして、埼玉に帰ってきた。

(ちよつといろいろ省いちやつてすいません！)

「あく、楽しかったしおいしかったしおいしかったし楽しかったね〜！」

「ね！本当に楽しかった！・・・みんなありがとうね。」

「なんでお礼なんて言ってるの。お礼するのはこっちのほうだよ。ありがとう。・・・まだ最後じゃないよ。まだまだいっぱいいろいろ考えてるからね〜!？」

「えく、どこだろう〜？」

「秘密！」

「えく、ま、その時を楽しみにして待ってるね。」

次の日、いつも通り、4人は学校に行った。

「玲奈、ちよつと。」

岳は、休み時間に玲奈を小声で呼んだ。

それに対して、玲奈は周りを気にしながら岳のところに向かった。

「今日は、大丈夫そう？」

「だめ。今日も、みんなに・・・」

玲奈は、何かを言いかけたものの、友達に声をかけられたので、岳の方向に両手を合わせて友達の方に向かった。

「・・・」

「どうかしたの？」

七海が、岳の様子が変わったので岳に声をかけた。

「うん、ちよつと、色々。」

「いろいろって何よお。」

「ちよつと、大変なこと。」

「大変なこと？」

「おまえにもかかわる、だいじなこと。・・・そうだ、七海も、今日家に来て。」

「わかった・・・」

「玲奈にさ、今日俺んちこいつて伝えといてくんない？」

「うん・・・」

「・・・玲奈ちゃん、岳が、この後、岳の家来てだって。」

「七海ちゃんも来るの？」

「ああ、ごめん。」

「いや、大丈夫。むしろ、いたほうがいい。」

「何の話なの？」

「それは・・・今は言えない・・・」

「ごめんね。」

「・・・」

七海は、家に帰ってから急いで岳の家に向かった。

お決まりのいきなりトイレシーンはなかったようだ。（詳しくは、

2、3話らへん）

「岳、来たよ。」

「おお、玲奈は？」

「まだじゃない？」

「そ。」

「・・・ねえ、なんかしない？」

「なんかかって？」

「誰も見てないんだから、触つてよ。」

「だからなんで触んないといけないんだよ。前も何回も言ってる。」

「じゃあ、触りたくないの？」

「触りたいけど、触つちやダメなの。」

「この真面目野郎。」

「わかったよ。触ればいいんだろ。」

岳は、チョン、と、七海の右胸の乳首のあたりを人差し指だけで触った。

すると、すぐに、Tシャツだけだった七海の乳首は勃起した。

「おまえまたブラ着けてないの？」

「だって、着けてたらもちもちのおっぱい触ってもらえないもん。」

「そこらへん歩く時、恥ずかしくないのかよ。」

「恥ずかしくないよ。だって誰も私のことなんて見てないもん。」

「みてるよ。」

「何それ、どういうこと?」

「・・・いや、だってお前、胸でかいし、それなりに、まあ、顔もね、可愛いし・・・」

「えっ、何? 岳っていつも外出てるときそういうことばっか考えてんの?」

「考えてねえよ。ただ、お前が、ちよつと可愛いってだけだよ。」

「ふんだ! 正直に言いなさいよ。すつごく可愛い、って。」

「は!?! お前自分のことそんな風に思ってるの?」

「岳は思ってくれてるんでしょ?」

「そりゃ、思ってるよ。」

その時、インターホンが鳴った。

「は〜い!」

「なんで七海が出てんだよ。」

「うるさいなあ。玲奈ちゃん、入っていいよお。」

3人で岳の部屋に言った後、みんな話し始めた。

「えつと、で、七海は、まだ何話すか知らないんだよね。まあ、俺もまだよく知らないんだけど。玲奈、七海に説明してくれる?」

「うん。岳にも詳しく説明するから、岳も聞いてね。」

「オツケー」

「このクラスで、男子で一番モテてるのって誰だと思う?」

「・・・将栄?」

田中将栄、岳たちと同じクラス。

「うん、多分。 じゃあ、岳、女子で一番性格的に面倒くさそう、...
例えば、男子にはすつごく可愛いとこだけ見せてるのに、女の子の前になるといきなり変わって、すごい感じ悪くなる・・・みたいな人は?」

「うーん、末井?」(これで『まつい』と読むのです。

・・・はい。)

「うん、私ができることじゃないかもしれないけど、そうだと思う。．．．☒里恵（みりえ、末井。）ちゃんが、

田仲の事好きなの、っていうか、付き合ってるの知ってるでしょ？」

「まじで!?!」

「え、岳知らなかったの？私は知ってたけど。」

「．．．知らなかった。」

「まあ、どうでもいいから、そうなの。分かった？」

「はい、よくわかりました。」

「で、最近、田仲がほかの女の子と仲良くしすぎだって、けんかになっちゃったみたいなの。で、その仲良くしてる相手が．．．」

「美奈、っていうわけか。」

「そう．．．なの？」

「うん。そのせいで、☒里恵ちゃんがなんか美奈ちゃんのことなんて無視しよー、みたいな事をみんなに言っちゃって、みんな、従わなかったら自分がいじめられちゃうから、って、美奈ちゃんをいじめてるの。」

転校生だ、ってこともあるのかもしれない。」

「うそ．．．??? 美奈ちゃん、毎日楽しそうだったのに．．．」

「楽しいことは楽しいと思うよ。けど、なんかもう、本人たえきれなさそうで、今にも美奈ちゃんの何かが爆発しそうで、怖いのに．．．」

「なんか、出来ることないの?」

「そんなこと言われても、何も．．．できないことはないけど、そんな勇氣私には．．．」

「友達のためだろ。お前は、自分が傷つくからって友達を守ってあげられない友達を、本当に友達だと思ってるの?一緒にいる時間が短いから、長いから、って、友達を差別するわけ?」

「それは、違うけど．．．」

「話す前に、まずやってみろ。やってみようとするれば、できるよ。何かは。」

「岳．．．、分かった。」

「あ!お前今俺のこと岳って言った!」

「え!?うそ!」

「玲奈ちゃん、前も言ってたよ。」

「ウソく、ヤダく!」

「なんでいやなんだよ。」

「だって、恥ずかしいもん。」

「だからなんで恥ずかしいんだよ。」

「そりや、・・・好きだから?」

「なーんだそれ。だけど、俺は、玲奈のことも七海のことも好きだけど、下の名前で呼んでも全然恥ずかしくないよ。」

「私帰る!」

「おい、玲奈、どこ行くんだよ。そんな顔真っ赤にして。」

逃げそうになった玲奈だったが、玄関で止まった。

「今の言葉、本当?」

「本当だよ。」

「・・・じゃね!」

「おう」

岳は、からかうように玲奈の胸をつまんで、笑った。

「もう、また触った。絶対学校でしないでよ。」

「しないよ。するわけねえだろ。やったらもうみんなにぼっ(ぼっ)にされるよ。」

「まいいや、ホントにじゃあね。」

「うん、じゃあね。」

そうして、玲奈は家に帰った。

修羅場

「もー、岳、乙女心分かってないんだから、玲奈ちゃん、帰っちゃったじゃん。」

七海は、2階に上がってきた岳に笑みをこぼしながら文句を言った。

「俺なんかイケないこと言った？」

「好きな人に『好き』って言われた時の気持ち、わかんないの？」

「うーん、よくわかんないな。好きだなんて、七海と玲奈ぐらいにしか言われたことないし。」

「本当？お姉ちゃんかなんかに言われてんじやないの？」

「いわれてねえよ。」

「そういえばさ、お姉ちゃんっておっぱい大きいよね。」

「何言ってるの？」

「何カッブぐらいあんの？」

「知らないよ。自分で聞けば？」

「あんたが兄弟なんだから聞きなよ。」

「んなの聞けるわけじゃないじゃん。」

「・・・ね、誰もいないしさ、久しぶりにエッチしない？」

「は？今日はしないよ。お前優輝とでもやってみろ。」

「今日は、ってことはいつかやってくれるんだね？ありがと。バイバイ」

岳が反論する暇もなく、七海も帰ってしまった。

次の日

体育の授業の前、男女のロッカー（着替える場所）では、男女それぞれ話に花が咲いていた。

「そういえば七海ちゃん、」

「ん？」

「最近、田島とはどうなの？」

「それ前も聞かれたよお。」

「いいから、どうなのよ。」

「え、どうなの、っていわれても・・・」

「エッチしたいんでしょ？」

「したいけど、勇気が出ないというか、あんまり田島君のりきじゃ無いんだよね・・・」

いや、1回だけ、その話をしてみたんだよ。そしたら、体目的だったの？っていわれちゃって、そんなんじゃないのに・・・、それからずっと、話してなくて・・・」

「そっか・・・」

「玲奈ちゃんこそ、岳とはどうなの？」

「別に私付き合ってないし。好きだけどさ。」

・・・でも、もうすぐでみんなと離れ離れになっちゃ

うんだよね・・・」

「うん・・・」

「そういえば、岳といえばさ・・・」

七海は、美奈が部屋に居ないことを確認して、また別の話を始めた。

「美奈ちゃんって、やっぱり岳の事が好きなのかな？」

「やっぱりって、何？」

「ほら、岳の近くにいると、どうしても好きになっちゃうじゃん。」

それにね、言っているのかわかんないけど、この前美奈ちゃんがね、玲奈ちゃんって岳のことを好きなの的なことを聞いてきてさ、そういうの、気にしてんのかなーって。」

「どーだかね。ま、どっちにしろ、岳は七海ちゃんのものだもんね。」

「みんなのものだよお。」

「・・・七海ちゃん、そのブラ、ちよっと小さくない？」

玲奈は、七海の胸を見ながら言った。

「そお？」

「だって思いつきりはみ出てるじゃん。」

「岳にもまれまくったからかな？でも、そんなこといったら、玲奈ちゃんだって。」

「だってさ、MF（マイファッション）という、洋服屋。前に出てきた、

ステンデーズのグループ会社。・・・なんだ、時々出てくるこういう謎の設定は！)の店員さんにさ、Dカップのブラありますか、って聞くの、ちよつと恥ずかしくない?なんかこのマセガキエツチやりまくってんなみみたいに思われそうで嫌なんだけど。だからこれC用なんだよね。」

「何それ、店員さん女の人でしょ?」

「うん、さすがに、次は言おうと思ってる。」

「そーだけどお。・・・話戻るけどさ、私、札幌行く前に、岳に自分の口から好きだ、って伝えたいんだよね・・・」

「ああ、一人だけずるいぞー!」

「あーやばっ!チャイムなっちゃうよ。早く行こう!」

「あ、ホントだ!急がなきゃ!」

男子ロッカー

「おい田島、最近七海とどうなんだよ。」

岳が友人の田島優輝に話しかけたが、その田島は少し岳のことを睨んで無視した。

「無視はないだろー、」

「おまえ何なの?」

「え?」

「おまえさ、ちよつと七海と仲良いからってさ、何?自慢?」

「は?お前のこと心配してやってんだろ。」

「俺知ってるからな。お前らがこそこそエロいことやってんの。お前んちに入ってる七海何回も見たことあるからな。」

「違うし。」

「何が違うんだよ。」

「おまえこそマジ何なの?俺はお前のためにやってんだよ」

「俺のため?ばっかじゃないの?そんな嘘、ばれないとでも思ったわけ?」

「嘘じゃねえよ。七海は少しでもお前とこれからも仲良くしてたいって思ってたよ。お前のこと大好きなんだよ。」

「は?俺、はつきり言ってることなんかそんな好きじゃないし。」

あいつが勝手に告白してきていわされただけだし。」

「おまえ、それはないだろ。」

「ほんとだよ！　七海なんかお前と一緒に消えてろ。」

すたすたと、ロッカーを出ていきそうになった優輝を、岳が呼び止めた。

「おまえ、それ、七海の前で言ってみろ。本当のお前の気持ちを言ってみろよ。おまえホントに言えんのか？七海のことが好きじゃないって、本当か？本当だったらそりや、『僕は七海のが嫌いでした』って、勇気もって言えるだろうな！」

「いえるし。」

「おまえ、七海が悲しくなるってわかんないのか？そうだよな、分からないよな。じゃあ、もういいよ。あいつは俺が存分に楽しませてやるよ。お前なんかあいつの事悲しくさせるだけだもんな！」

「・・・」

そこには、冷たい空気が流れた。

昼休み、岳は事情を言つて優輝を、何も知らない七海を屋上に呼んだ。

「あ、田島君。どうしたの？岳が呼んだの？」

その七海の顔は、すこし赤みがかっていた。

「優輝がなんか話あるらしいから。」

「話？」

「・・・俺、七海の事、大、」

次話に続く！（そんなこといったら、毎回次話に続いてますが・・・）

七海の好きな人。。。

「・・・俺、七海の事、大、」

岳は、息をのんだ。

「大っ嫌い。」

七海は、地面に向けていた顔を一気に上げた。

「勝手に告白しといて、俺はお前らに好きだって言わされただけなのに、お前はなんかエッチしようなんて言ってきたよ。いい迷惑だつーの。だいたいお前はエロすぎるんだよ。そんな奴が俺にお似合いかって、だれが見ても分かるだろ。この機会に言っておくけど、別れてくれる？ っていうか、別れろ。」

「おい、ゆうき・・・」

「岳、残念だったな。俺は勇気を持って、七海の事嫌いだって言えるよ。2人でイチャイチャしてろ。」

「・・・お、おい！」

優輝は、階段を下りて行ってしまった。

「七海、大丈夫か？」

すでに、七海の体の下は、水で湿っていた。(まん汁ではない

(笑))

「七海、まじで、大丈夫？」

「なんなの、あの人。」

「え？」

「勝手はどつちよ。告白したときに田島君が好きって言ったからそうなったんじゃない。」

「そーだよな。」

「もう嫌だ。」

「・・・」

「岳、わたし帰る。」

「何？ 仮病？」

「・・・」

「無理すんなよ。」

七海は、その日は家に帰ってしまった。

ただ、岳が家に帰ると、携帯にラインが来ていた。

『わたし、今何のために生きてるんだろう。』

そのメッセージを見た岳は、すぐに返信した。

『みんなを楽しませるためだろ?』

『でも、私が楽しめてないもん。』

『とにかく、家来な。おやつで焼きそば作っておくから。』

『うん・・・』

続けて、七海はもう一通メッセージを送った。

『やっぱり、わたし、岳のこと大好き!』

そのあとすぐ、七海は、岳の家に向かった。

「お、七海、早かったな。」

「うん。・・・早く岳に会いたかったんだもん。」

「なんだそれ。どーせ焼きそば食いたかったただけだろ。」

「それはそうだけど、本当だよ。」

「ふうん・・・ 何味がいい?」

「え、焼きそば?」

「もちろん。」

「うーん、今日は塩。」

「オツケー、作っとくよ。」

「あつりがとー!」

不自然にも見える七海の元気さだったが、これは本当の気持ちだったのかもしれない。

「そーいえばさあ、」

岳が料理をしていると、七海が話しかけてきた。

「岳って、なんで立校行こうと思ったの? 遠いじゃん。」

「うーん、やっぱなんとなーく東京がよかったんだよね。それに、立校は校則緩いし。埼玉はちよつと。んなこといったら七海は?」

「私はあ、岳と一緒に行ききたかったから、かな?」

「だったら、俺も、七海と早く一緒に行きたいなー、なんてね。」

七海は、ちよつと恥ずかしそうに笑いながら、もう一つ質問した。

「岳、立校毎日こっからいくの?」

「いや、親が、なんか引越せて。いろいろ、ストレスかかるからだって。」

「じゃあ、一人暮らし?」

「もちろん。」

「わたしどうしよつかなー。」

「一人暮らしすれば? 俺は、バイトもするつもりだけど。」

「でも、お母さん許してくれるかなあ。」

「立校に行くことは許してくれてんの?」

「うん。好きな学校行きなさい、って。」

「話してみれば? 七海の親、どっちもそういうの大丈夫なタイプだと思っけど。」

「あんた誰よ。」

「いや、なんか七海のお父さんとお母さんみてたら、そんな感じがする。」

「まあ、話してみるかあ。」

「水布江って、どこの高校行くの?」

「何、気になるの?」

「いや、気になりはしなくはないけど、べつにそういうのじゃないし。」

「うーん、普通に頭はよさそうだけど。」

「へえ・・・」

「いい加減、下の名前で呼んであげれば? 美奈ちゃん、寂しがってるよ。」

「なんでだよ。」

「美奈ちゃんも、唯一仲良くしてくれてる男子、岳だから、仲良くなるうとしてるのに。」

「いや、別に呼んでもいいけど、、、呼ぶよ。」

「あ、言った。わたし、聞いてたからねえ。」

「できたよ。 えーっと、何トッピングすればいいんだっけ?」

「今日は久しぶりに、何も載せないで食べてみる。」

二人は、ゆっくり、味わって焼きそばを食べた。

・・・楽しいひと時

「ほんとに酷いよね。田島君。」

岳は、避けていた話題を七海から切り出してきたので、ちよつとビックリした。

「え?」

「わたしだって、勘違いしたのは悪いとは思ってるよ。でも、あれは・・・」

「そうだよな。大っ嫌いはないよな。」

「あと、最後の、エロすぎるっていうのもむかつくよ。誰がエロいっつーの!」

「いや、それはちよつと否定できないけど・・・」

「なあにそれ。岳にエロいなんて言われたくないんだけどお。」

「・・・???

どういう意味?」

「そのまんまだよ。ああ、美味しかった。ごちそうさまでした。」

「はい。」

「だめだよ、そういう時は、お客様には『お粗末様でした』って言わないといけないんだよ。」

「誰がお客さまだよ。」

「わたしだよ。」

「・・・お粗末様でした。」

「よろしい。」

「おまえホントに客かよ。」

まだ七海ここにいる?」

「うん、居たい。」

「何すんの。」

「うーん、エッチはしたい気分じゃないから、一緒にゲームでもしない?」

「あの、一応受験生なんですけど。」

「大丈夫だよ、ちよつとぐらい。わたしは頑張るし、岳はもう勉強いっぱいしてるんだから。」

「ふつうは勉強すんの。」

「お願い！」

「・・・分かったよ。」

その棚の一段目、色々ゲーム

はいつてるから、適当に選んでて。」

「オツケー。何があるかなあああ。」

あ！ マリオ！

ね、マリ〇やろう。」

「なんかほかに大人っぽいのが無かったの？」

「大人っぽいのもって、エロゲー？」

「ちげえよ。その、子どもっぽくないって意味。」

「結局エロゲーじゃん。」

「じゃもういいよ、マリ〇で。」

という事で、七海と岳はマリ〇カー〇をやることにした。」

「二人で対戦しよう！ わたしね、マリ〇カー〇ね、得意だからね。」

「俺も強いから。」

「じゃあコース選んでいいよ。最初。」

そのあと岳の家からは、楽しい声がたくさん聞こえてきた。

「そいや美奈はさ、最近大丈夫そう？」

「大丈夫って？」

「いや、あの、はじめのこと・・・」

「どこを基準に大丈夫って言うのかがよくわかんないけど、前よりは大丈夫そうだよ。わたしと玲奈ちゃんがけっこう色々一緒にいたし、岳も仲良くしてくれたみたいだし。」

「ああ、結構。」

「実は岳ってちっぱい好きなの？」

「別に好きじゃないけど、女の胸なんか別に関係ないだろ。性格だよ。性格。」

「嘘だね。どーせおっぱい目的だもん。」

「だから違うって！」

「んじや、玲奈ちゃんのどこが好き？」

「それは・・・」

「ほら、やっぱりおっぱいと顔だよ。」

「ちが・・・」

「そうなでしょ。よし、わたし帰るね。」

「もう?」

「何?おっぱい触りたかった?」

「あ、触りたかった。」

「じゃあいいよ。ほれ。」

岳は、七海の胸を触った・・・というか、揉んだ。

「なんか、大きくなった?」

「そーかなあ?」

「でかくなってるよ。」

「岳が揉みまくるからだよ。」

岳のおちんちんは相変わらず

ちっちゃいままかな?」

「だから俺のはデカいつつってんだよ。」

「ふん! 少なくともわたしのバイブよりはちっちゃいね。」

「いや、そもそもバイブは本物の棒の形してないからね?」

「でも、バイブのほうがデカいもん。」

「どーでもいいよ んなことは。」

「あつそ。じゃね。また明日。」

「じゃ。気を付けてね。」

「うん。」

岳はその時、七海の眼が涙でいっぱいだったのを見逃さなかった。

いろんな話 1

玲奈は、洋服屋さん（MF）に来ていた。

・・・目的は、ブラジャーを買うためだ。

なぜ新しいブラジャーが必要か？それは、ブラだけ着けた時のほみ出方を見ればわかるだろう。（というか、前も言った。）

恥ずかしい気持ちを抑えながら、玲奈は女性店員に声をかけた。

「では、サイズを測らせてもらうので、こちらにきてくださーい。・・・ご自分ではかられますか？」

「いや、大丈夫、です。」

「じゃあ、こちらにどうぞ。」

・・・予想通り、彼女はEカップのブラジャーを買う羽目になった。そのころ、七海の家

「お母さーん！ちよつと話があるんだけど。お父さんも来て！」

七海は、一人暮らしの件について話そうとしていた。

「あのね、わたし立校行くなって言っただじゃん。で、通学、毎日電車乗るの大変じゃん？」

「、、、一人暮らしをしないと。」

「そう！」

「お父さんはいいよ。ちよつと心配だけど。」

「でも、七海、お金はどうするの？」

「バイトする。もちろん、家も出来る限り自分で探すし。」

「バイトっていったって、ねえ。」

「まあ、いいだろう。七海ももうすぐ高校生なんだから、それくらいやれなきゃダメだろ。」

「ありがとう！」

意外にも話はすぐに済んだようだ。

七海はそのあと、岳に親に許しをもらったとメールを送った。

そのころ、岳の家

「ただいまー！」

午後6時、岳が夜ご飯を作ろうとした瞬間に、岳の姉が学校から

帰ってきた。

「おかえりー」

「岳、ご飯出来てる?」

「今作ってる。」

「あんがとー」

「んいえば岳、」

姉が、リビングに来るなり話しかけてきた。

「何?」

「岳さ、今度引越すって本当?」

「引越すって言うか、一人暮らしするの。引越すっていうのか。」

「いつ?それ。」

「春休み。」

「あ、そっか。あんた受験生だったね。わざわざ立川まで行かなくていいのに。」

「立校がいいんだよ。」

「さみしいなあ。」

「何が?」

「岳がいなくなっちゃうことに決まってんじゃん。私ね、自分から言っちゃうけどね、ブラコンだからね」

「きもつ。」

「そういうこといわないでよ。あんただって実は私の事好きなんですよ。」

「誤解です。尊敬はしてるけど。」

「素直じゃないなあ。　　そいや岳はさ、セックスとかしたことあるの?」

「岳は、いきなりの姉からの質問に、咳き込んだ。」

「ねえよ。」

「じゃあ、家族以外の女のおっぱい、見たことある?っつーか、触ったことある?」　　正直に。」

「・・・あるよ。」

「うそ！ 誰の？」

「・・・やだ。それは言えない。」

「まいつか。いずれ分かるだろうし。」

「・・・ごはんできたよ。」

「お、ありがとう。」

「じゃあお姉ちゃんはさ、誰かとセックスとかしたことあんの？」

岳は、出来上がった料理を姉に渡しながら、姉に質問をした。

「私もないよ。男のちんこすら岳以外のは見たことない。」

岳のも多分岳が中学はいつてから見てないわ。岳見せてくれないんだもん。」

「あたりまえじゃん。弟の前で裸になってるやつがおかしいんだよ。」

「岳、見てたの？」

「見てるに決まってるじゃん。みようとしないで見えちゃうよ。」

「私のおまんこも見たわけだ。」

「・・・あの、食事中なんで、そういう話止めてもらっていいですか？」

「はいはい。」

「ごちそうさまでした。 岳、料理うまくなったね。これで

一人暮らしも安心だ。」

「そう？ありがとう。」

「岳以外にもさ、今の友達で立校行く人とかいないの？」

「いるよ。」

「へえ、じゃあ、その人たちも立川らへんで暮らすわけ？」

「たぶんね。そんなにほかの人のこと知らないけど。」

岳がそういうと、岳の携帯にLINEの通知がきた。

「あ、七海、」

「七海ちゃんから？」

「うん。」

岳と七海は幼馴染で、よく遊んでいたが、時々、岳の姉も一緒に遊んだりしていた。七海も姉の事を、姉も七海の事を慕したっていて、仲がいい。

「あ、そっか、岳は七海ちゃんの事好きだったんだ、今思い出した。」

「そんなん昔の話だよ！」

「あ、昔は好きだったんだ・・・ まあ、可愛いもんね。」

「昔も好きじゃねえよ。そういう好きじゃないから。」

「まじで？そういう感じ？ 中いい友達ー、的なの？」

「うん。 お姉ちゃんもそういう友達いるでしょ？ ほ

ら、前サマーランド行った時のあの男子とか。」

「ああ、あれはね。 確かに。」

「ほら、そんな感じだよ。」

「なるほどね。なんか分かった気がする。 . . . なんか

さ、岳とこうやってザ・青春、みたいな話できるの新鮮だわ。

岳も大人になったね。 身体じゃないよ？心がね？」

「身体も成長してるけどね？」

「見ないけど。」

「見てほしくもねえよ。 そいういうさ、変態思考止めて

くれる？」

「あんたもエロいんだよ。 この前七海ちゃんが言ってたよ。」

「俺がエロいのはお姉ちゃんのをせいじやん。なんか俺が小学校のころ

からさ、俺の棒時々触ってきたりさ、なんか『セックスって知ってる

く？』みたいなこと言ってきたりさ。」

「でも、私がいなかったところでエロくなんなかったってことは無く

ない？」

「それは違うでしょ。」

「じゃあ今度セックスしたら教えてね。 私、部屋で勉強してくるか

ら。 あんたも受験生なんだからオナつてばつかないで勉強しろ

よ。」

「オナつてないです。」

なんか、岳つてやっぱ可愛い、そう思った姉であった。

登場人物ファイル

岳のお姉ちゃん（筑波 明理（つくばあかり） 血液型：A型 誕

生日：2月3日

高校2年生。一応明理という名前ではあるが、小説の中の状況説明

文（岳は、咳き込んだ、的な文）では岳のお姉ちゃん、もしくは姉、と称される。こちらでもエロいよう。ブラコンと自分から言うほどのブラコン。どこの学校に行っているかは分かっていない。

テーマパークに4人でお出かけ

岳がくが通っている学校は、音楽祭がこの前の10月の金曜日で、珍しく月曜日が振替休日なので、この月曜日を利用して、玲奈れな、七海ななみ、美奈みな、岳の4人は今度は千葉海浜ちばかいひんマウスースランドに行くことにした。

「うわっ！マウスースランド!!!」

「ダッファイルンだ！」

わーいー！」

「かわいい〜」

女子3人は、マウスースランドを目の前に、笑顔をはじけさせて楽しそうにはしゃいでいた。そんな光景を見ていた岳は、

「・・・可愛いなあ。」

と思わず言ってしまった。

「今なんか言った？」

「い、いや？ っていうか、玲奈、いつの間に・・・」

「何が可愛いのか？」

「いや、あの、あれ、マウスースランドのキャラクター？」

チ

リップ？だっけ？ 鼻赤いやつ。」

「名前はチラップだし、チラップは鼻が黒いほうです。赤いほうはデ

リデリ。」

「ややこしいんだよ、名前が。」

「そんなの私に言ってもしょうがないでしょ。」

「いやそうだけど・・・」

「ね、みんなさ、最初なに行く？」

「ジエット？」

「ジエットにする？」

「いいよん！」

「岳ものるでしょ？」

「ジエットって、ジエットフィールドプラス？」

「そうだけど・・・」

「まじか。俺無理・・・。」

「なんでよお。」

「岳、絶叫系苦手だもんね。」

「そうなの？七海ちゃん。」

「うん。」

「でもマウスースーブランドから絶叫系取ったら何も残んない？」

「それ思った。」

「ね、岳、あ、また言っちゃった。エロ男、ああ、もうめんどくさいーもう岳って呼んじゃうよ？」

「別に俺はいいけど。」

「まとにかく、これだけは一緒に乗ってよ。お願い！」

「え・・・!?分かったよ・・・」

吐いても知らないよ。」

「やだ！きつたな〜」

「冗談冗談（笑）いいよ。乗るよ。」

「やったー！ 私隣ね。」

「ふむ。」

「玲奈ちゃんと岳なんかカップルみたいだね。」

七海は笑いながら言った。

「もお、そういうこと言わないですよ。はずいじゃん。岳もなんでにやにやしてんのよー！」

玲奈は、岳の肩を平手打ちした。

「いってーなー！ 早く乗るんなら乗ろうよ。」

「オツケー！」

「乗ろう！」

「美奈ちゃん絶叫系大丈夫？」

「大好きだよ！」

「あはははは・・・」

やっぱり美奈って、なんかおかしいな。

椅子（ジェットコースターの座るところ）に座った岳は、汗をかきまくっていた。それを見た七海は、後ろを向きながら言った。

「岳、すっごい緊張してんじゃん。」

怖いから玲奈ちゃんの

隣だからか分かんないね。」

「どっちもです。」

「あ、言ったくー！」

「つつーかみんなさ、またスカートとかできてんの？」 ※第1話参照

「しようがないじゃん。ズボン似合わないんだもん。それに

ね、私見せパンだから、別にみられても大丈夫だし。」

玲奈が言うと、七海と美奈も、「わたしもー」と口々に言った。

「見せパン？」

「ウソ!? 見せパン知らないの？」

「知らないよ。何？それ。」

「あれだよ。パンツの上に、上って言うのかな？上って言うか。まどうでもいいんだけど、パンツの上にパンツはいてんの。見られても大丈夫なやつ。」

「へえ、いまいちピンとこないけど・・・」

「お姉ちゃんとか履いてないの？」

七海が聞いた。

「知らないよ。いまだに信じられないし。」

「さあ！ スタートしまーす！安全バーを下げてくださーい」

「あああ楽しみだねえ。」

「ね！」

「うん！」

「・・・」

「行ってらっしやーい！」

スイツチの近くのお姉さんが、超笑顔でスタートさせた。悪魔だ。

「あゝゝゝ もうやだ。 やだやだやだやだやだやだやだやだやだや

だやだ！」

傾斜を上っていると、岳が叫ぶ。

「うっさいなあ。」

「まじで苦手だし。」

「じゃあもし、ゴールするまでに岳が叫ばなかったら、ご褒美あげるね。頑張ってね。」

「ご褒美って？」

なんとなくパンツ見せてあげるとか胸触らせてあげるとかそーうい

うエロい系なんだろうと分かってはいたが、聞いてみた。

「どーしよつかない　　・・・えーつとねー、」

玲奈が言おうとした瞬間、乗り物が急降下した。

「うっわ！

あああゝ!!!

ダメダメダメ。

むっりー！

「あくあ、もう叫んじやったよ。ご褒美なしね。」

「なんでだよ。　あああー！」

二人はコースターに揺らされながら、会話を続ける。

「私ね、」

「ううう!!!

なんか言った？」

「・・・なんでもない。」

「なんだよ、なんでもないわけないじゃああああああん！

うぐっ

「ホントになんでもないもん。」

「・・・はあああああ。はああ。はあ。超疲れた。くっそ疲れた。」

「もうう岳うるさい！」

「恥ずかしかったあ。ほかの人がちよつと笑ってきたりするんだもん。」

「岳君、本当にこういうの苦手なんだねえ。

すっごい面白い

のに。」

「これの何が面白いのかが全く分かんないんだけど。」

「面白いよお。」

「・・・」

「次どこいこつか？」

「わたしねー、スライムベール行きたい。　これなら怖くないでしょ???

「はい、ありがとうございます。お気遣いいただきいて。」

「よおし、じゃあ、行こう！」

「玲奈さ、さっき何言おうとしたの？」

「だから何でもないって言ってんじゃん。」

「ま別にいいけどさ。」

そのあと、4人は混雑するマウスーズブランドの中で8つくらいアトラクションに乗った。

「はあ、疲れた。」

「楽しかったじゃん。」

「まあ楽しいっちゃ楽しいんだけどね、うん。」

岳は、自分に言い聞かせるように言った。

「ごはんここにする？」

マウスーズブランドの中で夕食を食べるところを探していた4人は、非ブランド系列の洋食屋さんに着いた。

「おい玲奈、」

岳は、テーブル席の隣に座った玲奈に小声で言った。

「何？」

それに、玲奈も小声で返す。

「あのさ・・・」

耳元に岳の口が寄せられ、玲奈の頬は少しピンクがかった。

「さつきから思ってたんだけど、、

よこから

胸が見える。 気を付けて。」

「そういうこと言わないでよ！ 恥ずかしいじゃん！」

「だって、見えてるんだもん。」

「なんでそれもみんなの前でえ！」

「いや、早めに言わないとみんなに見られちゃって恥ずかしいかな、って、思っただけだけど。 ま 別に見られてもいいんだったら、

いいけど？」

「ありがとうございます。」

玲奈はふてくされながら言った。

「かといって今から何か対策ができるわけでもないんだけどね。

っていかさ、い、い、

玲奈の眼が何か本気になった気がしたので、岳は少し玲奈から離れた。 た。

「何見てんのよ！」

その声と同時に、岳はものすごい力で平手打ちされた。

「った！ お前みんなの前でそういうこと言うなよ。」

「岳だつてみんなの前で言ったもん。お相子だよ。」

「なんじゃそりゃ。」

「ほんとに仲いいね、玲奈ちゃんと岳。」

「だからそうやってからかうのやめろよ。」

「嬉しいくせに。こんな美女に相手してもらつてえ。」

「そりゃ嬉しくないわけじゃないけどね。」

「言つたよ　　もうわたし聞いちやつたもんね」

明日みんなに言つちやおう。岳は玲奈ちゃんのこと好きなんだよーつて。」

「それは私がヤダよお。」

「そつか。ごめんごめん。」

「そいやさ、、、」

「ん？」

「まだ観覧車のつてなくね？」

「あー、忘れてた。存在を。」

「どうする？　最後に乗る？」

「乗ろう！」

結局観覧車も乗つて、4人は閉演時間ぎりぎりまでマウスースブランドを出た。

地元まで帰つてきて、それぞれの家に着こうとしてきた4人は、玲奈の家の前でちよつと立ち止まって喋っていた。

「あくあ、今日も楽しかった！」

「ね！」

「ちよつとね。怖かつたけどね。」

「なんかホントごめんね。私が行かせてるみたいになつちやつて。」

「大丈夫だよ。そんな風に思つてないし。」

「じゃあね。」

「じゃくね」

「じゃね」

「うん。またね」

4人はこの後それぞれの家に帰った。

岳は、Mr. ハウスマンという不動産屋に来ていた。高校に入学してからの家を（部屋を）探すためだ。

「じゃあ、トイレ・バス別で、和室があればいいということですね。」

部屋の広さは特に指定は無いということでは、

「こちらはどうぞでしょうか？」

「ああ、外見よさそうですね。」

「家賃は月・・・」

話はどんどん、その部屋を買う方向に進んでいった。

親もいろいろと質問したうえで納得したようで、契約ということになった。

店を出て岳はお父さんと家に帰った。

「え！岳もう契約しちゃったの？」

次の日、七海にその話をする、びっくりしたような回答が返ってきた。

「しちやったって何？」

「いや、、、早いなあって。」

「おまえはまだなの？」

「うん。まだ。ね、家ってどこらへん？」

「えつとね、確か、国立駅ってところの近くだった気がする。」

「しってる。そこ。」

こういったのは、七海ではなくて美奈だった。

「そこね、わたしが前住んだところの近く。」

「へえ、、、って、いつの間に美奈、、、」

「今きた。」

「え、岳のところってマンション？」

「まあ、マンションっていうか、アパート？日本人の感覚的な問題で。」

「いいなあ」

「いつ引っ越すの？」

「3月の28日だよ。」

「ほお。」

「つてそんなこと聞いてどうすんだよ。」

「いや、聞いてみただけ。」

「そいえば玲奈ちゃん今日まだみたいだね。」

「ああ、ほんとだ。」

「玲奈ちゃん、遅刻かなあ〜?」

「その前に、美奈、椅子の上で体育座りしないほうがいいとおもうよ……」

「なぜに?」

鈍感というか、女としての自覚がないというか……

岳が笑ってごまかしたので、代わりに七海が教えてあげる。パンツ見えてるよなんて言えたもんじゃやない。美奈は罪深い。

「あ、ごめんごめん。 岳君そんなところみてたんだね。」

「いや、話してたら目に入ってきただけだから。」

「嘘だ。 岳いつも女の子の変なところ見てるもん。」

「七海は何でそれを知ってるんだよ……」

「やっぱりそうなんだ。」

その時、チャイムが鳴った。このチャイムが鳴った時に椅子に座っていないかったら、遅刻ということになる。そして日直が紙に名前を書かなければいけない。もつとも、その時間にはまだ先生はいないことが多いので、仲良しの間だとなしにしてもらうこともできなくもない。

まあ、そんな話はどうでもよくて……

「玲奈ちゃん、来ないね。」

それだけ言って、さっきまで二人の近くに椅子をもってきて座っていた美奈は、自席に戻る。

美奈が話せる友達に岳達3人ぐらいしかいないので、いつもわざわざ岳と七海のほうに来て話している。

七海と岳は席が近くなるので、そのまま話を続ける。

「ね、珍しい。玲奈ちゃん休んだこと今までにあっただけ?」

「記憶の限りは無いけど。」

「なんかあったのかな？」

「風邪とか？」

「ないと思うよ・・・」

か弱そうに見えて意外とごついことを七海はよく知っている。間違ってもそれを岳に言ったりはしないけど。

「優輝もいないな。」

「いいよ。あんなやつ。」

「あんなやつってなんだよ、気持ちはわかるけど、さすがに言い過ぎだよ。」

「だってえ・・・」

「あ、先生きた。」

岳のほうを向いて話していた七海は、くるっと本校転換した。

先生の話を聞いたところだと、玲奈と田島はまだ連絡が来てないらしい。

休み時間、二人は玲奈たちの欠席のことについてまた話していた。

「優輝が玲奈とデートにでも行ったとか。」

岳は、冗談っぽく言った。

本人は七海の前で失言をしてしまったかと思ったが、彼女は気にしない様子で話を続けた。

「それは無いと思うよ。玲奈ちゃん本当に岳の事大好きだもん。」

「そうっすか・・・」

そのまま玲奈のいない学校を過ごしていたが、3時間目が終わって玲奈が汗をかきながら学校に来た。

「玲奈ちゃん！」

「お!？」

「どうしたの？」

「・・・」

なぜか玲奈が悲しそうな顔をしていたので、七海と岳と美奈は心配になった。

「大丈夫？」

岳がそう聞くと、玲奈は首を横に振った。

「大丈夫じゃない、と・・・」

「なんかあったの？」

今度は無言のまま、玲奈は首を縦に振る。

「一回、先生のところ行ったら？」

「また、玲奈は首を縦に振った。」

4人は職員室に行った。

新たな敵？

職員室に着いた。

すると、玲奈が何か言おうとしていた。

「あの、、」

「ん？どうした？」

それに気づいた岳は、玲奈にどうしたのか聞いた。

「やっぱ先生に言うのはいい。」

「でも、今来ましたって、言わないと……」

「それはいいけど、、遅れた理由……」

「ああ、いいよ。」

「でも、なんかあったの？」

「誰かが、、私の事つけてきてる……」

「えーっと、つまり、ストーカー？」

玲奈は、恐ろしそうな顔をして首を縦に振った。

「そっか、、」

「じゃあ玲奈ちゃん、今はさ、わたしが先生に玲奈ちゃんが来たこと
言っておくから、後でスクールカウンセラーのところ行かない？」

この学校のスクールカウンセラーは女性が2人と男性が1人。確
か七海と玲奈は、「絵里さん」という若い女の人と仲が良かった気が
する。ちなみにその絵里さんは、女子からの人気も高いが、男子から
の人気も絶大。

「行く……」

「そっか、じゃ、予約しに行こう。美奈ちゃんも一緒に行こう。岳、玲
奈ちゃんが来たって報告してきてね。」

「な、なんで俺？」

「愛する玲奈ちゃんが困ってんだから、助けてあげなよ。」

「いや、あ、はい……」

別に言うこと自体は嫌じゃないんだが……

先生がなあ……

岳たちのクラスの担任の若草先生というとっても若い女性。数学

を担当している。この学校では若い女性の先生はとても珍しい。それも今年教師として採用された先生。去年この学年の担任をしていた数学の先生が不祥事で学校から追い出せなくなったから、穴埋めみたいな感じだ。大学時代の功績を認められたのか、いきなり3年生の担任を任されたので最初はちよつと緊張していたようだけど、今じやこの様子だ。

美人。というか、高校8年生みたいなき感じのかわいさ。性格も子供っぽい。甘えん坊。(俗に、かまちよ?)・・・巨乳。・・・んなことはどうでもいいか。

けつこう関わりやすい先生なんだが、なぜかその先生は僕が先生の事を好きだと思ひ込んでいる。

そのせいで、いろいろ話すたびにからかってくる。

「失礼します・・・」

岳は、色々心配事はあつたが、職員室に入る。

「若草先生いらつしやいますかあ?」

「はい。筑波君どうしたの? 私に会いに来たのかな?」

若草先生が、妙に色気を使って、胸を見せるようにして上半身を曲げる。

「ち、違いますっ。」

「うふふ、どうしたの? とにかく一回職員室の外出ようか。」

僕は、職員室から追い出される。

「えーつと、江川さん、来ました……」

「あ、玲奈ちゃんが来たのね。ありがとう。・・・で、それだけ?」

「え?」

「せっかく私に会いに来たのに、それだけでいいの?」

「大丈夫です。毎日会えるんで。」

「そんなこといってー、、 はっ!」

「どうしたんですか?」

「もしかして、筑波君、玲奈ちゃんに浮気した……?」

・・・状況的に『浮気』という言葉はふさわしくない気がするが・・・
「まっ、筑波君が私の事好きなことはもうとつくにわかってるからっ

！安心してねっ！
ほら、授業、始まるよ。 あっ、
そっか、次私の授業だね。 大丈夫だよ、チャイム着席でき
なくても私が許してあげるから。 ちょっと待っててね、一緒に行こう
ねっ。」

ん？今なんて言った？ 先生は僕が神妙な顔をしているのに気づ
いたのか、もう一度念を押すように「一緒に行こうねっ」と言っ
てきた。

仕方なく、僕は先生の事を職員室の前で待っていた。

「お待たせー 待った？」

「いえ、別に…」

・・・デートの待ち合わせかよ。

「違うでしょ、そこは、『だいじょうぶ、俺も今来たから。』でしょ？」

Repeat after me mr. T ukuba. 『俺も今
来たから。』

英語でしゃべったせいか、『俺も今来たから』の部分もなぜかなま
つている。

「ほらっ！筑波君！」

「え？ああ、俺も今来たから。・・・」

「ま、ぎりぎり合格つてとこかな。駄目だよちゃんとこういうところ
で言えるようになってかないと。いつか私とデートするとき、困っ
ちやうででしょ？」

「まだ決まってるわけじゃ…」

「決まってるの！」

そして彼女も、岳の事が好きなのであった。

登場人物ファイル

若草 沙理奈 23歳 血液型：B型 誕生日：3月1日

今年教師として採用されたばかり。顔はとてもかわいく、性格は子
供っぽい。ただでさえ甘えん坊だが、岳の前になるとそれ以上にな
る。岳が自分の事を好きだと思っ込んでいて、彼女自身も岳の事が好
きらしい。胸はEカップあるが、偉い先生がいないところだと谷間が

見えるような服を着ていることがある。玲奈に嫉妬心を抱いているが、その理由は岳の事、胸の大きさ、モテ度によるものだと思われる。

新たな敵?・2

先生が自分の事をなんとなく意識しているということとは、岳も勘付いていた。

「そうだ、筑波君、今度、デートでもしない?」

「えーっと、先生とですか?」

「当り前じゃない。・・・筑波君なら付き合ってくれるでしょ?」

そう言つて彼女はさりげなく、腕を組んでくる。

「ええっ、ちよっと・・・!!!」

「腕組んじやダメなの?」

「いや、そういうわけじゃないですけど・・・」

今日はいつもに増してアタックが強い。

「・・・どうしたんですか?先生。」

岳が、疑わしいように聞く。

「どうしたつて、何が?」

「いつもと、なんか・・・」

「じゃあ、いつ行く?」

話聞いてました?」

という言葉は、心の奥にしまっておく。

「いつつて、、、まずどこにですか?」

一応、話にはのっておく。

「そういうのは男子が考えるんでしょ。」

「はい、、、」

キーンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴った。僕らはまだゆっくりと、腕を組みながら歩いている。

ほかのクラスは授業が始まっているので、先生が小声で話しかけてきた。

「結局のところさ、、、」

「はい?」

「筑波君つて、誰の事が好きなの?」

「へ？」

「・・・だから、筑波君は、誰の事が好きなの？」

「誰って、」

「じゃあ、質問の仕方変えるよ。」

筑波君は、玲奈ちゃんの事

好き？」

「ええ、、、???

・・・まあ。」

「そっか・・・

じゃあ、私の事好き？」

「うつつ・・・」

岳は答えに迷っていた。

「私は筑波君の事が好き。」

「・・・僕もです、、」

「本当に？」

「ん、まあ。」

「じゃあ、それを、示して見せて。」

「示す？」

「体で示して。」

「え？それって、、」

「冗談よ。」

「ちよつと、冗談きついですよ・・・」

「したい気持ちはあるんだけどね。」

「え？」

「ううん、なんでもないわ。 ねえ、今度、私のうち来ない？」

「先生の家ですか？」

「そうよ。」

「え、先生の家ですか？」

「そうよ。」

「ん？先生の家・・・？」

「だから、そうよ。」

「先生の家って、先生の住んでる家ですよね？」

「うん、先生の住んでない家は、先生の家じゃないと思うよ。」

「そうですね・・・」

ここで、岳はさつきから一步たりとも会話が進んでいないことに気づいた。

「大丈夫？ 筑波君。」

「へ？ ええ、ん、大丈夫です・・・」

「じゃあ、来てくれるのねっ！」

「だれがいつそんなこと言いましたか・・・？」

「ありがとっ！ 先生嬉しい！」

残念ながら自分の声は先生に聞こえてなかったみたいだ、岳がそんなことを思っていると、先生がいきなり抱き着いてきた。

「うぐっ！」

同時に、先生のやわらかい胸が体に当たり、岳はとても複雑な気持ちになった。

「ちゃんと来てねっ！ 来てくれたらおっぱい揉み放題だよっ！」

「・・・予定は後で聞くから。」

「はい・・・」

「教室着いちゃったね。」

しばらく歩き、教室の前に着くと、ほかの人に聞かれないように小声で先生が話しかけてくる。

「そう・・・ですね。」

「つまあ、どーせ筑波君と一緒に居れるからいいんだけどね。」

「じゃあ、授業頑張ってるね！ 私は怪しまれないようにちよつと遅れてはいるから。」

「わかりました。」

「みんなにばれない様だねっ！
ちやうからっ」

「・・・ばれたらお仕置きし
そう言っつて、彼女は岳の右頬に口をつけた。」

「失礼します。。。」

自分のクラスだが、律儀にあいさつをする。

岳が自分の席に着くと、七海が小声で話しかけてきた。

「何してたの？」

「何してたの？ っつて、お前に頼まれたから先生に言ってきたんじや

ん・・・」

「言ってきただけ？」

「う、ん。」

「ほんとに言ってきただけ？」

「だから、そうだって。」

「・・・じゃあ、その口紅のあとは何よ。」

「・・・？ ううう・・・!!」

「どうせ若草先生とイチヤイチャしてたんでしょ？ で、キスでもされたんでしょ？」

「されて・・・されました。すいません。」

「ったく、この浮気者！」

「つち、違うんだって！一方的に！」

しかし反論は聞いてもらえず、七海は前を向いてしまった。

その時岳は、玲奈が落ち込みながら七海と岳の話を聞いていることに気づいた。

「そういうことか！」

先生が入ってきたのと同時に、岳が叫んだ。

「筑波君、どうかしたの？」

「いや、なんでも・・・」

岳は、みんなから笑われた。

「先生！」

授業が終わった後、岳は先生に抗議しに行った。

「何？またキスしてほしいの？」

「違いますよ。先生、玲奈に見せつけるためにわざと僕の頬に口紅の

あと残したんでしょ？」

「まあ、そう、なるわねえ。」

「うー！」

「ごめんごめん、なんかあげるから、ごめんね。」

「いらないますよ・・・」

「わたしの愛は？」

「へ？」

「わたしの愛、いらない？　今、誰も愛をはぐくめる人がいないから……」

彼女は、少し寂しげにそう言った。

「(？)……もつと良い人いますよ。」

「そうかなあ。　ま、いつか。　じゃあね。」

「あ、はい、さようなら。」

「ああ、それと岳君！」

彼女は、何か思い出したように岳を呼び止めた。

「はい？」

「お仕置き、今度してあげるからね！」

「できれば避けたいところですが、はい。」

「じゃあね。今度こそ。」

「さようなら」

岳は若松先生に一礼してその場を去った。

今日は5時間授業だった。先生の緊急会議とか言って、ホームルームとかも省かれた。

……よく考えてみれば、先生は彼氏さんがいたはずだった。

でも、さっきの言葉から察するに、別れたのかな？

今日は先生が自分に今までと比べてやたらしつこく接してきたけど、もしかしてそれと彼氏さんの事は関係あるのかな…？　別れちゃったとか。

岳は、そんなことを考えながら下駄箱に向かった。

3年生で部活もないので、みんなの下駄箱の中身は全部上履き、…と思つたら、岳以外に3名、靴が入っている人がいた。

岳はそれで玲奈と七海と美奈の3人の事思い出した。

……確か今は、相談室に行っているんだっけ。

岳は、一応行ったほうがいいと思い、急いで相談室に向かった。

ストーカーを捕まえろ！ 1

相談室に着いた岳が相談室のドアを開けようとする、なんとドアが勝手にあいた。……ではなく、七海たちが出てきた。

「わあ、びっくりした。……なんだ、岳か。」

「なんだ、ってなんだよ。」

「いや、もうちよつとイケメンだったらよかったな、って。」

「おい！」

「冗談だよ。」

「ってか、お前ら、なんでもう出てきてるの？」

「話が終わったから。」

「もう？」

「そう、これからね、玲奈ちゃん家で、そのストーカーを捕まえる作戦を考えるの。」

「岳も来る？」

一通り七海が説明したところで、玲奈が話を持ち掛ける。

「えーっと、玲奈の家？」

「女子中学生の部屋、入りたくない？」

「はい。行きます。」

「岳、目が気持ち悪い……」

いろいろいざこざはあったが、結局4人で玲奈の家に行った。

「そこら辺座ってね。今飲み物持ってくるから。」

「あ、ども」

岳は、そんなことを言いながら部屋のあちこちをじろじろと見ている。

「ちよつと岳、ダメじゃん、そんなに玲奈ちゃんの部屋じろじろ見ちゃ！」

そう、ここは玲奈の部屋だった。

「いやあ、ここでさ、毎日玲奈が暮らしてるって考えると、なんか、ほほえましいなあ、って。」

「ほほえましい、って、ただ変なこと考えてにやにやしてるだけじゃ

ん。」

「考えてないって!」

「ほんと?」

「うん。ほんとほんと。」

その言葉には、力がなかった。

そんなところに、玲奈が温かいココアを持ってきた。

「あ、ありがとうございます。」

「ありがとう」

「センキュー」

「で、作戦どうする?」

みんな、一口ずつぐらいココアを飲んだところで、七海が話を切り出した。

「そのストーカーは、玲奈の事いつも追いかけてるの?」

「いつも、ってことじゃないかもしれないけど、3日前ぐらいからよく。学校行くときとか、塾行くときとか。」

「じゃあ、もしかして、家特定されちゃったりしてる?」

なぜか、岳は小声で話す。

「かもね。」

「盗聴器とかは?」

「さすがにそれはないと思う。戸締りちゃんとしてるもん。」

「じゃあ、大丈夫だな。今から話しても。」

「え、なんか心配!」

ここまではぼししゃべっていなかった美奈が、いきなり叫んだ。

「ほかのところで話そうよ。」

「いや、今から別の場所行っちゃって、あんまり変わらないから。」

「うう。じやいや。」

4人は、なかなか案が出ず、困っていた。

「あゝ」

岳が静かに手を挙げた。

「俺、ストーカーになったつもりで考えてみたんだけど、ちよつと案言ってみていい?」

「いいよ。」

「ストーカーは、嫌がらせとかするためにストーキングすることもあるけど、玲奈の事が一時的に好きになっちゃった、とかありえない？」
「ありえる。玲奈ちゃんかわいいもん。」

「いや、そんな、、」

(完全否定はしないんだ)

「成人男性が、玲奈の事を好きになった。それに相手は女子中学生。」「で？」

「だからその、、性的なことをしたいわけだ。」

「うっわ、変態！」

「いやいや、俺がしたいと思ったわけじゃないからね？」

「続き、お願い。」

玲奈は、いつもにまして冷静に話を聞いている。

「そういう、、いやらしいことをするには、人目のつかないところに2人でいなぎやいけないでしょ？」

「うん。」

「だから、、三角公園の公衆トイレとかに玲奈が入って、それでストーカーが三角公園にほとんど人がいないことを知っていれば、ストーカーも着いていくわけだ。もってこいの場所だから。」

「ああ、それで、ストーカーがトイレに入ったところで、みんなでバババー、ってするのね。」

「バババー、ってなんだよ。」

「わかるでしょ。」

「まあ、なんとなくはわかるけど。」

七海はいまいち話すのが苦手だ。まあ。小さいころから一緒だったので、もう中学に入る前には慣れていたが。

「じゃあ、今日行ってみよう。」

七海は、元気そうにたちがる。

「ちよ、ちよっと待ってー！」

「どしたの？玲奈ちゃん。」

「そ、その、さ、」

「うん」

「その作戦だと、私って、もしかして犯人に……」

「……」

「犯されちゃうの？」

中学時代 リメイク完了 学校での話 リメイク

夏休みが明け、まただるい二学期が始まった。みんないつもより少し早めに来て、久しぶりの再会を喜び合ったり、休み中の思い出話なんかを思い思いに話してたりする。もう中学生生活最後の運動会も終わったから、あと大きな行事は10月中旬の音楽祭(合唱祭)だけ。みんな、もちろん俺も含めて、一生懸命に歌の練習をし始めている。

始業式の二日後、学校について教室に向かおうとしたら幼馴染の大川七海に声をかけられた。こいつは身長148cmといういわゆるちびでやせ形。でもその割には胸が結構でかい。家も近所で小学校中学校とクラスが違ったのは二年間だけ。ショートカットがよく似合うさわやかな子だけど、実は中身は結構エロい。恋愛感情はないけど、よく「カップルみたいだね」と言われる。

「おお、七海、おはよ」

「おはよ。、、、。」

「え、何?なんかあったの?」

「あの、さ、」

「うん」

「今日、昼休みにさ、ちよつと相談したいことがあるからさ、中央階段の踊り場に来て。」

「オツケー。」

「よろしく。」

「うん分かった。」

何の話か気になったけど、昼休みの前にその話題を出すのはなんか違うなーと思ったので、昼休みまでは何も聞かなかった。

昼休み、言うとおりに指定された場所に行った。トイレ寄ってから行ったからか、七海のほうが早く場所についていた。

「あ、ごめんちよつとトイレ行ってて。」

「ううん。全然大丈夫。」

そう言つて彼女のはさらつさらの髪の毛をバサバサツと振つた。

「ねえ、わたしが田島君のこと好きなのは知ってるでしょ？」田島、
「テーマパークに行ったときにいたメンバーだ。っていうか彼女らに
は秘密だけど、もともとこれは田島と七海を成功させるために誰かが
企画したものだ。」

「ああ、お前が6年の時に告白してずいぶんと噂になったもんな。」

そう、彼女は一度田島に告白したことがある。その時は返事は確か
「なかった」はずだ。

「うっさいなあ。」

彼女はちよつと眉間にしわを寄せて、怒つたようなそぶりを見せ
た、いつもならこういうこと言うときつをけつてきたりするんだけ
ど、今日はなんだか元気がない。

「ごめんごめん、ん、で？」

「うんでね、この前みんなで遊んだ後に、告白したの。」

「まじか。そうだったの。で？」

「返事はオーケーだったんだ。だけどね？」

「おお、よかったな。だけど？」

「田島君、勉強できるじゃない？だけどわたしはいくら頑張つてもた
ぶん田島君ほどはならないじゃん。」

「そうだね。田島は別次元だからな。」

「でき、高校別々になつたら今より会えるの少なくなっちゃうじゃん。
だからね、その前にできるだけ思いで作つて、わたしから心が離れな
いようにしたいの。」

「ほお。・・・は？」

「だから、Hしたいの。」

「はあ？お前自分が言ってることわかつてんのか？まだ中3だぞ。」

「わかつてるよ。でも、」

せつかく手に入れたんだよ？なのに学校別々になつてほかの女の
子に奪われたくないの。」

「うん、まあ、わかんなくも・・・いや、やっぱわかんねえな。とりあ
えずさ、ここで話すのやめない？今日、放課後空いてる？」

「うん」

「じゃ、家こいよ。それからもつと話聞いてやるから。」

「ありがとう。・・・優しいね。」

「当たり前だろ、俺なんだから（、・ω・、）」

「なに調子乗ってんのw」

七海の顔にも笑顔が戻ってきた。

「本当に、岳優しいよね。女子には。いつもエロ目線だけど。いつも女の子の変なところばっか見てるでしょ？今も。」

「なんで俺が今見てるって知ってたんだよ！」

「見てるんだ！」

「みてねーよ。」

「いやだって今言ったじゃん！」

「はい見てましたすいませんでした。でもんなこといったらおまえだってなんかあれば男子の下半身の大事な棒ばっか見てんじゃねえかよ。前だってなんで俺のが起ってるのに気づいたんだよ。それに胸見せやがってよ。」

「それは、そんな気分だったからよ気づいたのは岳のおちんちんがいつもおつきくなってる期になっちゃうからだよ。・・・岳だってわたしの見れてうれしくせに。」

「う、うれしくないわけじゃないけどね？」

「ふんっ、正直に言えばいいのに。」

「いやでも俺は、」

「俺は？」

「いつもの、普通の、七海のほうが好き。」

「なっ（*ノωノ）」

「じゃあ、放課後な。直で俺んち来ていいから。」

「え、あ、う、うん。じゃね。あり、がと。」

岳は七海に背を向けながら手を振った。

「なんだよ、カッコつけやがって。」

七海は岳に気が移っていくのを感じていた。

天然七海リメイク

家に帰った岳は、リュックサックを玄関に置く間もなく、一階のトイレに向かった。

いつもこうだ。学校では行かなくても我慢できるんだが、家に入ると途端に、尿道が開いてしまう。

二十秒ほど出して手を洗い、ドアを開けたところにはなぜか七海がいた。

「ちよつなんでおまえいんだよっ!」

「だって、鍵空いてたんだもん。」

「でも、トイレの前にいるのはちよつと・・・もしトイレのドア閉めてなかったらどうしてたんだよ。」

「うーん、顔だけトイレん中に入れて、挨拶するかな。」

「おい!さすがに七海常識なさすぎだろ!俺男子だぞ!男子が用足すときって棒出さなきゃいけねえんだよ?」

「それぐらいは知ってるよ。でも 別にみても怒らないでしょ?わたしだっておっぱい見せても全然恥ずかしくないもん。」

「怒るわ!」

「あ、そう・・・ごめんなさい」

「話聞いてやるから、俺の部屋行つて。ちよい飲み物用意するから。」

「うん、ありがとう。この家さ、いい匂いするよね。」

「え?」

「ほら、ラベンダーの香りっていうのかなあ」

「ああ、あれじゃない?大塚製薬の玄関芳香なんチャラってやつ。」

「CMでやってるやつ?」

「多分、そうだと思う。」

「なんだ、岳のおいかと思った。」

「知らねえよ。・・・たんすとか勝手に開けんなよ。」

「なんでー?」

「なんでって、、、とにかく、開けんなよ。」

「うん、たぶんわかったー」

「たぶんってw」

「おじやましまーす」

彼女はそう言っつて、岳の部屋に入った。

・・・なんだか嫌な予感がする。岳は急いで自分の部屋に向かった。

「ジュース持ってきたー」

「あ、ありがとー」

「つてててなんで、お前それ持ってんだよ!」

悪い予感が的中した。

七海の手にはいわゆるエロ漫画が握られていた。

「?そこに置いてあった。」

「うそつけ、ちゃんとたんすんなか入れてあったぞ。・・・開けただろ?」

「ごめんなさい、開けました。」

「はい、とにかく見なかったことにしなさい。いいかい?」

「はあい。」

「つたく、一人でいれなきやよかった。」

「岳こういうの見るんだね。」

「いや別にー」

「別に?」

「なんでもないです。とにかく、絶対に誰にも言うなよ。」

「うんわかった。ほんとにごめんなさい。そんなつもりじゃなかったの。」

「いや別にいいけどね。七海なら。」

「え?」

「七海なら、信用してるから。」

「う、うん、ありがと。」

「あ、さつき昼休みの時に行つてた、わたしのこと好きってどういうこと?」

「いや別にLOVEじゃなくて、LIKEだよ?」

「なあ〜んだ。」

「なあ〜んだ、って、お前何期待してたんだよ！」

「べ、別に期待してはないよ！　・・・でも、」

「でも？」

「ちよつと、LOVEのほうがうれしかったかな？」

「知らねえよ。」

「あれえ？照れてるのかなあ？」

「照れてねえよなんだよお前」

「ごめんごめん。」

「はい、話の続きは？」

「話？」

「だからお前が優輝（田島）のこと好きだから、Hしたっていう、話でしょ？」

「あ、そうだったね。・・・ねえ、どうやったらさ、田島君とHするときに気持ちよくさせてあげられるのかなあ。」

「お前はさ、Hって何をするつもりなの？」

「えつと、最初にフェラしてあげて、おっぱい触らしてあげて、揉んでもらって、sex・・・かな」

「え、え、え、お前、sexって、コンドームつけるよな？」

「もちろん！そのくらい常識あるよ。」

「いや中学生でsexする時点で常識があるとは思えないけど・・・

　　ってか田島ってそこまでエロくないだろ？七海のためにもゴムなんて買ってくれるか？」

「そっか・・・じゃあ、私が買おっかなあ。」

「ネットは？」

「いや、もし家族が出ちゃったらなにこれ？ってなるじゃん。」

「そかそか。じゃ買えば？俺は買ってあげないからね。」

「わかってるよ。・・・じゃあ、さ、わたしとHしよう？」

「・・・は？」

「だから、わたしとHしよう。だから、ゴムかって。ね？」

　七海は岳に顔を近づけて、誘惑してくる。

「七海と、sex・・・いや、だめだ。だいたいね、あのね、こんな

年齢でsexなんてしたら、人生おかしくなるよ。」

「知ってるよ！岳に前にも言われたよ！でも、わたしがやりたい理由、知ってるでしょ？」

「応援だけだからな。」

「はあ。ねえ、岳、」

「ん？」

「だからさ、Hしない？」

「え振り出し？」

「だって始めてやるの田島君だと緊張しちゃうんだもん。sexまでしなくていいからさ。」

「いやだ。」

「なんで？」

「いやなの！ 七海とは、友達でいたいのに！」

岳は、ちよつときつめにいった。

「・・・そうだよね、ごめんね。岳は友達だもんね。大事な友達だもんね。こんない人と、Hしようなんて、わたし、ごめんね。」

七海は、ちよつと眼を潤わせて、真つすぐと岳を見つめた。

「いや、あ、こつちこそごめん。ちよつと強く言い過ぎたよな。」

岳はそう言つて、立つて、ちよつと七海の頭を撫でてみた。

「岳・・・」

七海は岳の顔を見て、笑顔で、こう言つた。

「起ってるよ」

「えっはつまじかつ！」

岳は慌ててベットのの中に隠れた。

七海は岳が被った掛布団を勢いよく、豪快にどかすと、「岳くん、ちよつと興奮しちゃったかな？」と馬鹿にしたように言つた。

岳は相変わらず七海と目を合わせようとも顔を見せようともしない。
「ごめんごめん、岳。ズボンの上からでも大きいのがわかったよ？」

「黙れよ！恥ずかしい！」

「大丈夫だよ、わたし一回生で岳の見たことあるから。」

「は!?!いつ!?!ってか大丈夫じゃねーよ!」

岳は勢いよく飛びあがった。

「うわあ、びっくりした。ほら、去年、岳んちの水道が止まっちゃったときに家のお風呂岳借りにに来たでしょ?」

七海と岳は幼馴染だ。家も3軒となりだ。

「そんなときに、気を付けたんだけど、老化と洗面所のドアが開いて見えちゃったんだよね。気づいてなかったの?」

「気づいてなかった・・・」

「いやあ、ごめんごめん。どうしたの?そんな顔真っ赤にして。恥ずかしいの?」

「そりや恥ずかしいよ!お前なんだよほんとにトイレには入ってくるし今頃去年俺の棒見ましたとか言ってくるしもー!」

「うう、ごめんなさい。」

「いいよもう。お前もうすぐ塾の時間じゃない?」

七海は岳の部屋の時計を確認した。

「はっ!ほんとだ!ごめん!行かなきゃ!」

「おう。玄関まで送るよ。」

岳と七海は急いで玄関まで行って、七海は靴を慌ててはいた。

「岳、今日はありがとう! 楽しかったよ! いろいろごめんねw」

「ううん、大丈夫。俺も楽しかったよ。じゃあ明日ね。」

「うん、ばいばい!」

七海は満面の笑みで岳に手を振った。

ある日の出来事 第二段 リメイク

「おっはよー」

教室に入った岳は、元気に挨拶する。

「あ、岳、おはよう。」

「おう、優輝」

優輝というのは、田島のことだ。

岳は、自分の席に迷わず向かう。

岳は、カバンから荷物を出しながら、「あ、七海、昨日の話の続き、いつか話そうと思ってるから、空いてる日教えてくれる?」

と、前の席の七海に話しかけながらさりげなく胸をもむ。(もちろん、ほかの人にはばれない程度に)

「ちよつと変態!」

七海もそうは言ったものの、なぜかうれしそうで、岳と七海の間には笑みがこぼれる。

「オツケー、うーん、明後日なら空いてるよ。」

「わかった。じゃあ、また家に来てね。」

「うん、昨日はありがとね。」

「いや、こちらこそ。」

3時間目 体育の時間になった。

夏、体育、水泳!

ということ、水着にみんな着替えている。プールサイドに行く、と、七海を含めた何人かの女子がもう反対側のプールサイドにいた。

・・・やばい、サポーターつ県の忘れたー

でも今から更衣室に行ったらなんか恥ずかしいし・・・

と、思いながら女子に目を向けると、なぜか興奮して勃起してきちゃった・・・

何とか地獄のプールの時間は過ぎたものの、その次の十分休みに更衣室から教室に戻る途中、七海に声をかけられた。

「ねえ、今日すごい岳のおちんちん大きくなってたでしょ?」

「おまえさ、人の前でそういうこと言うなよ。っていうか前から思っ

てただけど、七海おちんちんっていうのやめろよ。なんか一緒にいるこつちも恥ずかしくなってくるよ。もう中3だぜ？なんか、せめて、「肉棒」とかいういいかたできないかな。」

「でも、わたしが「おちんちん」って言ったほうが、岳興奮するでしょ？」

「どういうところでサービス精神ばらまいてんだよ。そういうのは別にいいんだよ。」

「ふーん、じゃ、おちんちんっていうのは岳の前だけにするね。それならいいでしょ？」

「うん、まあ、いいけどさあ。男子は、七海が「おちんちん」って言った時より、七海の胸とか見えた時のほうが興奮すると思うよ。」

「何それ？はつきり言ってるね、そんなこと思ってるの男子で岳だけだよ。」

「んなことねーと。ほかの男子だってお前のちよおとでつかい胸見て喜んでんだよ。ああ、でも、七海は男子が引くほどエロいから、みんな玲奈のことしか見てないかー」

玲奈というのは、クラスの女子で、多分男子の人気はクラスナンバー1だ。文句なしの美人だし、優しいし、スタイルもいいし、なんどやせ形なのにDカップ。ここまでいくと、なんか女子の魅力はすべて胸じゃないかっていう気がしてくるが、もちろんそんなことはない。女の魅力というのは、もっと奥深くにあるものだ。（と思う）そしてこいつも、岳と同じ小学校。

「はー!?そんなこと言ったら、岳だつてエロ過ぎて女子からも全然相手にされてないじゃないわたくしが岳と仲良くしてあげてんの少しくらい感謝しなさいよ。」

「それはこつちのセリフだよ。」

「ふーんだ。こつちには田島君がいるもーんだ。」

「じゃあ俺だつて2回や3回玲奈の家行つたし。2回や3回玲奈のDカップ揉んだことあるし。」

「玲奈ちゃんばかり。岳、玲奈ちゃんのこと好きなんですよ？岳なんかただのエロ野郎つて。この前玲奈ちゃん行つてたよ。あーらか

わいそう。本当にかわいそう岳ちゃん。

「んなつ！岳ちゃんってなんだよ。幼稚園児の七海ちゃん」

「幼稚園児はこんなにエロくないもくん」

「楽しそうだね、エロ男ちゃん。」

岳が振り返ると、そこには噂の玲奈がいた。勢いよく後ろに振られた岳の腕は、玲奈のDカップの、拍手したくなるほど真ん中にあたった。

「うわ、気持ちい・・・あわわわ、ウソ、今のウソ。ごめん。」

「やっぱりエロ男はエロいね。」

「いや、ほんとにごめんってば！偶然だよ偶然。」

「わかってるよ。別に触られてもそんなに恥ずかしくないし。」

「あ、七海と同じようなこと言ってる。玲奈もエロいよな。あんまりみんなには知られてないみたいだけど。ま、こんなにエロいから出してる時点でエロくないわけがないよな。」

岳はそう言っ、右手で玲奈の右乳を持ち上げた。

「んもうっ！さりげなく触らないでよ！こんなところで！っていうか私がおんなになっちゃったのはエロ男のせいでしょ？」

「なぜに!？」

「だってエロ男が小学校のころからおっぱい揉んできたりエロ用語いっぱい行ってくるから私だってそういうの覚えちゃってエロくなっちゃったんだからね。それに、エロ男がいっぱいおっぱい揉んでくるから、こんなに大きくなっちゃって・・・」

「それは俺のせいじゃねえよ。どっちにしろお前はそういう道を歩むことになるんだよ。」

楽しそうに話している岳と玲奈を見て、七海は口すらはさめずに、なぜか嫉妬心を覚えた。

しかし、そのたびに、「わたしは岳のことは好きじゃない、わたしは田島君のことが好きなんだ」と、自分に言い聞かせた。七海の岳に対する思いは、鯉ではないのかもしれないが、これは友情と一言で片づけられるほど簡単なものではない、と、七海自身も分かりかけていた。

実は、去年の修学旅行の時、七海は玲奈からこんなことを聞いたこ

とがある。

それは、定番の好きな人の話に名た時のことだ。

「私ね、岳のことが好きかもしれないんだ。」

その時、七海はこう答えた。

「なんで？玲奈ちゃん、あんなやつ。」

その質問に、玲奈はこう答えた。

「なんか、空気が好き。」と。

七海と玲奈は親友だ。この時も七海は玲奈に「がんばってね！応援してるよ！」といった。

でも七海は応援したことをちよつと悔やんだ。

七海は岳のことが好きなのかもしれない。七海は岳と小さな時からずっと一緒にいた。

七海は、岳を他人に取られたくなくて、玲奈に取られた時のことを考えてちよつとゾツとした。

しかし、そんな七海の乙女心にも気づかずに、岳と玲奈は会話を弾ませているのであった。

誰が好き？&明日の約束 リメイク

水泳の授業の時にサポーターをつけ忘れた日から二日が経った。

(作者さん、恥ずかしいからそんな前のことを今頃蒸し返さないでー)

今日は、七海とまた話す約束をした日だ。

ここで、岳や七海、玲奈などが通っている学校について簡単に説明しよう。

ここは、埼玉県にある公立中学校。

1年生が6クラス、2年生が7クラス、3年生が7クラスとここら辺では結構大きい学校で、学区も結構広い。

岳たちのクラスは3年3組。担任の先生は若い女性の先生。結構人気がある。

んなもんでいいだろうか？

七海とまた話すのがちよつと楽しみだったので、岳は急いで家に向かった。

この前みたいなのがないように、ちゃんと玄関の鍵も閉めて、トイレに向かう。

数秒間用を足していると、聞き覚えのある声で「岳」と呼ばれた。

・・・なぜだ!!!なんでまた七海が家の中にいるんだ!

ちよつとパニック状態になりながら、用を足し終えて急いでトイレのドアを開けると、七海の胸と岳の腹のあたりがぶつかった。

「おう、っ、つて七海、なんでまたいるんだよ!」

「だってー、岳、玄関のドア、鍵さしたまま家入っちゃったでしょ?外にこの鍵丸見えだったよ。はい、カギ。」

七海はイルカのキーホルダーがついた鍵を岳に投げる。

「わたしがとってなかったら、この家に泥棒入ってたかもよ。」

「それはありがとうだけど、ごめんくださいぐらい言つてよ。」

「言つたよ。でも、岳がトイレでおしっこしてる時のおとしか聞こえなかったんだもん。」

「そ・・・ごめん。俺の部屋、行こう。」

「ん、ありがとう。・・・弾力あった？」

「何が？」

「わたしのおっぱい。さつき当たったでしょ？」

「え？う、うん。」

「その時の弾力、わたしのと、玲奈ちゃんのと、どっちがあった？」

「おそらく、玲奈のというのは、2日前のことだろう。俺の肘が当たった、例の、あれだ。」

「そういうのは、今はしない！いやらしい話はまた今度！」

「岳は、七海の背中を押して階段を上らせる。」

「なんでよくー！」

「今日は七海とそういう話はしたくない気分なの！一緒に楽しみたい気分なの！」

「そっか、ごめんね。」

七海は階段の中腹あたりでいきなり立ち止まり、神妙な顔でうしろ（岳のほう）を向いた。

「いや、大丈夫だよ、そんな。ほらあ、俺の部屋、いくぞー」

岳はまた七海を押し始める。七海も無理やり階段を上らされて、岳の部屋に向かった。

「あー、岳の部屋涼しいく冷房あったつけ？」

「ああ、昨日付いた。」

「あ、だからか。昨日、なんか大きいトラック来てたもんね。」

そう話しながら、二人は岳のベットに並んで座る。

岳がふと七海の胸に目をやると、岳の眼にはそこそこの谷間がはつきりとみえる。

それに、Tシャツと胸の間に何も見えない。

「ねえ、七海・・・」

「ん？」

「ごめん、一個だけ聞いていい？」

「うん、いいよ、何？」

岳は七海の胸を指さしながら、恐る恐る聞いてみる。

「今日、七海ってさ、ノーブラなん？」

「つつつ！ 変態！」

七海は岳の頬を平手打ちする。

「いや、変態つて、七海に言われたくないし、、、いや、ノーブラなの？」
「もお、さつき岳いやらしい話はしたくないって言ったのに！」
「いや、いやらしいとかそういうはなしじゃなくて、、、」
「ノーブラだよ！」

七海はちよつと恥ずかしそうに大声で言う。

「あ、そすか、ありがと　　なんで？」

「だってちよつとわたしはHとかしたい気分だったから、、、」

「Hしに来たん？」

「いや、そういうことじゃなくて、、、」

「ほお、うん。」

「なんていうか、、、」

「・・・」

「わたしね、」

「おお、うん」

「岳の事大好き！」

七海は、勢いよく岳に抱き着いて倒れる。

「七海、いきなりどうしたの、、、その前に、ぐるじい・・・」

「ごめんごめん、ちよつと言いたくなっちゃってさあ」

七海は岳を開放して照れ隠しするように前髪をいじり始める。

「だからってできつくことねえだろお？優輝に言っちゃやうぞお？」

「だめー！抱き着きたい気分だっただけー！もう、その話は終わりにしてよお！恥ずかしい。」

「わかったわかった、言わないから言わないから。」

「むー、信用できない！」

「えー信用してよー」

「じゃあ、ちよつと信じる。」

「よろしい。」

「あ、、、」

「ん？どした？」

「好きってというのは、恋愛的なことじゃなくて、その、友達として、って意味だからね?」

「うんうん。重々承知しておる。」

「ふわ〜、なんかさあ、岳つてさあ、一緒にいるだけで楽しいねえ。」
「俺も。七海と一緒にだと楽しいよ。 . . . いったいいじれて。」

「あー!そういうこと言うんだー!」

「うそうそ、ごめんごめん。一緒にいるだけで楽しいよ。」

「うん。えへへ。 ねえ岳さ、明日と明後日、うち、七海以外誰もいなくなっちゃうの。でさあ、寂しいから、ここ泊まってい?」

「明日と明後日 . . . 家もちょうどお母さんもお父さんもお姉ちゃんもいないけど。」

「なんで?」

「ああ、お母さんとお父さんは海外出張できようからいなくなってるし、お姉ちゃんは明日から修学旅行。」

「そつか。いい?」

「え、土曜日に来て、土曜日寝て、日曜日寝て、月曜日に出ていくの?」
「うーん。それでいいならそうするよ。」

「別に俺はいいよ。でも、月曜普通に学校だぜ?」

「じゃあ、学校用の荷物持つてくる。枕と、勉強道具と、あとリュックと、お箸と、コップと、歯磨きセットでしょ。あとは . . . あ、服もいるね。」

「今考えなくてもいいでしょ。つていうか、枕っているか?」

「だつていつもの枕じゃないと寝れないんだもん。」

「へえ〜」

「あ、あとお風呂も入らなきゃ。」

「え?お風呂もうちなの?」

「もちろん。じゃあバスタオルがいるね。お風呂一緒に入ったりはしないからね!」

「誰が一緒に入るかお前なんかと!」

「そつか、つさすがにそんなエロいことは考えてないか。」

「あたりまえだろ、七海のほうがエロいんだからな。」

「そういうことじゃなくて！」

「そういうことです。」

七海はなんだか不服そうな顔をしているが、それを無視して岳は話を続ける。

「寝るとき、どうすんの？」

「え、どうするの？つて？」

「どっちがベットで寝る？」

「ふたりでねれないの？」

「寝れるよ。でも、七海、確かお前寝相めちやくちや悪かったろ？」

去年の修学旅行の時、七海と同じ部屋だった女子が、何人か愚痴を言っているのを聞いた。

「わ、悪くないもん！」

「悪いよ。見たことないけど。」

「だったら言えないじゃーん！」

「とりあえず認めるんだ。だいたい一緒にベットで寝たくない。」

「認めないもん！・・・確かにそうだね、恥ずかしいね。」

「だろ？」

「じゃあ、やっぱりお客様のわたしがベットじゃない？」

「2回寝るときあんだから初日は七海で2日目俺だろ。」

「えーいつも女の子には優しいのにー。もうみんなに言っちゃおっかなあ」

「おまえ俺と一緒に寝たって話して、恥ずかしくないのかよ。」

「自慢になるもん！特に玲奈ちゃんには！」

「え？」

「いや、なんでもない・・・」

「そか。じゃあ、優輝に知られたらどうすんだよ。」

「あ、そっか・・・」

「2回とも、七海がベットで寝ていいから。」

「やったー！」

「無理やり感半端ないな・・・」

「はあー、今日も疲れたねー。」

「話題そらすな！」

その言葉も無視して、七海はベットに寝っ転がる。

「ああ、着かれたね。七海と一緒にいて。」

「なにそれー！」

そういいながら、七海は他人の布団の上で暴れだす。

「あ、朝ちゃんと綺麗に布団片づけたのに、こいつぐちやぐちやにしやがってー！」

そんなことを言いながら、2人でじゃれていたら、何か、床ドンみたいな形になってしまい、

七海が、

「あ、床ドン！」とか言いだした。

「つていうか布団ドンだよ！あゝあ、玲奈ちゃんに言っちゃおう。」

「なんでいつも玲奈なんだよ。」

「だって、岳、玲奈ちゃんのこと好きだから、玲奈ちゃんに知られたら恥ずかしいでしょ。」

「恥ずかしいは恥ずかしいけど、俺別に玲奈に恋愛感情は抱いてないよ?。」

「えっ」

「ほら、じゃ、明日、ちゃんと荷物持って、来いよ。」

岳は、その態勢のまま七海のCカップを揉みながらそう言った。

「あ、またあ。」

七海もそれに反応することはなかった。

玄関まで七海を見送った岳は、続けて、

「楽しみにしてるよ」と言った。

その言葉に、七海はなぜか敬礼ポーズをしながら「わたしも！」答えた。

その七海を、岳は、七海が数十メートル先で何もなくて転ぶところまでみて家に入った。

同居、なのかな？ 1日目 リメイク

土曜日の早朝、6時にお姉ちゃんは出て行った。2泊3日で沖縄に行くらしい。

お姉ちゃんが早く起きすぎたせいで、出て行った後に2度寝してしまいそうになったが、七海がいつ来てもおかしくないの、テレビなんか見たりして（ちよつと勉強もして）寝ないようにしていた。たぶん朝の10時ぐらいに来るんだろうなー、と思っていたが、まさかの朝の7時30分に来た。

「おじやましませーす」

「早くね？」

「だって朝ごはん1人で作れないから、岳に作ってもらおうと思って」「なんだよそれ。そんなんじゃないつまでたつても彼氏できねえぞ。」

「余計なお世話だよ！っていうか一応いるしっ！」

「そいや昨日、俺んち出て行った後に転んだけど大丈夫だった？」

岳は、笑いながら聞いた。

「ああ、昨日ね、道にカエルがいたから、びっくりしてころんじやつて。」

「まじで？」

「うん。ほら、家の隣の小さい男の子が、カエル飼ってて、それがちよつと逃げ出しちゃったらしくて。まあ捕まったって言ってたからよかつたんだけどね。」

「・・・へー良かったね」

「あれー？岳くんそういう動物苦手じゃなかったのかなあ？」

「に、べ、に、別に苦手じゃねえよ。」

「動揺しつきりじゃくん！あはっ！おもしろいっ」

「俺で遊ぶなっ」

「いやー、苦手ですよ？ だって小2でき、遠足で動物園行ったときに、カエル園みたいところあったじゃん？あそこでわたしたち同じ班でき、岳が中に入るようにさせるのすごい大変だったんだよー？」

「なんで七海そんな昔のこと覚えてんだよ。どうでもいい。」
「どーでもよくないよー!」

「ってかななこと言ったら七海だって虫苦手だろ?」

「それは女の子だからしょうがないのー!それに対して岳は男子なのにカエルごときでちよこまかてよんにやかカクカクシカジカ……」

「ああああ!もういい!認める!ご飯食べよう!」

「うん食べよう!」

「俺ろくなもん作れないけど、いい?」

「ろくなものって?」

「目玉焼きとか、チャーハンとか……まあそこらへんの……」

「えー!3日間全部それ?」

「いやお前なんで料理できないのに偉そうに……
それじゃないから大丈夫だよ。」

全部

「じゃあ食べよお〜!」

「のんきだな……」

と言つて、岳は家の冷蔵庫に入っているもので何か簡単に作つてあげることにした。

「朝ごはん、ご飯とパンどっちがいい?」

「うん、いつもはご飯だよ」

「じゃあ、ご飯にするよ。」

「うん。」

岳もいつも朝ごはんは飯なので、昨日の夜にご飯を炊いておいた。

というこつで、ご飯と、インスタントの味噌汁と、焼きシシヤモと、ミニトマトと、ベーコンと目玉焼きを一緒に痛めたやつと、アスパラガス炒めを作り始める。

学校でのくだらない話でもしながら、着々と料理ができていく。

二人分のお皿（七海のは普段お姉ちゃんが使っているやつ）に盛り付けて、七海の座つてる椅子のあるダイニングテーブルの上にのせる。

「うわー、おいしそう!岳、こういうの作れるんだね。」

「なんだよ、何も作れないやつがよ。」

「何も作れないわけじゃないもん！カップラーメンくらい作れるもん！」

「カップラーメンは料理じゃない。」

「冷たいなあー！じゃあ醤油ごはん！」

「それは米炊いて醤油かければいいだろ。」

「でもお米炊くのも大変だよ。」

「どこが大変だよ。ほら、みそ汁のめ。冷めるぞ。」

「あ、この味噌汁、おいしい〜」

「インスタントですよ。」

「・・・そうだったの？ ごめん。でもね、この目玉焼きのやつもおいしいー！」

「そ、ありがとう。」

十数分で、七海は朝ご飯を食べ終わった。

実は七海のほうが食べるのは早い。食いしん坊なのだ。

「ごちそうさまでした！」

「うん。」

「おいしかったよ！」

「ああ、七海はいいよ」

席を立てて食器をまとめようとする七海を止めて、今ようやくご飯を食べ終わった岳が2人分の皿をもってシンクに向かう。

「いやいいよ。わたしが洗い物ぐらいやるよ。」

「なんで」

「岳料理作ってくれたから、片付けは七海の仕事。いいから、わたしがやるから、岳は、休んでて。」

「う、ん、ありがとう。ごめん」

「うん。なんで謝るの。」

「いや、だって七海一応お客様なのに、なんか悪いなあって」

「いいっていいって。なんでもかんでも岳にやってもらってたらこの三日間変に気使うかもしれないし。いやだから。じぶんのやれることはやらないと。」

「そっか。そうだよな、ありがとう。」

七海の洗い物が終わって、二人は岳の部屋に移動した。

「これからどうする？」

「わたし、眠ーい。」

「はあ？」

「だってえ、わたし昨日楽しみすぎて夜寝れなかったんだもおん。」

甘えるように話す七海に対して、岳は、「俺も」と答えた。

「勉強したほうがいいんじゃない？結局公立目指すんだろ？」

「でもあきらめたほうがいいと思うんだ。」

「そんなことねえだろ。」

「岳はどこ行くの？女子高に交じっていけば？いろんなおっぱい見放題だよ。」

「無理に決まってるんだろ。とりま俺は滑り止め華埜嶋あたりで決定かな。」

「へえ〜あそこもいいところだね。あれ？確か玲奈ちゃんも私立だったら華埜嶋行くとか言ってた気がする。」

わたしも行くのかな〜？」

「うわ〜、お前いたら嫌だわー」

「なんでよ〜」

「嘘だよ。またいっぱいお前の胸見れるから大満足だよ。」

「あ、また見てるでしょ？」

「みてねーよ。もしかして、今日もノーブラ？」

「やっぱり見たんだ。見なきゃわかんないもんね。」

「いやだからノーブラなの？」

「そうだけど、確かめてみる？」

「じゃあお言葉に甘えるか〜」

岳はちよつとふざけて言ってみる。

「いいよ、触って。」

「え？冗談だよ？」

「なんだ〜」

「もしやるんだったら、明日な。」

「ほんとに!?!じゃあわたしも岳のおちんちんいっぱい触っていい？ズ

ボンの上からでいいからさ?」

「……」

「やったろ!」

「いや、まだやるなんて言っていないからな。」

「うろ」

「ほらほら、勉強するぞ。受験生なんだから。」

「はくい」

「勉強机でやるのとリビングでやるのどっちがいい?」

「ここがいい」

「そ。じゃあ俺リビングからもう一個椅子持ってくるから待っててね。」

「うん。」

椅子を持っていこうとリビングを出ると、トイレから「きやつ」という声が聞こえたので、岳は急いでトイレに向かってドアを開けた。

しかし、中を見ると七海が下半身裸だったので、とっさにドアを閉めて七海と話した。(毛が生えてなくてツルツルっぽかった……)

「だい……じよぶ?」

「だいじよぶだけど……」

「どうしたの?」(にやにやが止まらない)

「いや、ウオシユレットがさ、家のより強くて、ちよつとびっくりしちゃっただけ」

「なんだ、そんなことかよ。びっくりさせやがって……」

「つていうか、わたしの今見たでしょ!?!」

「……見たよ。ごめん。」

「感想は?」

「は?」

「わたしのおまんこ見た感想。ほら、前から岳クラスですつとおまんこ見せてよって言ってたじゃん。」

「えく、ツルツルで、入れたら気持ちよさそうだったよ。」

「え、入れてみる?」

「だからいれないって。早く、出すもんだせよ。椅子、持ってきたか

ら、勉強、早くしよう。」

「うん。最低でも、一緒に、華笠嶋行こうね。」

「なんだよお前行く気になったのかよ」

「だって、玲奈ちゃんと岳が仲良くなったたらいやだもん」

「じゃ、がんばれよ。」

そのあと、何もなかったかのように2人は勉強に励んだ。

思わぬお客様 リメイク

「ね、おなかすかない?」

約1時間の静寂（勉強していたから）を破ったのは、七海だった。この1時間、二人ともずっと隣にいるのにずっと無言で頑張っていたんだ。結構集中していたと思う。

「いや別に俺は―」

「空いたよね〜 じゃあ食べよ〜」

「・・・人の意見は聞かないのね。 何がいい?」

「チャーハン!か、ラーメン!か、中華スープ!」

「ん、中華系ね。・・・ちよつと買い出ししてくるから、待ってて。たぶん材料全然そろわないだろうから。」

「ステンドーズ?」・・・というのは、この家から徒歩一分ほどのところにあるコンビニエンスストア。全国展開はしていないようだが、ここでは人気がある。（らしい・・・）

「そうだけど。」

「じゃ、わたしも一緒に行く。お菓子も買う。」

「え?お前の金だよな?」

「え〜〜、ちよつとだから、ね?いいでしょ?」

「わかったよ。じゃあないなあ」

「やっさしい〜」

七海は突然、岳に抱き着く。

岳はその勢いで、床に倒れた。

「なんだよ最近どうしたんだよ七海〜」

「なんでもないよ〜」

顔が近すぎる。それにCカップがすごい。

「なんでもなくないだろ〜 恥ずかしいし重いし苦しい もうだめ」

岳は、恥ずかしさに負けて、七海をやさしく突き放した。

「ほんとに最近七海おかしいって・・・」

七海は、数秒間岳を見つめた後、「岳大好き〜」と言ってまた抱き着いた。

「お前何目的だ？ わかった、お菓子買ってやるから、だから、いいから離れて〜」

「やったー！」

七海は自ら岳を開放する。

「やっぱりお菓子目的だったんだな？」

「いや違うよ。 岳顔赤いよ？」

「き、気のせいだよ・・・ ほら、行くぞ。」

岳は恥ずかしさを隠すためか勢いよく立って、いつまでも座って笑ってる七海に手を出した。(差し伸べたって意味です。手を出した：そういういやらしい意味じゃないですw)

七海が岳の力も借りながら「うんとこしょっ」と立ち上がると、二人は仲良くステンデーズに向かった。

ステンデーズに入った2人は、偶然、玲奈にあった。

「エロ男と七海ちゃん、デート？声みんなにまるぎこえただけど。」

「デートじゃねえよ。ってか、なんで玲奈いんの？」

岳は七海がお泊りしに来てるなんて知られたくないため、がんばって話題をそらそうとする。

「家は、今日誰もいないから、お昼ご飯作る材料買いに来ようと思つて。」

「あ、おんなじだね。七海もね、お昼ご飯岳が作ってくれるっていうからー」

おいっ！七海、何言ってるんだよこいつーといわんばかりに、岳は七海の口を手で押さえる。

「何？七海ちゃん、エロ男んちにお泊りしてんの？」

ああ、もう言い逃れできない・・・

「だから、俺も七海も、ここ2日3日家に誰もいないから、七海がおれんちに泊まりに来たの。」

「いいなあ、七海ちゃん。私も今日だけ泊まっちゃダメ？」

「別に、わたしはいいけどー、岳が、玲奈ちゃんいると緊張しちゃうんじゃない？」

「なんでだよー！」

「だって、玲奈ちゃん美人だしおっぱ……」

七海もさすがに場所と状況を判断してその後の言葉はのんだ。

「じゃあ、とまってるの?」

「うん、別にいいよ。でも、ベットどうしよつか。」

「わたしと玲奈ちゃんが、ベットで寝て、岳は、下。」

「いや、一応俺のベットだからな。」

「レディーっちが岳のベットで寝てあげるって言ってあげてんだから、感謝しなさいよ。……仕方ない、2日目は岳がベットで寝ていいから。」

「なんで上から目線なんだよ。」

でも確かに、この美少女たち二人が寝たベットで今度生活していくのは結構ニヤニヤがとまらない事かもしれない。ここは、自分の欲望のままにやってやろう。

「うん、いいよ、ベットで寝て」

「やったー!」

「あ、ねえ!これ買って」

七海は、不動の人気を誇る中にチョコが入っているほうのチョコ菓子子を岳に渡す。

「……ん。」

岳も、仕方なく受け取って買い物かごの中に丁寧に入れる。

「え〜いいなあ。ねえ、エロ男、私にも買ってよお」

「え〜!!!お前絶対金めっちゃ持ってんだろ。」

「七海ちゃんには買ってあげるの?」

玲奈は、ほかのおかし探しに夢中の七海に聞かれないように、岳の耳元で小声で、

「夜七海ちゃんに内緒でいっぱい私のいろんなところ触っていいから。」と言った。

「わかったよ。」

岳は、玲奈にレモンの形をしたチューニングキャンディーを買ってあげる。

「ありがと、岳。」

「一個くれよ。」

「うー、あげてもいいよ。」

「上から目線・・・まあいいや。ありがとう。ん、おいしいね。やっぱちよつと溶けてないか?」

「そんなことないよお」

「岳、私のもあげる!」

玲奈は、七海と岳の会話に対抗するように、岳に無理やり渡す。

「サンキュー、お、やっぱこれもすきだなー」

「岳、結局お昼はチャーハン?」

「そうする。」

「やったー!わたしチャーハン大好きー!」

「この前キムチチャーハンが給食で出た時3杯もお分かりしてたもんな。七海、意外と大食いだよな。」

「玲奈、お昼はうちで食べるの?」

「うちって、岳の?」

「あ、うん。」

「食べていいの?」

「材料は足りるけど。」

「じゃあ、ただこうかな。」

「えつと、お箸と、コップと、あと寝間着とか、いろいろ持って着てくんない?」

「わかった。」

「じゃあな、玲奈が来るまでお昼食うの待ってるから。」

「ありがとくあとでね〜」

玲奈が一度家に向かったので、岳と七海は二人で岳の家に向かう。

「玲奈、来るの良かったのか?」

「別にいいよ。1日で帰るみたいだし。2日目は岳といっぱいエッチできるもん。」

「だからしないって。」

つつ!カエルっ!」

岳は、思わず七海に抱き着いてしまった。

道が住宅街の奥のほうの誰もいない道で幸いだった。

「うわっ、岳なによつ　　・・・ほら、やっぱ岳苦手じゃん、こう
いう生き物。」

「ご、ごめん。」

「いやいいんだよお。岳に抱かれるの好きだもくん」

七海は、腕を岳の首に回して抱き着く。

「ねえ最近本当にそういうの多いって〜　　七海大丈夫？」

「大丈夫だよ！岳のことが大好きなだけ〜！」

「そ、そういうことこういうところで言わない。」

「なんで、恥ずかしいの？」

「恥ずかしいよ。そりゃ」

「ま、しょうがないか。」

そうこうしているうちに、二人は岳の家について、岳は先にご飯を
作り始めて、七海は珍しく勉強を始めた。

お祭り (1) リメイク

七海と岳が岳の家に帰ってきてから30分ほどして、玲奈が大きな荷物を持ってきた。

勉強中だった七海が玲奈が来たことに気づいて先に玄関に迎えに行った。

大きな荷物を二人でもって、とりあえず岳の部屋に運び込む。

「おお、玲奈、ごはんできてるよ。」

「うん、お邪魔しまーす」

「岳ー、何チャーハン？」

「え？何チャーハンかはわかんないけど、普通にコンソメで味付けしたやつ。」

「おおー！やったー！そういうの好きだよー！」

「そう？そりやよかった。」

「あ、美味しい！へえ、エロ男、こういうの作れるんだ〜 いがいだね〜」

「ね〜意外だよね〜」

「なんでそんなに意外なんだよ。」

「だって、岳、そういうイメージ無いんだもん。」

「そうだよね、エロ男、基本スポーツ系だもんね。」

そう、前まで岳はサッカー部に所属していて、結構活躍しているほうだった。

「そういえばさ、七海ちゃんとエロ男。」

「ん？」

「え、あのさ、今日って佐志眞流さしまる神社の夏祭りじゃなかったっけ？」

佐志眞流神社の夏祭りは、この近所では結構有名なお祭りで、レベルの高い屋台も結構出る。

「あーそんなこと聞いたことがあるようなないようなー」

「うん、この前俺は聞いたわ。」

「でさあ、、、三人で行かない？」

「3人で？」

「わたしは行きたいー!」

岳は、玲奈の発言への答えに少し迷った。3人で行けるのはとてもうれしい。だが、玲奈はクラスの男子の人気ナンバーワン。もし同じクラスの男子にあつてしまったら、ただでは済まないだろう。社会的制裁は避けられない状況になる。けど我慢できなかった岳は、

「別に俺もいいけど」

と答えた。

「じゃあ、3人で行こう!楽しみだね」

(受験生だつていうのに余裕物故きやつて…)

「ごちそうさまでした!何時に出る?6時?」

七海は岳が余分に作ったおかわりチャーハンをほとんどつたにもかかわらず、もう食べ終わっている。

「まて、七海早い。」

「え、それでもちよつと遅いと思つたんだけど…」

「そつちじゃなくて、食べるスピード。」

「ああ、そつちか。そんな早くないよ?」

「・・・お前は一回ほかの女子の食べるスピードを見てみたほうがいい。」

「まあ七海ちゃんは元気が取り柄なわけだし、食べるのちよつと早いくらいいいと思うけどな。」

「そうだよね?」

「・・・」

「さ、ごはんみんな食べ終わったし、勉強しよおー!」

「宿題終わったー?」

「全然(笑)」

「俺は受験勉強に専念。」

「ふうん。玲奈ちゃん私立だったら華塾行くんだつたよね?」

「え、う、うん」

「いくなく岳と玲奈ちゃんは華塾でも余裕だろうから・・・」

「七海、」

「ん?」

「俺さ、第一志望華埜嶋にしようと思つて。」

「え？なんで？」

「いや、ちよつと、学校見学行ったら気に入っちゃつて。親も私立でいいつて言ってくれたし、普通に偏差値とかも高いし。」

「へえ、、じゃあもう入学決まったようなもんだね。」

「いや、そうやって油断していると落ちるから。」

「ごめん。わたしも目指そう。」

「じゃあ、3人で頑張るか。」

「よおーし、がんばろー！」

「そうだな」

玲奈は、ほほえみながら二人を見つめていた。

それから、窮屈に1つの机を3人で使い続けて4時間ほどが過ぎた。

七海はわたしの学力で岳と玲奈と一緒に華埜嶋に行くぞーと意気込んでいる。

「お、そろそろ時間じゃね？」

部屋の時計を確認して、七海と玲奈に岳が呼びかける。

「ほんとだ。」

「みんな、そのままの格好で行くのか？」

「あ・・・どうしよう」

「玲奈ちゃん、浴衣持ってたよね？」

「持ってるよ。七海ちゃんは？」

「わたしも持ってるけど、岳は持ってる、、訳ないか・・・」

「甚兵衛なら持ってるぞ」

「じゃあ、それでいいんじゃない？」

「2人とも、家に着物持つてこいよ。」

「えっ 岳何考えてるの・・・」

「いやそーじゃなくて、荷物ここにあるだろ！だから！」

「ああ、そゆこと。じゃあ一回家帰って取ってくるね。」

と言つて、3分ほどで七海は帰ってきた。

「七海、一人で着れんのか？」

「どーでもいいじゃん。どっちにしろ、玲奈ちゃんに手伝わってもらからねーだ。」

「着れないんだね。あ、電話。」

岳の携帯にきた電話は、玲奈からのものだった。

「どうやら玲奈は玲奈の家で着替えていくらしい。」

「七海ー、玲奈、自分の家で着替えるって。」

「えっじゃ、じゃあ、わたしどうするの!?!」

「どうするって、俺が手伝うしかないんじゃないかね?」

「でも・・・」

「大丈夫大丈夫、見ないから。」

「うん、、、じゃあお願い。」

「ほい。何すればいいん?」

「ちよつとあっち向いてて。一回上半身裸になっちやうからさ。」

「上半身裸・・・!?!」

「もうっ、変な想像しないでよっ!とにかく、あっち向いてて!」

「ごめんごめん。」

岳は、七海と反対方向を向く。

「んく、よいしょっ」

Tシャツを脱いでるのかな。

「そいや、彼女は今日もノーブラだったはずだ。だから上半身裸になるのか。」

上半身裸で浴衣を着こなせるのかという疑問は残るが、まあそれは置いておく。

それから、何か着ようとしているようだ。ノーブラで浴衣か・・・なかなか見ものだな。見てないのに想像するだけでなんだか興奮してくる。

「ん、、、あれ?ここが、、、あれ?」

早速でこずっているようだ。

「大丈夫かー?」

「う、、、大丈夫じゃない。。。」

「手伝ってやろう。」

「待って！」

「お、おう、」

「いよいよ」

岳が振り向くと、七海が両手で必死に両乳をおさえている。

下着は履いているけど、それ以外のところはなにもない。生肌だ。ぎりぎりまで出ている綺麗な脚、へそまで美しい。手で隠しているつもりなのかもしれないけど、結構はみ出てる。だめだ、うん、めっちゃ興奮する。なんかの撮影みたいになってる。ここまで見えていたら、全裸を想像するのも容易だ。

「もう、見てないで早く手伝ってよ！ 気持ち悪い！」

「いや、ちよつと体がエロ過ぎてさ。」

「ありがとうだけど！まずは手伝ってよお！」

「ごめんごめん、笑 なにすればいいん？」

「その白いやつとって。」

七海が顔を真っ赤にしながら、首で一生懸命その白いやつを指す。

「これか？」

岳は七海の後ろ側に落ちている白い服？みたいなやつをとる。

「うん。」

「なんだこれ？」

「浴衣スリップ。」

うしろからの景色も絶景だ・・・

下着が少し小さいのかな？けつがいい感じにちよつとはみ出ている。後ろからの乳も結構いい。前から見るより興奮するかもしれない。はつきり言っただけ今すぐシコりたい。

「聞いている？」

「え、あ、う、ん、ごめん、なんだっけ？」

「だから、浴衣スリップ！浴衣の下に着るの。」

「へえ。良くわかんねえわ。」

※ 浴衣スリップとは、浴衣の下（内側）に着る肌着のようなもの。汗を吸い取ってくれたり、ブラジャーなどが透けるのを防いでくれるものです。（らしいですw）

「とりあえず、それを、わたしに着せて。」

「なんで命令口調……」

「恥ずかしいから早く!」

「おう、ごめん。」

言われたとおりに、岳は七海にかぶせる。

見た感じ、普通に一人で着れそうだ。一体どこに苦戦したのだろうか。まったく、いつまでたっても七海のこととはよくわからない。

「ちよつともう一回あっちむいて。腕通さないといけないから。」

「はい。」

といいつつ、岳はちよつと気になってうしろをちらちらと見てみる。手を胸から放した。一瞬しか見えなかったけど、放した瞬間にちよつと重そうな乳がぼよんぼよんと落ちて行ったのがわかる。ひよつとしたら前よりずいぶん大きくなっているかもしれない。

浴衣スリッパ?を着終わってしまった。くそう、もうちよつと挿んでおきたかったのに。と思いつつも、ばれないように慌てて七海とは反対方向を向く。

なるほど、バスローブみたいな格好になるのか。

「岳、ちよつと、ここの紐結んでくれない?」

「紐?いいよ」

言われたとおりに、紐を結んであげる。

「七海……」

「ん?」

「お前胸でかくなつたな。」

「なっ、」

岳は、ちよつと右乳を揉んでみせる。

「んもう、玲奈ちゃんいないからって……! ずるいよっ! 自分のは触らせないくせに!」

「いや、だって七海はなんか恥ずかしくないみたいだし。」

「恥ずかしくはないけど……」

「で、でかくなってるだろ?」

「ちよつとね。Cのブラじゃ入らなくなっちゃった。」

「楽しみだなくもつとでかくなるの。」

「じゃあ、もつと揉んでね？」

上目遣いか。すげえそそる。

「いいよ。今度な。」

「もうそうやっていつも今度今度って、」

「今は早く祭り行かないと。ほれ、浴衣を着ろ。」

「う、ん。」

七海が持ってきたのはオレンジっぽい黄色の浴衣。なんか七海らしくてとてもいい。元気がよく出ている。桃色の持つてくるとてつきり思っていたけど、こっちのほうが似合っているかもしれない。

浴衣の着付けって男子が思っている以上に難しいらしい。

この時点で七海がもう苦労しているんだ。玲奈がどれだけすごいかがよくわかる。まあ、あいつはもともと器用なほうなんだが。

そのあとは、エロ目的でなく、純粹に七海を手伝ってあげた。

お祭り (2) リメイク

岳の助けもあつて無事に浴衣を着終わった七海は、岳にお礼を言つてお祭りの準備を始めた。

岳も、甚兵衛を着る。

「ねえ岳さ、今日ちよつとお金貸してくれない？」

「・・・またか？」

「またつて、い、い」

「金ねーのか？」

「うちに取りに行けばあるんだけど、今500円もないからさ、今日だけ、お願い！」

七海は顔の前で手を合わせてたのむつというような顔をした。

「いいけど、ちゃん返せよ」

「ありがとう！うん！ちゃんと返すよ！」

「準備できた？」

「うん！」

「じゃあ行こうか。」

「楽しみだね」

「まあ勉強漬けだったし、今日くらいはいいよな。」

「おやいなくてよかった。」

「そうだな。」

岳は最後にバッグに敷物を入れて、玄関ドアに鍵をかける。

もう出てしまった。誰かに見つかったらおそろく人生終わる。まあ全力で楽しむとしよう。

玲奈も追加され、3人で佐志眞流神社に向かう。

「玲奈ちゃんその浴衣綺麗だね」

「七海ちゃんのもかわいいよ♪」

うん、同意見だ。

いよいよ神社というところで、向かいの道にクラスメートが見えた気がした。

・・・気のせいかな。

気のせいじゃない!

あれはどうみても優輝たちのグループだ! 女子も何人か連れている。男女比3対3か。(俺は誘われなかったぞ)

いや、そんなことはどうでもよく、今とてつもなくやばい状況だ! 女子の格好を見る限り確実に祭りに行くのだろう。めっちゃやばい。

花火が有名な祭りで、花火会場では見つからない可能性のほうが高い。とてつもなく混んでいる。だが、屋台は一本道にずらーっと並んでいる形なので、普通に歩いていたら見つかるにきまつてる。かといって引き返せないし動きを制限するのも七海と玲奈にかわいそうだし……

まあなんとかするしかないか。

とりあえず今はあいつらと違う道を行けばいい。

2人に気づかれないうように何とかしよう。

「ねえ、」

「ん?」

「ちよつとき、東口から入らない?」

「なんで? 北口から入ったほうが近いよ?」

「ほら、あの、花火の会場、東口のほうが近いから、ね、混むから先とつておこう、場所。」

「そっか、そうね。そっちのほうがいいかもね。」

「だよなだよな! じゃああっちから行くぞ。」

「うん。岳、どうかしたの?」

「え? ……何もないよ。」

「そっか。」

……さすが七海、俺と長く付き合ってるだけある。

まあなんだか不自然だったかもしれないが、理屈は通ってるし、良かっただろう。とりあえず入り口であいつらと出会うのは阻止した。入口についた。

……

……相変わらずの混みようだ。去年より混んでもかもしれない。

「混んでるね〜」

「でも、まだ場所は結構残ってるみたいね。」

「まあ、ちよつと時間に余裕見てきたからな。」

「エロ男几帳面だからね。意外と。」

「意外じゃねーよもともとっていうかもともとA B型だし。」

「う、ん。」

岳は入口のすぐ近くらへんのところに3人にしては大きめのシートを敷いて、ガムテープで地面に張り付けた。

「よし、なんか食べに行くか。っていうか遊ぶか。」

「うんつつつ！」

今よく考えたら、優輝はなぜ七海を誘わなかったのだろう。気まづかったのかな？それとも七海が断ったとか・・・いや、それはないな。七海は優輝の事本当に好きだから、チャンスは一つも逃さないだろう。だとしたら、やはり優輝が女子を誘ったか、誘われたのだろう。浮気か・・・そしたら七海も浮気か。

この二人の関係、結構心配だ。

「ねね、わたあめ食べようよ！ あー！射的だー！ うほっ、焼きそ

ば、岳、買って！」

お前はゴリラか。

「俺も買うか。玲奈は？」

・・・玲奈は、焼きそば屋の隣の今川焼の場所で眼を輝かせている。渋いなあ。

「玲奈、玲奈。」

「ん？」

「焼きそば、いるか？」

「うん。」

「一つでいいよな？」

「うん」

七海と岳は焼きそば屋の行列に並ぶ。玲奈はあそこで放っておいたほうがいいだろう。焼きそば買い終わったらかまってあげよう。珍しく玲奈が没頭モードだから、余計に絡んではいけない。

まだそんなに列は長くなかったので、順番はすぐに回ってきた。

優しそうで元気そうなおじさんが店をやっているっぽい。

「へいいらつしやいっ!」

「えっと、焼きそばを3k・・・」

「焼きそば5個で!」

「5個かい?」

「はいっ!」

おい七海、俺はと玲奈は一つずつしか食べないんだぞ。お前は今5個といったぞ。その意味がわかるかい?

と、眼で訴える。

・・・焼きそば好きにもほどがある。

「カップルかい?」

「いや、違います。。近所の腐れ縁です。」

「そうは見えないけどなあ・・・二人お似合いだな。へい、焼きそば5つで6百円だけど、(安い)カップル割引で5百円!カップルには赤字覚悟だぞ」

「いえ、だからちがいますって。ありがとうございます。」

岳が焼きそばをもらった瞬間に、七海が飛びついてくる。

「いっただっきま〜す!」

夢中で食べているので、対応に面倒くさくなって玲奈のほうに行く。

まだ今川焼と見つめ合っている。いつものクールな感じと違ってこれもこれで可愛いなあ。「玲奈、今川焼食べたいのか?」

「うん・・・」

「じゃあ買ってやるよ。いくつ食べたい?あと焼きそば。食べたいときに言ってね。」

右手の袋の中に入っていたはずの4つの焼きそばは、いつの間にか3つと二つのゴミになっている。

・・・もう食べたのか。ひとつ。

「4つ食べたい。」

「・・・ん!?!」

「4つ食べたい。」

「お、おう。じゃ、並ぶか・・・」

「うんっ！」

七海の焼きそば病並みにひどいかもしれないな・・・

今川焼はあんまり人気じゃないのかな？すぐ順番が回ってきた。七海は食べ物だったらたぶん何でも食べるけど、岳はあんまりお金を使いたくないので5個買った。

玲奈は今まで見たことがないぐらいの満面の笑みで今川焼を食べ始める。

焼きそば屋のほうに行つて、七海ともう一度合流する。

七海は岳と合流した瞬間にもう一つの焼きそばに手を出した。

「二人とも、次行きたいところとかあるか？」

「わはしわはーめはえふあい」

「食べながらしゃべるなよ七海。はしたない。」

七海は残り二つとなった焼きそばのうち一つに手を伸ばす。

「駄目だ、それは俺と玲奈のだ。食べ過ぎると太るぞ。つてかもうちよつとゆつくり食べるよ。今二口で食べただろ。」

「ごっくん、ううん、一口だよっ！」

「・・・」

玲奈にもどこ行きたいか聞こうとしたけど、あいにく彼女は今川焼を口いっぱいにはおぼっている。

「じゃあわたあめ食べにいこー！」

焼きそばを食べ終わった七海が二人の手を取ってわたあめやの方向へ向かっていく。岳と玲奈は七海の思うがままだ。

「あっ・・・」

突然、七海が二人の手を引っ張ったままいったん屋台と屋台の間から道の外に出る。

「七海、どうしたの？」

玲奈は口にはおぼったままの今川焼のほうが優先順位が高いらしく、（こいつふたつは入ってるな・・・）あまり疑問は感じてないらしい。

「い、今、向こうに田島君が見えて・・・」

「・・・ ごめん俺気づいてた。」

「うん・・・」

「まあばれなきや大丈夫だから。 楽しもうぜ。 せっかく来たんだから。」

「っていうか・・・」

「ん？どした？」

「田島君ほかの女の子たちと来てる・・・」

「まあ、ちよつとひどいかもしれないけど、冷静になって考えてみればお前も同じことしてるからな。」

「そっか・・・」

「とりあえず、あいつらとできるだけ・・・っていうか会わないようにどうにかしてればいいだろ。」

店の隙間から、あのグループが通り過ぎて行ったのがわかる。

「玲奈には言うなよ。 気づかれないように何とか1日乗り切ろう。」

「うん、」

「玲奈、行くぞ。」

玲奈はこくつとうなずいた。

お祭り（3） リメイク

とりあえず3人は玲奈が行きたいといった金魚すくいに行く。

「うわあ〜金魚だ〜！」

今これを言ったのは玲奈だ。あの玲奈だ。

相変わらず玲奈のテンションがおかしい。こっちまで調子がくるってくる。

玲奈はいつの間にか金を払って着物を丁寧な手で邪魔にならないようにしてかがむ。

七海もお金を払って玲奈の隣に座る。

岳は、一応周りを見張っておく。まあさつきあっちに行つたからあのグループはこないだろうけど。

「岳はやらないの？」

七海がしゃがんだまま振り向いてちよつと寂しいよ、みたいな顔で聞いてくる。

やっぱり、なんだかんだいって可愛いんだよなあ。胸もちよつと見えそうだったりするし。

「ん、俺はちよつと。」

「そっか。」

これは二人の姿を見ていたほうが得だ。キラキラして見える。

仲良く2匹ずつとって、二人とも金魚を袋に入れて次の場所に行く。

「次どこいこっか？」

「わたし射的行きたくい！」

「射的かく〜！よしっ！俺もやるぞっ！」

「私もやるっ！」

3人で3百円払って、1人5発もらう。けっこう本格的な射的みたい。

一回に2人ずつしかできないので、まずは玲奈と七海にやってもらう。

2人とも一番上の段の大きいくまさんを狙ってるようだ。

だいたいこういうのって、落ちないようになってるんだよね。当たっても、絶対落ちない。

七海は早々と5発使い切って、クマをあきらめて最後に落としたチョコボールだけもらった。

玲奈は最後までくまを狙い続けたけど結局何もとれなかったらしい。

「岳、お願い!」

「エロ男く頼む!」

確かに、あのクマは結構可愛い。つぶらな瞳が「僕のことを取ってください」みたいにこっちを見つめてる。(あくまで個人の妄想です)「わかったよ、あのくま、とりやいいんだろ。」

「ありがとう!」

クマを含めみんなが見守る中、岳は極度のプレッシャーに襲われながらクマさんを狙う。：確かにこれは落ちない。何度当てても、クマはその瞳に涙を浮かべながら見つめるばかり。自分から動こうとはしない。残り2球。岳はある奇策を思いついた。

岳は店の左端のほうに行き、クマから角度をつけた場所で銃を構える。

「岳、くまさんあきらめちゃったの?」

「きつとエロ男のなんか考えがあるんだよ。」

そう、その通りだ。

岳はその場所から、クマより岳側(手前)にある、裸のガンダムミュー(一応名前を出しちゃいけないのかなあと思いw)ファイギュアを打つ。ほぼ横からだ。様子見の一発と思っていたが、ガンダムミューファイギュアをその角度から倒し、それによってその右のクマを倒す。ドミノ倒しだ。クマは地面に落下する。店主は渋々クマとファイギュアをとり、岳に渡した。ちなみに岳は残りの1球で適当にキューヒーのあの赤ちゃんのやつをとった。

七海と玲奈は子供みたいにきやつきやとはしゃいでいる。よつぽどクマさんがほしかったんだろう。うん、気持ちはわかる。ちよつと荷物はかさばるが、その3匹と一緒にお祭りを回ることにした。

そろそろ花火の時間だね、ということになり、3人は元の場所に戻る。場所選びは正解で、きれいに見えてみんな満足していた。岳は花火に照らされる七海や玲奈の笑顔を見ると、なんとなく、これが一生続くといいな、と思うのであった。

もう岳もあのグルーブのことなんか忘れ、全力で楽しんだ3人は岳の家に帰ってきた。

岳は「家のことをやらないといけないから、」と、女子二人を先にお風呂に入らせた。

「ねえ岳。」

お風呂先入ってと言われた七海は何かハツと気づいたかのように岳の名前を言った。

「ん、なんだ?」

「もしかしてさ、洗濯とか、やってくれちゃうの?」

「うん、やるつもりだけど。七海はまだ明日も明後日もいるわけだし。」

「そうだよね、岳がやるんだよね?」

「いや俺しかいないからね、そりやそうなるでしょうね」

「・・・えくやだあ。」

「んでも、しょうがないでしょ。もし七海が洗ったら俺のパンツもあるからな」

「んく分かったあ。あんまり見たり触ったりしないでね。特にブラとか・・・」

「私のもあんまり見ないでね」

どこからかひよこっつと出てきた玲奈が念を押す。

「見ねーよ。ってかあんまりってなんだよ!ちよつとはいいのかわい!」

「べ、別にいいよ・・・?」

「・・・みません。早く入って。」

「ごめんごめん」

「まったく:俺は下心だけの人間じゃないんだぞ?」

「知ってるよお。」

そう言って七海と玲奈はお風呂に向かった。

岳の家の浴槽は結構広かったので、玲奈と小柄な七海は二人とも脚を延ばすことができた。

「ふわ〜、今日は楽しかったねえ〜」

「そうだね〜、今川焼も食べれたし、今川焼も食べれたし。」

「あ、そんなに今川焼好きなんだね…」

「うん！私、さきシャワー浴びていい？」

「うん。どうぞどうぞ」

立ってシャワーを浴びる玲奈を見ていた七海は、「あそこのまわりまだ玲奈ちゃんもつるつるなんだね〜」と自然にいった。

「え？まあ、まだね。七海ちゃんもパイパンでしょ？」七海と玲奈の口から、おそろくここでしか出ないような言葉が出てくる。

七海と玲奈がシャワーの交代をすると、玲奈が湯船につかりながら「岳って好きな人とかいるのかな、」とつぶやいた。七海はボディソープを全身に塗りながら、答えに迷った。この前、岳に好きだと言われた。でもそれが本当かどうかはわからない。本当だったとしても、この間柄だと友達として、という意味なのかもしれない。とりあえず七海は「どうだろうね」と曖昧にしておいた。

「あ！」

「七海ちゃん、どうしたの？」

「寝間着とバスタオル、洗面所に持ってくるの忘れた。」

「あ！私も！」

「どうしよつか。」

「何かで隠していく？1人でも行けるし。」

「何かって？」

「う〜ん、岳のバスタオルとか？」

「あ、ううん、それぐらいしか、ないもんね、」

「どっちがいこつか？」

「私行ってもいいけど？」

「私も！」

「じゃあじゃんけんにしよう！」

結果は玲奈の勝ち。玲奈は岳のバスタオルを体の前側だけ隠すように使った。

七海には、玲奈のこれからの行動がおそらくわかる。とりあえず七海の視界から消えたら、全身をちよつと体に絡ませるように拭き、おまんこにバスタオルを入れて・・・

玲奈は、七海の予想通りに動いた。

バスタオルで体を隠しながら2回の岳の部屋に上がる。

「岳、入るよ。」

「うん、、、つて！何その格好！つてかそれ俺のバスタオル」

「ごめんね、七海ちゃんも私も、バスタオルと寝間着洗面所に持つてくの忘れちゃつて、しやがむから、見ないでね。」

「うん」

玲奈の体は、全身を拭いたつもりなのかもしれないけど、ところどころに水滴がついていて、なんか持つちりしているように見えて、とても色っぽい。

「ちよつと、にやにやしないですよ。」

それを、玲奈もにやにやしながら言う。

「し、してないよーちよつと、色っぽいなあ、と、、、」

「見たい？」

「何を？」

「ちよつとだけ。おっぱい見せてあげる。」

よほど自分の体に自信があるんだろうか。確かに魅力的ではあるが。

岳はずつと黙っていた。

玲奈は、左胸を乳首がぎりぎり見えるぐらいまで出した。

「うわあ、、、なんか、もちもちしてそうで、おっきいね・・・」

「ありがとう。触ってみる？」

「いや、それはいいや笑」

「いいんだ、じゃあ、見せてあげたからさ、岳のおちんちん、さわっていいっ！」

「いや、よくない、、、」

「駄目。触るの。」

玲奈は強引に、岳を動けないようにして岳の棒をズボンの上から触った。

「うわあ、起ってるね笑 生で見ちゃ、、、だめ？」

「生？だめだよだめ。むりむり。」

玲奈はそれを聞くと、いきなりバスタオルを下して完全に全裸になった。

「玲奈、ちよ、玲奈！」

岳は玲奈のほうを見ることができない。

「エロ男、そのビンビンの悪い子、気持ちよくさせてあげる。」

玲奈は、岳のズボンを無理やり下した。岳は玲奈に脚をつかまれていて身動きが取れない。

「ちよ、玲奈？玲奈？やめよう？だめなことだよ？これはやつちやいけないことだよ？」

「・・・私の事嫌い？」

「いや、嫌いじゃないよ、でも、、、」

玲奈は岳の下着を下した。その棒があらわになる。

「うわあ、おっきいねえ。」

「ねえ、玲奈！」

玲奈は岳の言葉なんてお構いなしに、自分の口に岳の棒を入れる。

「やりすぎだって！」

もはや玲奈に岳の言葉は聞こえてなかった。

激しく、そして優しく、玲奈は口と舌を動かす。まるで経験者のようなテクニクだった。(らしい)

そろそろ遅い。少し胸を触らせてあげるのかな、ぐらいは、七海も予想していた。それくらい許した。でも、それにしても、遅い。七海は、裸ながらも、濡れた体で、なるべく音を立てないように階段を上った。

「玲奈ちゃん、、、」

七海が岳の部屋に入る。

岳と玲奈のプレイはもう終わっていた。でも、部屋には独特のお

いがたちこめ、玲奈の顔にはところどころに白いドロドロとした液体がついている。もう、言い逃れできない状況だった。

「な、なんで？なんで七海裸なの？」

「玲奈ちゃん、何してたの？」

「え？」

「今、何してたの？」

「え、いや、あの、、、」

「七海、」

「岳に聞いてないの！玲奈ちゃんに聞いているの！」

岳は、こんな七海、見たことがなかった。完全に、自分が、本当に七海を傷つける悪いことをやってしまった、取り返しのつかない、もう七海とはやっていけないかもしれない、とまで思った。それぐらいの七海の興奮度だった。

その七海の眼には、もう大粒の涙が浮かんでいた。

同居、なのかな？二、三日目 リメイク

岳は、玲奈と一線を越えたいいけないことをやりそうになってしまっているところを七海に見つかってしまった。意を決した玲奈は、本当のことを話すことにした。

「私が、無理に、したの。全部私が悪いの。岳は何もしてないの。」
玲奈は必死に岳をかばおうとしている。

七海は、七海は裸体のまま岳の部屋を逃げるように出て行った。かといって、荷物は岳の部屋にあるので、逃げるわけにはいかないが。「なんか、、、悪いこと、、、しちゃったな。」

「・・・ごめんなさい・・・」

その玲奈も、眼に大粒の涙を浮かべている。

いくらライバルといっても、友達は友達。友達どころか、玲奈にとっても、七海にとっても、一番の親友なはずだ。こんなことが許されるわけがない。

「謝る相手、違うんじゃない？俺も一緒に謝るから、ちゃんと、七海に、謝ろう。」

「うん。」

そう言つて、二人はお風呂場に向かった。

七海は湯船で体育座りをしていた。

「七海、入るよ?」

岳は一応ドアをノックしてひと確認すると、お風呂場に入った。玲奈もそのあとに続く。

七海はうずくまって、「もう二人の顔なんて見たくない!」みたいにしてずっと下を向いている。

「あのだ、さつきはごめんね?」

岳は体育座りの七海と同じ目線になるようにしゃがんで、小さい子と話すようにやさしく七海に接した。

七海の返事はない。

「七海ちゃん、ほんとにごめんなさい。悪いと思ってる。謝っても謝り切れないことだと思ってる。2度とこんなことはしないから。」

「・・・わたし、でる。」

そういつて、タオルだけを持って七海は2回に昇って行った。
「俺、七海のことどうにかしてくるから、今はちよつとここで待っててくれる?」

「うん、わかった。」

岳と七海は昔からいつも一緒だ。岳は七海のこととはよくわかってるほうだと思っていた。自分にも責任を感じていたからか、自分と何かしようという気が見えた。

「七海、」

「・・・なに?」

答えてはくれたが、相変わらず顔を見てくれようとはしない。

「さつきも言ったけど、本当にごめん。俺も、謝って済む問題じゃないってわかってるけど... あんな、俺も玲奈も、お前のこと一番の友達だって思ってる。だから、自分たちが犯したことだけど、七海が傷つけるようなことしたこと、すっごい後悔してるんだ。俺と七海はさ、性別違うし、かといって、恋愛系の関係じゃないから、これからかわりは少なくなるかもしれない。けど、玲奈とお前は一生の友達だろ? そう前言ってただろ? だから、俺はもういい、玲奈だけでいいから、許してやってくれないか?」

「やだ。もう二人とも嫌い。」

「・・・そっか、裸だと風邪ひくぞ。」

「べつにいい。」

「じゃあ、寝てる間にいろいろつけておくからな。」

「つければいいじゃん。」

「わかった。おやすみ。」

「・・・」

岳は部屋を出て、玲奈のもとへ向かった。

「たぶん大丈夫そう。」

この言い方はなんか不謹慎な気がしたが、まあそんなことは今どうでもいい。

「なんで?」

「幼稚園のころからそうだったんだよね、名波が何回屋のことがあって、一人になって寝ようとするときは、冷静になつて、どう謝ろうか、つて、考えてる時なんだよね。たぶんだけど。だから、大丈夫だと思う。」

「そっか、良く知ってるね、七海ちゃんのこと。」

「まあそりや長い付き合いだからね、」

「ねえ、岳つて、七海ちゃんのこと好きなの？」

「どうだろうね？」

「まあいいや。」

「ん、俺まだ風呂入ってないから、入ってくるね。」

「うん、私なんかすることある？」

「ああ、できれば、洗濯機回してほしいんだけど、お願いできる？」

「わかった。」

「俺の服も脱いだらね。」

岳は浴室には言つて服を脱いでからドアを開けて、顔だけ出して玲奈に洗濯物を渡した。

玲奈は一通り設定を終わらせ、二階に戻った。

お風呂に入りながら、岳は考え事をしていた。

玲奈の質問に対してだ。

おそらく、今、恋愛的に好きという人はいないだろう。七海が同じようなことを前に言っていたが、一緒にいて楽しいのは、明らかに七海と玲奈だ。二人のどっちを選ぶか？それは、岳にもわからなかった。はつきり言つて、みんなと一緒に楽しく過ごしたい、というのが、岳の考えだ。と、そんな話は置いといて・・・

二階に上がつて。岳も寝る準備を始めた。二人とももうすでに寝ていた。

二人とも、顔に涙の跡が残っている。玲奈もいろいろ考えていたのだろうか。

「あ、そっか、七海の服着させないと。」

そう独り言を発して、岳は七海のバッグの中をあさった。

「どれだ？つていうか、なんだよ、この派手なパンツ。勝負下着かよ。」

寝間着は、これかな？七海く、パンツ履かせるよ。」

なんて簡単に言っても、寝ている人間に下着を吐かせるのってとても大変な作業だ。

丁寧に、気づかれないように、脚を動かして、無事に履かせることができた。ちよつとまあお股の部分を隠しているだけのようにもみえるが、十分だろう。

ズボンと上はばれそうだったので、そのままにしたが、さすがに胸の部分は隠さないと七海が起きた時に大変なことになりそうなので岳の分の布団もかけてあげることにした。・・・今、七海の胸見放題も見放題だが、そういう雰囲気、というか気分じゃないので、それは今度にお預けすることにした。

次の日、岳と玲奈は早くに起きたが、七海は昨晚泣きつかれたのかなか起きなかつたので、朝ごはんができたのを知らせに岳が七海を起こしに行った。

「七海、ぐ飯だよ。」

「ん!？」

七海は飛び起きた。

「ごはん、もう朝だつて。」

「シヨパン？」

「飯だよ飯！なんでご飯がシヨパンになるんだよ。」

「リビング、行かなきゃあ。」

「ちよ、おまえ、大事なところがいろいろ丸見えだぞ。」

岳は一応腕で目隠しをする。

「やだ、変態っ!」

ようやくちゃんと目を覚ましたようだ。

「なんでおっぱいもしたもほとんど見えてるの!昨日岳着けてくれるつていたのに!」

おっぱいって普通に言ってしまうところ、さすがだと思う。

「大変だったんだよ!これでもやることはやったの!」

「ふーんだ。どーせわたしのあんなところやこんなどころを見てムフフんしてたくせに。」

「みてねーよ。そんな空気じゃなかっただろ。（ってかムフフんするってどういう意味だ）」

七海はその言葉で喧嘩中だったことを思い出したのか、いきなり真顔になって無口でリビングに向かった。

岳と玲奈が会話をして、七海に話を振っても、七海は無言のままだった。やがで二人の会話もなくなり、みんなが食べ終わるまでリビングには悪い空気が漂っていた。

七海は食器類を自分で片づけた後、リビングを出て行こうとした時、突然、「昨日、わたしも、なんかひどいこといっちゃってごめんなさい。ほんとは、みんなのこと大好き！」と満面の笑みとともに言い、ちよつと照れくさそうに顔を赤くしてまた下を向いた。

そのあとは、何もなかったかのようにならぬ仲良く過ごした。

七海は素の自分になれた、みたいな感じで小学生のようにはしゃいで、お泊りを楽しんでいた。玲奈が帰った後も、七海と岳で恋愛映画のDVDをみたり洗濯物を干すときに岳がブラジャーをわしづかみして炊いたとかしてなかったとかでちよつとした口論になったり：：とにかく、楽しい三日間を過ごした。

美奈ちゃん！

火曜日、少しみんなから遅れて学校についた岳は、いつもよりすごい賑わい（というか騒ぎ）に違和感を覚えた。
「どうかしたのか？」

岳は、隣の席の七海に聞いてみた。

「ああ、なんかね、このクラスの転校生来るんだって。」

「え？まじで？二学期始まったばっかなのに。」

「ね。それみんな言ってる。」

「え、それってさ、女子？」

「はあ・・・岳はそうやっていつもいつも・・・知らないけど、Dカッ
プの超美少女だといいいですねー」

「うん！だといいなー！」

「気持ち悪い・・・」

その時、先生が教室に入ってきた。

「えーつとお、聞いてる人もいると思うんだけど、今日、このクラスに
転入生が来たので紹介したいと思いまうす。」

軽い先生に手招きされて1人の女子が入ってきた。女子だ！女子
だ！女だ！思わず顔がにやける。

・・・胸は、まな板に等しい気もするが、さすがにAはあるだろ
う。

「えーつと、水布江です。水布江美奈です。よろしくおねがいしま
す。」

おとなしい性格なのか、それしか最初はしゃべらなかつた。その女
子は、なぜか岳の、斜め後ろ、つまり七海の後ろの席になった。

一応、声をかけてみることにした。

「あの、筑波岳です、よろしく。」

「よ、よろしくおねがいます、...」

なんか、照れてるところがめっちゃ可愛いんですけど。・・・って
いうか、顔が神。

休み時間、彼女のもとにはたくさん女の子がたかった。

「わたし、七海っていうの。美奈ちゃんだよね？よろしくね！」
「はい・・・よろしくおねがいます、」

「敬語使わなくて大丈夫だよ！仲良くしようね！」
独占して彼女と話していた七海だが、みんなも話したがっていたのでさすがに空気を読んでその場から離れた。

帰る時も七海は積極的に話しかけた。

「ね、美奈ちゃん、今日、この後空いてない？一緒にいろいろしよ！」
「別に・・・いい・・・よ」

「やった！美奈ちゃんの家ってどこなの？」

自然に話しながら学校を出る。

「坂下の、ステンデーズ・・・の、となりのマンション・・・」

「あ、そこ知ってるよ！あの、隣の班にき、江川玲奈ちゃん、ついていたのわかる？」

「あの、、、可愛い子？」

「そうそう！そのこがね、ステンデーズの向かいの家に住んでるんだよ！」

「へえ・・・」

「あ、今日、この後さ、美奈ちゃんの家行って、、、あ、そっか、まだ片付けとか済んでないよね。あ、じゃあ、一緒に班だった岳つて人わかる？その岳の家行こう！」

おとなしい人と一緒に入ると、より七海のおしゃべり度が際立つ。

「筑波君？」

「そう。わたし、家帰ってちよつとしたら美奈ちゃんの家行くから、待っててもらっていい？」

「うん。305号室だよ。何か持ってくものある・・・？」

「ううん、まだきたばっかで忙しいんだから、大丈夫だよ。」

「わかった、じゃあ、待ってるね。」

「じゃね、ばいばい！」

美奈は七海に小さく手を振ってマンションに入っていった。

家に着いた七海は私服に着替えていろいろ準備をして、まず玲奈の家に向かった。

「なくに〜?」

「今からさ、美奈ちゃんと岳んち行くこうと思うんだけど、玲奈ちゃんも来ない?」

「ああ、行くー!ちよつと待っててね、あがってて。」

「お邪魔しまーす。うわあきれいだねー玲奈ちゃんち。」

「そうかな?あ、でも、お母さんが潔癖症だからね。」

「おそうじアドバイザーだもんね」

玲奈の母親の江川清子は、ちよくちよく雑誌やテレビに出るおそうじアドバイザーをやっている。美人なので人気だが、玲奈は母親がそういう仕事をしているのをあまり気に行っていないのか、親が江川清子だということは七海と学校の先生ぐらいしか知らない。

「うん。．．．そういえばさ、七海ちゃん最近田島君とはどうなの?」

「うーん、特に何もないかなあ。最近学校でしか会ってないし、学校でも全然話してないし．．．接しにくいんだよね、まあそういう関係だっというのもあるのかもしれないけど、岳と違ってもともとちよつと放しにくい人だから．．．」

「そつかあ、．．．なんかもつたないね。」

「そうだね、．．．でも、まだ好きなんだよ!あっちかどうかはしらないけど．．．」

玲奈の家を出てからも、話は続いた。

「玲奈ちゃんはまだ岳のこと好きなんだよね?」

「うん、そうね。あ、あの、蒸し返すようで悪いけど、この前は本当にごめんね。友達なのに。私、七海ちゃんが一番のお友達だと思ってるから。」

「もう大丈夫だって。わたしも玲奈ちゃんが一番の友達だと思ってるから、これからも仲よくしよーね!」

「うん!ありがとう。」

「ここだよ!美奈ちゃんの家。」(というかマンション)

「あ、すぐ近くだったのね(笑)」

「そだね。」

美奈はすでにマンションのホールで待っていた。

「美奈ちゃん！来たよ、玲奈ちゃんもいるけど大丈夫だよね？」
「もちろん。」

「じゃあ、行こう！」

「ここだよー！岳の家。」

そういつて、七海はインターホンを鳴らした。

「はい」

「あ、岳く？」

「え、、なんで七海・・・」

「何その反応！いれてー！」

「わーわかつたから、誰かと一緒？」

「えっとね、玲奈ちゃんと、美奈ちゃんと一緒。」

「美奈ちゃん？」

「ほら、水布江さん。」

「あ、水布江さんか。今鍵開けるから待ってて。」

3人は岳の家に入った。

「おじやましまーす」

「あ、やっぱいい匂い。」

「・・・」

なぜかわからないけど、美奈はきよどっている。

「何しに来たん？」

「え？うーん、遊びたかったから？」

「小学生かよ。」

「は!？」

「ああ、ごめんごめん、幼稚園生だったね。」

岳は七海の髪をぐしゃぐしゃと雑に扱う。

「俺のタオル、使っていいから、手あらってね。」

「・・・うう、」

何か言いたげな七海だったが、美奈がいたからかあきらめた。

「手を洗っている途中に、七海は皆にどこから来たのか聞いた。

「東京から来たの。」

「東京？」

「東京。」

「すごい」

「・・・」

「兄弟は誰かいるの？」

「お兄ちゃんがいる。えつとね、高校三年生。大川さんは？」

「わたしは一人っ子なの。」

「そっか。」

いつの間にか美奈が自分から話すようになってきていた。

「岳、人生ゲームやりたい！」

岳の部屋に入った七海は、何を思ったのかいきなり叫ぶように言った。

「人生ゲーム？」

「あつたでしょ？」

「あるけど、それマジで言ってるの？受験生だよ？」

「息抜きだよ息抜き！」

「ん、じゃあ、一回だけね。」

「やったー！」

「やっぱりお前幼稚園児だな。」

岳はため息交じりにいった。

「車何色がいい？」

「赤！」

「水色」

「じゃあ、オレンジ・・・」

「んじゃ俺黒。七海、お前がやりたいって言ったんだから銀行やれよ。」

「わかってるよー！」

人生ゲームをやりながら、岳がエロいだの、あの先生は話が長いだの、いろんな話をした。

「おじやましましたー！」

「おじやましましたー！」

「おじやましました・・・」

「おう。じゃあな。」

「うんじゃーねー!」

「なんかいきなり誘ってくだらないことしちゃってごめんね。」

「ううん全然!楽しかったよ!」

「うん・・・わたしも楽しかった。今日はありがとう。」

「そっか!よかった!」

何のために来たのか分からなくなった美奈だが、なんとなく楽しかったし、これからは楽しみになった。

美奈はこの3人とすぐに仲良くなった。

告白（つて、恋ではない）リメイク

教室の席もみんな近かったり、登下校もときどきと緒にしたりと、美奈は完全に岳七海玲奈に溶け込んだ。

しかし、突然玲奈が思いもよらぬことを言い出した。

「どういうこと!?!」

「だから、引っ越すの。」

「なんで?」

「お父さんが今（単身赴任で）住んでる札幌の家に行くことになっちゃったの。」

とこのことで、玲奈が札幌に引っ越すことになってしまったのだ。

その話を、今七海が玲奈の家招かれて聞いている。

「いつ、引っ越すの?」

「年明け。冬休み中。」

「そんな・・・」

「でも、まだ今すぐ行くわけじゃないし・・・」

「いつか帰ってくるの?」

「うん。最長でも大学入学までに帰ってくるって。」

「じゃあ、高校はいつしよに行けないの・・・?」

「うん、ごめんね。」

「いや、家庭の事情ってやつだから玲奈ちゃんは全然悪くないけど・・・そうだ!これからさ、みんなでいろんなところ行って、思いで作ろ!」

「思い出?」

「そう!みんなだ例えば遊園地入ったり水族館行ったりして、思いで作るの!」

「楽しそう!」

「でしょ!わたし考えとくね!　・・・天候のこと、みんなにはいつ言うの?」

「先生には言ったけど、クラスで発表するのは終業式の日にするつもり。あ、岳と美奈ちゃんには先に伝えるよ。」

「そっか……。じゃあ玲奈ちゃんが岳たちに言うまではわたしも黙ってなきゃいけないのね。」

「うん。よろしく。私から言いたいから。」

「わかってるよ。は！わたし、時間だから帰るね！」

「あ、ごめん！ばいばい！」

「大丈夫！ばいばい！」

玲奈は、七海が帰った後、すぐに岳と美奈に電話した。

玲奈も、もちろん引越したくなんてなかった。

せつかくこんな仲良くなった七海や岳、美奈たちと、もつと、ずっと、過ごしたかった。

でも、そんなきもちはこころのおくにしまって、楽し気に日々を過ごしていた。

10月になったころ、七海は本格的に4人の思い出づくりの計画を立てていた。

岳や美奈も招いて、（玲奈抜きで）みんなで話し合った。

「で、、みんなはどこ行けばいいと思う？」

「いっぱい行きたいけど受験生だから、、どっか巡るか？」

「じゃあ、シヨツピングとか！」

「おお美奈ちゃんいいねー！せつかくだから東京まで行こう！美奈ちゃん案内よろしくね。」

「うん！」

「あとは、、誕生日会とか？」

「いいねー！12月23だからクリスマスも兼ねてパーツとやつちやおう！」

「お泊り会とかはどう？」

「そうだね、でも受験の時期だから勉強会ってことにしよう。勉強合宿！」

「いいねー！」

「じゃあ玲奈ちゃんが引越しちゃう前に、東京とお誕生日クリスマスパーティーと、勉強合宿しよう！きまりだね！」

「よし、じゃあ今からいろいろ準備するか。」

「わたし、東京のいい服屋さんとか探しておくね。」

「うん！みんなでがんばろー！」

「おおー！」

さっすく七海たちは玲奈に予定を話すことをした。

「れーなちゃん！」

「ん、なあに？みんなして？」

玲奈はちよつと恥ずかしそうにしている。

「あのね、玲奈ちゃん、冬休みに北海道にいつちやうじやない？」

「うん。」

「だからね、みんなで玲奈ちゃんにいっぱいいろいろしてあげようと思ってるー！」

「いろいろ？」

「そう！例えば東京でショッピングとか！」

「わたしが案内するよ！」

「東京!?楽しそう！」

「でしよ〜？でも一応受験生だから、あんまり時間は取らないようにするけどね。」

「一応ってなんだ一応って。」

「いや、別にそんな深い意味はないって！」

七海と岳が話していると、玲奈が笑みをこぼした。

「玲奈ちゃん何かがおかしいんだよー！」

「いや〜、なんか、やっぱり私、みんなが好きなんだな〜って思って。」

「一緒に入るだけで楽しいな〜って思って。」

「そんな寂しくなること言わないでよー！」

「ごめんごめん、でも、、、ほんとに、ずっと一緒にいたいな。」

「それはもちろんわたしも一緒にいたいけど、、、だから、いっぱいあそぼー！」

「うん！みんなありがとう！」

本当にいい友達を持ったなと思った玲奈であった。